2007

大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和六年二月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人　編輯

二月號

（第百四十四號）

帝國圖書館藏

櫻正宗

醇良清酒の代表

醸造元 山邑酒造株式會社

一家の
ご氣分は
晩しやくで
引立ちます

宮内省御用達 山邑酒造株式會社

6—1—3—B

帝國書院

春の御支度

丁子屋では　今春
の流行を代表する

洋服類
呉服類
お子供用品
御家庭用品

等すつかり取揃え
皆様の御來臨を待
ち居ります。

丁子屋

金剛山　金剛煎餅
金剛羊羹　金剛饅頭

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）

金剛おこし
金剛しるこ

京城本町二丁目
電話二十七番
本局四七五番
龜屋商店

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗編
三和燒
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同 本町二丁目
電本五五四

ストーブ

弊店は石炭給供者の立場から實驗研究の結果左の三種を最優良品として各位にお勸め申上ます

キヨーワ・ストーブ　十五圓より三十圓まで

センター・ストーブ　十八圓五十錢より八十五圓まで

アルバン・ストーブ　三十六圓より五十二圓まで

生氣嶺炭

鮮内での燃料は鮮内炭を使用しませふ。
生氣嶺炭は鮮内第一の優良炭で昨年大博覽會に於て總督府燃料研究所から石炭館で發表せられた鮮内著名石炭の分析表に依て其優秀なる事を證明されてゐます。

價格　一噸　拾五圓
　半噸　七圓五拾錢
　一叺　壹圓貳拾錢

多量御利用ノ向ハ時に御相談仕り候（市内配達は無料）

京城明治町一ノ五四

櫻井秀專商店

電話　本局三〇〇二番　本局四〇〇二番

釜山郊外

釜山驛より自働車
賃五拾錢

朝鮮の別府

海雲臺溫泉舘

宿泊料（一泊二食）二圓二拾錢から四圓七拾錢まで
（茶代廢止）

東洋第二位のラヂウム
溫泉（電燈設備完成）

溫陽溫泉

京城とは
目と鼻——
朝鮮一の樂天地

のんびりとした
溫泉氣分
言語道斷です

人若し一日の
閑あらば
忘れず溫陽へ！

神井館

資本金　五百萬圓
諸預金　貳千參百五拾余萬圓
殖産積金契約高　參千百拾余萬圓
代理店　朝鮮殖産銀行鮮内支店及派出所

營業案内及住宅資金月賦貸パンフレット御申込次第贈呈致します。

京城府南大門通二丁目

株式會社

朝鮮貯蓄銀行

電話本局四五八〇番
振替京城四〇〇六番

取締役頭取　森悟一
專務取締役　木村和水

營業種目
殖産積金　殖産貸付
普通貯金　積金擔保貸付
特約貯金　預金擔保貸付
据置貯金　證券擔保貸付
定期預金　不動産抵當貸付

福德無盡は從來の無盡を合理化したるものにして
融通＝には低利に辨濟を極度に容易ならしめ
貯蓄＝には安全に且つ利廻を最も高からしめ
掛込＝に苦痛なくその實行に趣味を伴はしめ
勤儉の美風と地位の向上に資すべく組織してあります

京城府南大門通三丁目

福德無盡株式會社

電本一〇三〇同一〇三二

當社の無盡に御加入下さる事は資産造成の道程に向つて既に第一歩を踏み出されたものと云ふことが出來ます
御加入の申込は極く簡單であります市内及附近は電話で御通知下されば直に社員が伺ひます、遠隔の地方は御照會次第すべて便宜に取扱ひます
●福德無盡時報（毎月發行）及福德無盡案内は御一報次第送呈

謹賀新年

尼崎伸銅株式會社
水谷九二吉

平壤府
大橋恒藏

大澤商會京城支店
相羽恒次

高級化粧品

金ばこ

○巴里製化粧品のみが最高最上の化粧品ではありませぬ。わが國にも高級化粧品『金箱』があります。

○一たび『金箱』をお用ひ下さい。その色その香、おのづからに恍惚となること請合。これ以上の家庭和樂の源泉はありませぬ

○『金箱』は精製して極少量を市に出しますそれ故ドコの店でもあるとはいへませぬ。京城にては三越、丁子屋等第一流の百貨店にてお求め下さい。

鮮産愛用
の時代來る
漫りに内地酒に
雷同附和しては
いけません

その香
その味
その醉心地
ほんによい酒『福迎』

中流階級の御常用酒として
先づその質を吟味し
値段を極力廉にし
一度これを御飲みになつたらもう
トテモ〳〵お忘れ出來ないのが『福
迎』の特色でございます

京城本町（電車終點）
難波酒造場
電話 本局一四六一 光化門一四五一番

二月號目次

京城の松竹梅……（渡邊醫院）渡邊晋氏（二）
品川雜記……（中央朝鮮協會）中島司氏（三）
緣日……（本町二丁目）堀內滿輔氏（四）
人間斷相……（南山本願寺）栗田惠成氏（五）
一人歌へる……（南米倉町）角田芳子氏（六）
臺灣ところ〳〵……（植村病院）植村俊二氏（七）
歌かたり……（旭町一丁目）足立丈次郎氏（八）
疑あり……（木戸齒科醫院）木戸虎藏氏（九）
婦人と讀書……（三越京城支店）加藤常美氏（一〇）
篠田博士（寫眞）……（京城高等商業）柴山昇氏（一一）
私の味覺……（大學病院）中村兩造氏（一二）
西伯利亞十首……（永樂町二丁目）植村孝子氏（一三）
臺灣行吟（俳句）……（南米倉町）今村輒氏（一四）
變な死體……（總督府學務局）加藤濯覺氏（一五）
黃鸝の聲……（朝鮮銀行）長谷井市松氏（一六）
窓……（京畿道警察部）野村薰氏（一七）
犯罪人の癖……（府內樓上洞）山村翠氏（一八）
車……（京城醫專）眞能義彥氏（一九）
閣下の前垂……（京城高商）兼安麟太郎氏（二〇）
斷片の斷片……（京城女子技藝）井上要氏（二一）
輸入したき事……（辯護士）宮崎毅氏（二二）
五十錢の價値……（南米倉町）角田廣司氏（二三）
透視……（總督府內務局）長郷衞二氏（二四）
凍夜歸來（短歌）……（城大法文學部）松月秀雄氏（二五）
家傳の妙藥……（城大醫學部）川上喜久子氏（二六）
多樣の統一……（木浦東拓舍宅）松井權平氏（二七）
友に語る……（城大醫學部）後藤長治氏（二八）
臺灣の話……（府廳學務課）飯島滋次郎氏（二九）
感想一片……（京城醫專）鉅鹿曉太郎氏（三〇）
古本屋……（鐵道局）中村榮孝氏（三一）
師走の國境……（朝鮮史編修會）宮瀨通氏（三二）
辛未漫錄……（總督府殖產局）山田新一氏（三三）
忘れ得ぬ人……（洋畫家）小野富雄氏（三四）
藝術家の場合……（京城日日新聞社）松橋喜代治氏（三五）
カフエ漫筆……（京城府廳）張間源四郎氏（三六）
夢遊記……（中樞院）磯部百三氏（三七）
前車の覆轍……（養正高普）辻董重氏（三八）
雪霧……（京城女子實業）古田廉三郎氏（三九）
社の回想……（朝鮮銀行）天野雪江氏（四〇）
赤ちやんの言葉……（三阪通り）國風會支部（四一）
やまと歌……（京城日日新聞社）別府八百吉氏（四二）
無題……（朝鮮商業銀行）佐伯安政氏（四三）
兄……（朝鮮運送會社）奥永政輝氏（四四）
隈……（京城日報社）久松前平氏（四五）
鷄……（大阪朝日支局）澤村五郎氏（四六）
琉球の人と自然……（大阪朝日支局）永樂町人（四一）
畫錄……

京城の松竹梅

渡邊晋

正月の休みに、朝鮮から歸つて眺める內地の景色。

田舍家の軒端に、日の丸の旗と並んで咲く梅の花、裏の竹藪、その後ろの綠の松山。

朝鮮の氷の中から出て行つた吾々にとつては、何んとも云へぬ憧がれの母國感、正月感で、あれを眺めた丈けでもう充分、異鄕で働く多少の勞苦を慰められた氣持になります。

京城の正月は少々勝手が違ひます、春立つと云ふは名のみで、丁度お正月頃は猛烈な高氣壓の吹きさかり、萬物悉く凍結せねば承知せぬ季節であつて、內地人にとつては異鄕の苦しみ骨身にこたえるまツ盛り、實は正月氣分などはとても起り得ない。

そこを慰めて呉れる正月の鏈話は暮の町から買つて來る松竹梅の盆栽です、貧弱な朝鮮五葉の小松一本立ちのヌーボー竹、梅も雪が固くてまだ賞分咲きさうにはないそれに配する小石、青苔の切り貼り、無理に仕立てた寄せ植えの正月ではあるが、床の間に優待して眺めて居れば、兎に角その邊に正月が來て居るらしい。

庭の松竹梅は京城では問題になりません。

第一松が違ふ、梅が遲い、竹が不景氣です。

松は京城邊には、朝鮮赤松丈けですから、松と云ふても感じが違ふ、門松に立てても少しヘンです內地なつかしいあの黑松は、京城邊には野生しませんが、植えて置けば立派に育つ、百花園の老主人が、まだお若い時に內地から携へて來られた黑松の苗は、今では大きくなつて、百花園の裏山に榮えて居ます。

竹も京城邊の氣候では寒風の當らぬ日當りに生育し得ると云ふ程度で、それも寒の强い多には地上莖が枯れて、翌年地下から出直すので、とても鑑と云ふほどには生長しません、大學醫院の後庭や、方々の官舍の庭などにありますが

【二】

みな人が植えたので、野生はありません、尤も京城以北でも元山附近の山野や、黃海道の白翎島に野生の竹があることを昨年知りました、緯度は北でも海洋の影響で氣候が溫和な爲めでしやう。

一體に中部朝鮮の竹は、元山のも白翎島のも葉が細く長く薄くて弱々しく見えます、朝鮮の人の書いた竹の繪を筆勢弱しと見て居ましたが實は寫生であつたのです。

梅の傳說?それは京城の內地人の間丈けらしいですが、京城に梅を植えれば杏に變ると云ひます、がそれを裏切る立派な梅が京城にも數本あります、昌德宮內の紅梅は實に見事です、昌慶苑內にも白梅が數本ありますが近年は櫻が大きくなつたので、氣付かぬ人が多いのでしやう、每年嗅ぎに行きますが、流石に梅で日本の春を想ひ起すに充分の淸香です。

◈新住宅の話

北漢山人

○大浦貫道師は、コ、五年ばかり前から、然るべき家を、一軒建てたいと、口癖のやうにいふてゐる。

○それには、誰もがするやうに丹念に建築圖を描き。コ、が書齊コ、が寢室、コ、が茶の間——そして奥さんを呼んで、『オイ〳〵お台所は、これなら申分はあるまい。ウン、能率が上るぢやらうの』

○散々奥さんを喜ばせておいて肝腎なものは、一向に出來上る模樣はない。

○或友人が、樣子を見に行く。そしてもどつてからの感想談——『あれア君、あかんバイ。何故つて、一日に四五人位金貰ひが來る先生どうするかと見てゐると、叱つておいては、ポン〳〵金を出してやる。死んだらお墓は建つかも知らんが、生きてる中に家は先づ建たんのう』

○それを知るや知らずや、同鄕の齋藤久太郎氏、眞面目臭つて、『あんたが家を建てるなら、半分はワシが加勢する。ところで、地鎭祭はいつに決まりましたかナ』

○コ、に至つて、大浦師またセッセと建築圖にとり懸られます。

品川雜記

居るのである。かうした心境から私は每新春香取鹿島詣でを常習とするやうになつた。

品川雜記

中島司
（中央朝鮮協會）

初詣心境

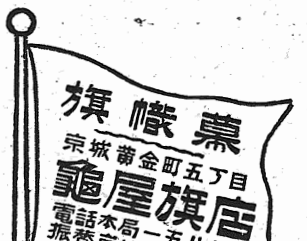
大正十五年の一月に京城から此の品川へ越して來て早や滿五年になる。飽くまでも公平無私に、正しい上にも正しい心をもつて、朝鮮のために奉公しなくてはならない立場に置かれ、しかも短才不敏の身であるだけに、自分の心に曇りがないか自分の行ひに過ちがないかと、ただそれのみを氣にして居る私である。此の心を引き緊め、絶えず敬虔の念を保持せねばならぬと常に自ら警しめて居る私である。併し自分で自分を戒しめるばかりでは足りないと感じたので、東京へ來た翌年即ち昭和二年の一月から毎年正月三ヶ日のうちに下總の香取、常陸の鹿島兩神宮へ初詣でをなし、神嚴肅森の靈氣に我が此の心を更新せしむることにして、今年で五回、一度も欠かさず吉例を履んで來た。寒中の日歸りだから、曉天に出で暮夜に歸り、しかも非常な飛脚旅行である。物見遊山ではなく、一つの勤行である。餘ほどの信念がなくては、毎年此の際に出かけるといふ事は、一寸臆劫で大儀な話だ。ところが妙なもので、必ずしも神信心に凝り固まつてるといふ譯でもないが毎年勤めてお詣りをして居るうちに、何とはなしに香取樣と鹿島樣とが自分の家の氏神樣であるやうな心もちになつて來て、もう今日では何を措いても年頭の初詣でをしなければ、神樣にも相濟まず、自分にも申譯があるまいやうな心になつてしまつた。

折角遠出をするのなら、今一層奮發して伊勢大廟へ參拜すべきであるが、伊勢となると最少限時としても一日二夜を要するし、子供を連れて毎年行くには旅費が嵩んで無理をしなければいけず、無理をして御詣りした所で神樣がお賞め下さる譯でもあるまいから、先づ香取鹿島兩神宮への年參が神妙な所であらう。況んや俱に官幣大社で、千年の昔に選輯された延喜式に名神大社として記載せられ古へより皇室の御尊信篤き護國鎭守の神靈ます所であるに於てをや。

それから又、此の兩社と齋聯して私の心を絶えず引き付けて居るものは此の地方一帶の天然風物である。利根の諸流から霞ケ浦へかけての名高き水鄉。あの洋々たる大河、あの森渺たる大湖、あの廣茫たる平野と蘆荻の洲渚、水際に遠く野末遥かに望まるる紫紺筑波の双峰、まことに我國上代からの由緒深き勝地であり佳境である。私を育ててくれた筑後河畔の風物は其規模に於て素より及ばないが水鄉としての情趣に共通相似の點が少なくない。此の故鄉の風物を偲ばせるといふ所から、私の心は常に常總の水鄉に牽き付けられて居るのである。かうした心境から私は毎新春香取鹿島詣でを常習とするやうになつた。

今年も一月二日に行つた。東京は元日にチラチラ降り出した雪が二日の朝は三四寸から積もつて居た。雪の朝の初詣では願つたり叶つたりである。殊に今年の勅題は『社頭の雪』とあつて、益々理想的な譯だつた。前夜から隨行を樂しみにして居た二男が四時頃にはもう眼を覺まして居た。發足の仕度を急ぐべく起き出でた所、雪が積もつて雨が降つて居た。雨では困るので此の日は見合せやうかと一旦躊躇したが、次第に小降りになり空模樣もよくなつたので、思ひ立つたが吉日とし、例年より一汽車遲く兩國を發つて行つた。車中の讀みものとして古事記一卷を携へた。東京はあれほどの雪であつたのに、成田あたりから先きは少しも降つて居なかつた。當然豫期された社頭の雪が空しかつたのは案外であつた。目出たく滯りなく參拜祈願を濟ませて歸つたのは夜も深けた十一時過ぎであつた。

今年も所懷を果たしてまことに愉快だ。お蔭で自分の心も一層緊張し、心境は益々淸淨なるべきを確信する。



緣日

堀内滿輔
（本町二丁目）

暮れも間近い或る日、自分は町内賣出しの用事で本町署の窓口に立つた、受付けで書類に目を通して居る暇に、一寸敬意を表すべく署長室をノックした。

机に向つて何か熱心にやつて居られた小松さんは、やをら起ち上つて、ストーブの側の椅子に進み、『やあ暫らく、さあどうぞ』と、椅子をすゝめる、茶を運ばせる。迚も快活で愛嬌がよい。

新聞記事で見る……『歴代の署長が手を附け得なかつた市内に潜む〇〇團に對し非常な決心を以て、斷乎たるメスを揮ふ』とか、又『何々問題に就て或る方面から、種々の諒解運動があつたが、署長は一言の下に之れをハネ付けた』などゝ云ふ、嚴し味は少しもない。所謂秋霜烈日でなく、春風駘蕩の氣分である。吾々善良なる（敢て善良と自信する）市民に對しては誠に好箇の署長である。味方であると思つた。

けふは、別段要談ではないと始めから斷つて、四方山の話をする。本町通り殊に二丁目に近頃貸家札が殖えてゆく事は困りものだと話す。

署長は云ふ、『一體本町通りの寂れたのは、不景氣も主な原因ではあらうが、それ以外、相當理由がある。先づ本府の移轉である。總督府が倭城臺から無くなつた事は本町通りの大きな損害である。次で、電氣會社の移轉、又三越の府廳跡の進出、しかも、何れもその跡は、高い板圍ひや、大きな殘骸を殘して、町内の落寞さを一層增さして居る。

小賣街はどうしても人通りがなくつちやいかん。人通りを殖やす事を考へなければならない。それに就て自分は、斯う云ふ事を考へて居る。南山に京城神社の外に、天滿宮、八幡樣、お稻荷樣の三つの社があるから、之を内地の例に倣つて、毎月各々緣日を定める。そして當日は神職に交渉してお祓ひの式を擧げて貰ふ。又社務所と相談して氣候のよい時は、境内で、いろ〳〵の餘興を催す。その季節によつて、草花や、金魚その他、緣日に因んだ、お面とか玩具などの緣日商人を誘導して、境内や沿道を賑はせる。そして本町通りでは、當日は、各緣日に適合した軒提灯を吊し、景氣を添へ、町内申合せて二三點でも特に勉强した特價品を賣出して人氣を呼ぶ。

そう始めから、當ると云ふ譯にもゆくまいが、町内繁榮の一策として行く〳〵きつとよいと思ふ。

警察の方でも、餘興をやるとか、緣日商人の事など、その他出來るだけ便宜の取扱ひをする』

と云ふのである。誠によい思付きであると自分は感服した。この頃不況對策とか、小中商工業者救濟策などゝ大分喧傳提唱せられて居るが、多くは抽象的の議論や、實行不可能な論策が多い。

何にしても鼻血も出ないと云ふこの頃である。不況挽回策も、餘り金のかゝる施設では出來ない相談であるが、この話ならば神職の賞成と、吾々町内の申合せと、極僅かの費用で出來る事である。それに、一般から申しても敬神の念を喚起し、鄕土氣分をつちかふと云ふ點から見ても、誠によい事だと思ふ。

自分も早速町内の人々に話して、是非實現したいと語る。

斯くして話し込むこと更に一時間餘、話は中々盡きなかつたが、折柄來客があつたのをきりにして辭し去つた。

人間斷相

栗田惠成
（東本願寺別院）

大朝夕刊に掲載されてゐる武林無想庵氏の『世界を股に』を讀み出してゐる。まだ今日までのところでは幾回にもならないでどう展開してゆくかわからぬが私にはその小説の筋がもたらす變化よりも小説を通して作者無想庵氏の氣もちに觸れることに多大な興味を感じてゐる。その理由を書く。

×

ぶらりとアメリカを去つて着いたところはフランスのアーブル港埠頭から汽車にのつてパリへ三時間。初めてみる歐洲の天地である永い間ガサツなアメリカ景色に慣れてゐる私の眼に典雅な趣きをもつなだらかな山の起伏から、田舍の街の木煉瓦を敷いた凸凹道までがどんなに私の心をうるほしてくれたことか。殊に晩秋、バラバラと落葉降る並木街道をレキロクと鐵の音も朗らかに馬車を驅つてゆく百姓夫婦の睦まじい平和の光景を倦かずに見てゐたことであつたか。

×

無想庵氏に會ふたのはパリへついた翌日の夕方であつた。私は文字通りのエトランゼ、言葉も十分でなく地理なんか無論わかる筈がない。殊にぶらりとアメリカを出た私は旅行案内一つ見てゐなかつたので。またタツタ一人の幼友達が十餘年間もパリに住つてゐるといふのに手紙を出すには出したがその返事を待たないでアメリカを立つて來た私であつた。

それが翌日にはもうその私の幼友達の仲間に交つて美術院の日君が歸朝の送別宴に押しかけて共に食ひ共にうたひ、とう〳〵二次會まで合流してカフエーに夜を更かした。

無想庵氏に遭ふたのはその夜の席上であつた。會するものは誰れも彼れも友達であつた。偉いとか偉くないとかは問題でなかつた。皆が一つになつてシヤベリ一つになつてうたつた。私かてそんなに無遠慮には走れないのに何の逡巡ひもなく自然にそうなつてゐたのはパリだからだと後から思つた位だ。

パリは旅鳥の多く集まつてゐる處だ。旅鳥は共通な一つの哲學をもつてゐる。それはめい〳〵が人間だといふ考え、愛慾も鬪爭も好言今色も皆この人間哲理を裏付けてこそ初めて旅鳥の全生活は躍動し活氣を帶んでくる。こうした考えは誰れでも持ち合せてゐるが然しそれが日常生活に泌み出してゐる點でパリなんかは世界中でも屈指な場所であらう。

×

H君送別宴は文子さんが例の問題を起したK氏の後援で新に開かうと準備中のレストランで催された。

レストランの名も街名も今は記臆から外れてゐる。恐らく色々の問題があつて永くは續かなかつたと思ふから、パリを旅行した人でも知つてゐる方は少ないかもしれぬ。私は唯トーゴーとかオーヤマとかいふ名の街を通つたことゝ巴里によくある錆の出た街並の相當立派な建物で、家賃は四千法とか六千法とか云つてゐたことを覺えてゐる。家根裏まで入れて五階建だと思ふが入口の突當りが一般食堂、二三階が特別、このどこかのサルーンは天井が高く戒續が古色を帶び、椅子、卓、机、安樂椅子がルイ十四世式とかで淡い金色を漂はせてゐた。窓かけも古びてゐた。無想庵氏は家根裏に住んで時々このサルーンへ出てこの窓から街を流して歩くイタリア人の音樂家に錢を投げて哀しげな音階に聞きとれてゐる事もあつた。四階の部屋は最も特殊のもので室内は天井から壁までスツカリ緋色ビロードで張りつめ、窓かけが重く垂れて畫でも小さな蠟燭型の電灯が壁のところ〴〵に小暗く灯つてゐたソハーの上の壁には日本ムスメの刺繍が大きな造りつけの額になつて張つてあつた。緋の垂布をへだてゝ更らに小さな部屋があつた。こゝには大きな姿見が蒼白く光つてゐた。その下に寢椅子が置いてあつた。今ではこんなのをエロチックな感じとでも云ふのだらうが實際はもつと深刻な感じのものであつた。

この部屋に集まつたものはそれ〴〵此家のロマンスやら想像話に耽つた、昔伯爵とかの妾宅でこの東洋風な强烈な刺戟をうける部屋で阿片をのみながら悦樂に溺惑してゐたといふのであつた。又そうした想像に最もふさわしい部屋で

臺灣ところ〳〵

臺灣の京都―臺南の巻

京城雜筆

まつた。

×

其後ある日のことであつた。私と私の幼友達とが行きつけのカフエーで遊んでゐるところへ無想庵氏が訪ねて來た。友人は球突の相手を見付けて球臺の縁をあちこち歩きまわつてゐた間私は無想庵氏と話に耽つた。それまで泌々と話したことない二人、私にしてみれば先輩である無想庵氏、それが家庭の打あけ話まで出來る。

その話の内容はこゝでは云ふべきものでなく又言ひたくもない。唯そうした無想庵氏を思ひ出す度毎にしたしさを感ずる。『文子もイボンヌ（一人娘）が可愛いのでいろ〳〵とお芝居じみたことまでするのですよ』、こんな話の中にも旅鳥の人生哲學は眞摯さに光を放つてゐる。

【六】

×

其後無想庵氏に會ふたことはない。京都のNさんから無想庵氏が訪ねて來てくれたといふ話を一二回承つたきりだ。今度の『世界を股に』が生活の糧を無想庵氏に與え、私には何を與えてくれるだらうか。私は興味をもつて讀んでゐる（一九三一、一、十二）

◈禪道風聞記

漢江漁郎

○今度商議書記長の職を退き。郷里松江市に隱栖する大村友之丞氏……禪道に熱心なのは、氏を知るほどの人の、皆知るところである。

○氏も、今は大禪となつたからムヤミに座禪の話もしないし、人にこれを勸めることもしないが、マダその驅ヶ出し時代は、盛んにその効能を說き、加入を勸誘したものである。

○或る時のこと、氏は友人の某氏のところに行き。宵の口から夫婦に向つて、禪の難有味を說き。椿公もこれをやつた。北條時宗もこれをやつた。『君、これさへやると、タツタ今南山がビツクリ返つて、我々の頭の上にのしかゝつて來ても、エヘン、ビクともするものぢやない。男子は、必要だよ君、僕の門下生になれ……』

○丁度その一瞬です。春の夜の戀をしてゐた隣家の黑猫が、敵に追はれて、この座敷の障子を破りさながら彈丸の如く、主客の間にパーッと落下した。まことに不時の一擊！、スルト南山の崩落にビクともせぬ筈の大村さん、ウワーッと叫んで、飛び上つた。滿面蒼白となつた。

○ところを、同家の夫人『オホホ、大村さん……それも禪學ですの……』に、大村氏『ヤ……しまつた〳〵』

一人歌へる

角田芳子

はしき子をもらせたまへと元旦の神のみまへにおろがみにけり

おそくまで師走の仕事なせしより元日といふに身の節のいたむ

元日の夜の靜けさ外は雪に子等の寢息は室にかそけし

こもごもに雨と雪と降れり日を並めてこの正月の七草のうち

胸おどる今日こそ子等が成績表もたらす日なり時をよみつゝ

自らよろこび溢る夫の顏の子の成績表に見入りてやまず

百金千金たからつむともたらちねはかくはよろこばじうましわが子よ（六、一、一〇）

は大祭の眞只中、市内の廣場といふ廣場は、のぞき、からくり、見世物、屋臺を載せた催物から例の騷音はげしい支那芝居など雜閙の

臺灣ところ〳〵

臺灣の京洛―臺南の思出

植村俊二
（植村病院）

一

臺北は近代式鋭角式都市で市區井然たることは成る程本邦隨一であらうが、吾々遊子にはそれ以上の感興を惹かない。反之臺南に於ては古い匂のする眞の臺灣都邑を見物し、其滯在の短かきを託つ程であつた。この臺灣文化發祥の地に於て、恰もよしその三百年紀念祭開催中で、一層臺灣歴史の縮圖を見られたわけである。

臺南行の列車は大祭見物の老弱男女で賑合つてゐる。勿論その大多數は臺灣人即ち本島人である。車内の徒然につら〳〵その骨相を觀察する。本島人は吾々が日本内地又は朝鮮で見馴れた支那人とは全然面貌、体格が異つてゐる。小柄で顔貌も尖鋭的で締りがあり、あの茫漠たる福相の大男である北支那人とは似てもつかない。寧ろ日本人に酷似して洋裝男子は全く見わけがつかない。現に隣合つて色々話して來た臺北の大學生が本島人であらうとは少しも心付かず後で案内の人から聞かされて驚いた。女子は所謂モダン娘で、若い婦人は殆んど斷髪で上は洋裝に近い支那服であるが、下は全然洋裝の膝ツきりスカートである。馬鹿に脚のことを氣にするやうだが日本婦人の大根脚に較べ、これは又恐ろしく細い葱脚である。そして其動作が又いかにもきび〳〵して夫婦間の應待は西洋式、大にクキーン振を發揮してゐる。本島人は廣東、福建兩省の移民の末葉ださうだが、成程この兩省は思想上からいふても新しがり屋の多い地方で、最近この地方の産んだ新人汪精衛等の從兄弟同志といへよう。しかしこれは單に列車内の一スケッチに過ぎない。

話が脱線したが、もう臺南近しといふ案内者の言葉に吾にかへる驛に降り立てば野田衛生課長の出迎を受け、直に自動車で先づお自慢の公園を一周する。成る程林泉の結構、木石の配置から現代公園の要素大運動場の設備から臺灣隨一と稱せらるゝ所以を知り得た。それから有名な赤崁樓（セキカンロウ）一に紅毛樓の稱ある和蘭人の舊趾を見物したが、土臺は煉瓦で建物は支那風の造營で三百年前の蘭人の政廳であつたといふ。即ち臺灣は先づこゝで西洋文化を受け入れたわけである。附近の建築は悉く是れ當時のもので、丹碧絢爛の痕こそないが往時文化の中心を語る歴史を織り込んだ深い由緒がなつかしい。

臺灣人は平素勤儉力行して財物を貯蓄する美風を有つてゐるが、一旦祭禮となると之を消費し盡して顧みない風習があるそうだ。今は大祭の眞只中、市内の廣場といふ廣場は、のぞき、からくり、見世物、屋臺を戯せた催物から例の騒音はげしい支那芝居など雜閙の中に渦卷き、强烈なる鄕土色をあらはしてゐる。

自動車がいつしか郊外の坦路に出づると四周の環境忽焉として豁け、一望眼を遮るものなく路傍には臺灣になくてならぬ手押の臺車が輕く軌道の上をきしり、又運河には幾多の輕舸が祭禮のほとぼり醒めやらず舷歌さんざめく幾組かの男女を乘せて滑つてゆく。支那本土にある彼等の故舊が斷えず戰禍に脅え、土匪に戰き、堵壁を高うし耳を欹て夜半の夢平かでないのに反し、改歎茲に三十餘年皇恩の及ぶところ瘢痕その跡を絶ち洽く光と熱とに惠まれた臺灣、眞に文字通りの蓬萊島に育ち且つ老ゆる本島人は洵に多幸なるかな。

須臾にして安平（アンピン）港に達す。歴史的港灣で西洋文化の上陸地點である。灣頭古い姿をとめてゐる此渡止場も例の南清特有の極彩色船―五彩船が居並び、舷より漏るゝ船頭唄が醸す支那情緒は覺えず行人の詩興をそゝる。安平の一名所にゼーランジヤ城がある。蘭人の城趾で奇傑鎮田彌兵衛が蘭人の暴を懲すべく同志七人と之に乘り込み、挺身領事の喉に匕首を擬し其の子息及蘭將五人を捕虜として凱旋した遺跡である。今は煉瓦の殘礎も墨ずんで、其纒目さへわかぬ程に古びてゐる。

臺南には思出の深い新舊二つの神社がある。新らしきは臺南神社で能久親王を祀る。當時御使用の臥榻、擔架、毛布、御寢衣など胸襟りて仰ぎ見る力もない。古きは開山神社といひ鄭成功を祀る。之は

京城雜筆

近松巢林子の戲曲により、國姓爺（和唐內）として知らぬものはあるまい。日本婦人の血を享けた明末の英雄、回天の覇業は敗れたりといへども尙ほよく安平を攻略して蘭人の勢力を驅逐し、臺灣を平定して甜玉と稱した英傑である。支那風の廟內に宮造りの社殿があり日支混淆である。蓋し臺灣にはふさわしい神社である。

文廟中全島第一の稱ある孔子廟に賽した。恰も釋典の禮直後のことでまだ血腥い生贄の取り片つけも終らぬ時であつた。珍らしきは周時代の樂器で琴と瑟との相運を初めて實見した。

開催中の臺灣歷史展覽會場を一通り廻る。眞の實見で遺憾此上もないが僅に一時間にして三百年の興亡の跡をたづね、邦人活躍の古へを辿るを得たのは望外の幸福とせねばならぬ。

【八】

瀟洒たる風景美と古色蒼然たる時代色とを有する臺灣の京洛は到底半日を以つて見盡さるべきでない。が、しかし日程にせきたてられ、有名な鳳凰木の並樹を名殘りに自動車は早や驛頭に吾々を運んだ。

歌かたり（三）

足立丈次郎（旭町一丁目）

故理學士西松二郎は芳非山人を號し、高等師範や農科大學の敎授で、礦物學の專問家であつたが、慨世憂國の士で、今は故人たる福富孝季、杉浦重剛、磯野德三郎、今外三郎、高橋健三、大內健、饗庭篁村、正岡子規等の人々と深交あり、文藝の趣味深く、芝居道にも精通し、狂歌に巧みで、太田南畝に私淑し、蜀山人の書畫を多數蒐集して居つた。狂歌は其の堂に入つたもので、即ち吟じ即ち詠じ世を諷し人を驚かしたるもの其の數尠なからず、明治三十年前後當時の日本新聞にて子規の俳句と、芳非山人の狂歌とは有名なるものであつたのである。山人はまた達摩を愛好し、各種の達摩一千有餘を集めて居つた。ソレが皆自分で買つたのでなく、皆親戚友人は勿論知ると知らざると、聞き傳へ語り傳へて寄贈し來つたものである遺稿も出版されて居る。今山人が詠じた狂歌二三を紹介しよう。

元日の朝放屁の音をきゝて
舌つゞみうちし夕にひきかへて
今朝は日の出に太鼓うつなり

三月の節句に
ひいふうみよめ御にならん娘子
も雛の祭にむつみあひつゝ

神田祭を見て
神さまをだしにはやして踊るのは酒のかん田によふた若ひ衆

節分婚禮
客は內御供の人は御庭外豆を拾ふは花むこの役

夕すゞみして
むし〳〵と暑さもつよき夕方に
我はすゞむし妻は日くらし

人間異名動物集の內
鯰（大官員）
官海に地震を起す髯はあれどぬらくら主義のものばかりなり

土鰌（小官員）
鯰らをうらやみなから泥水にあくせくすめる骨拔のむれ

蛙（代議士）
山吹の露吸ふためにひよこ〳〵と蟇口あけて鳴きわたるなり

猫（藝妓）
氏なくて玉をとらんとじやれ散らし鯰かはづを喰へこそすれ

狸（割間）
銀の月さへ出れば腹つゝみうつておひげの塵拂ふなり

◇大臣の眼玉

漢江漁郎

○渡邊商議會頭が、初めて安達內相を訪問した時の話——

○大臣室のドアーを排して中に入ると、シーンとしてゐて、安達大臣閣下は、書類を見てゐる。ツカ〳〵と前進して頭を下げると、徐ろに振返つて、ヂロリ一瞥——だが、その眼光の凄さ、物腰の險惡さ。流石に『押』の一手でこの世を渡る會頭も、頭のテツ邊から冷水を浴せられたる如く、滿身ゾーッとして、惡感を感じた。

○以來、談このことに及ぶと、『君、我輩もアノ眼玉にや、全く慄ひ上つたぞ。ウーン、ほんまぢやとも』

疑あり

化せざるにはあらず。

人間に尻尾のあつた時代のある事は小學校にて敎へられたる事な

を集めて居つた。ソレが皆自分で買つたのでなく、皆親戚友人は勿論知ると知らざると、聞き傳へ語り傳へて寄贈し來つたものである遺稿も出版されて居る。今山人が官海に地震を起す幣はあれどぬらくら主義のものばかりなり

土齒（小官員）

鯰らをうらやみなから泥水にあくせくすめる骨拔のむれ

ーッとして、悪感を感じた。

○以來、談このことに及ぶと、『君、我輩もアノ眼玉にや、全く探ひ上つたぞ。ウーン、ほんまぢやとも』

京城雜筆

疑あり

木戸虎藏
（木戸齒科醫院）

坊主の坊主臭きは尊からずと言ふ。

齒醫者も亦齒醫者臭からざるを尊しとなすか、疑あり。

× ×

人類は萬物の靈長なりと自ら言ふ。

されど未だ異議ありと發言するもの無きを見れば敢て採決するの要もなきが如し。

かくて人類は吾地球の總てを征服して之を支配し更に月星をも征服せんとして野心勃々たり。

豐太閤は我日本狹しとして大明國の征服を企てゝ命數盡けり。

人類果して豐太閤の轍をふむ事なきか。

疑あり。

× ×

生命を脅かすもの病に如くものなし。

而して多病なる人類の如きなし故は如何

あまりにも他の動植物を捕食するの報ひなりと佛者は言はむか。

されど三十一年人には少しく疑あり。

× ×

羽あるものあり、鱗あるものあり、肢ありものあり等々々、動物の形態は實に千態萬樣なり、されどこれ造化の妙と言ふか、各々其生活樣式にピッタリと一致して最も都合よき形態に出來て居るものなり。

古來生物興亡の歷史を按ずるに身体の形態と生活樣式とは離るべからざる關係を有するものにしてマンモスの如き巨大なる前世紀動物も畢竟身体が其生活樣式に不適當となりし爲めに滅亡せしものなりと言ふを得べし。

適者生存と言はんか。

然らば人類は現在の生活樣式に最適なる身体を有せりや。

疑あり。

× ×

神武天皇時代の人間と現代の人間とを比較せば衣食住等々々、生活樣式の相異の大なるは言ふの要なかるべし。

而して身体は如何

勿論筋骨の大小强弱はあらむも解剖學的に形態的に著變ある事を聞かず。

更に又人類生活に一大エポックを劃したる火の使用前の人間と比較しても幾分の變化はあらんも生活樣式の變化の程度とは到底比較すべくもあらざるべし。

即ち生活樣式のみは徒に尖端を走りて三十一年式となり、身体は世紀前數十世紀式、數百世紀式といふ甚しき時代後れした骨董品と言ふを得べし。

身体と生活樣式とのこの大皷行的進化は即ち幾多の疾病の原因たるなり。

× ×

吾々の身体は然しながら全く變化せざるにはあらず。

人間に尻尾のあつた時代のある事は小學校にて敎へられたる事なり。第四大臼齒の完全に萌出せる時代ありたる事も認められたる事なり。唯此變化は餘りにも氣永にして悠久なる歲月を要するのみ。

× ×

適志生存てふ原理よりすれば人類は滅亡のブラックリスト第一頁に記入せらるべき筈なるに却つて繁榮えつゝあり。

これ人間御自慢の智力の御蔭なり。

飛行機は比重空氣よりも重くしてしかも空中に浮ぶ。

これプロペラの推進力の御蔭なり。

インテレクトのエンヂンよ、故障を起す事なかれかし。

× ×

今後百年千年

人類の智力はどこまで延びるのか、過去の百年千年を想へば恐ろしき程なり。

而して其時代に吾々の身体は舊態依然たるものなりとすれば現在に於てすら喘ぎつゝあるものを頭の虐待に堪えかねて一大ストライキを敢行する事なしとせず。

この爭議如何に解決せらるゝか興味なしとせず。

時代後れの身体に代償すべき特別手當を出して圓滿に作業繼續となるか。

或は斷然强硬に彈壓を加へて工場閉鎖も辭せずと力むか。

これ人類生死の重大問題なり。

されど諸君案じ給ふ勿れ、そこは如才なき人間君の事、萬事損なソロバンは彈く心配なかるべく、又今の問題にもあらざればなり。

婦人と讀書

加藤常美
（三越京城支店）

婦人は讀書に無關心だ！又讀書する時間が許されぬ等々噂されるも是れは全く遠い昔の事で最近婦人雜誌の種類が年々增加し發行部數も激增し、書籍も亦頻繁に其刊行見、刊行圖書は通り一邊のものでなく可成研究的であつて專門的のものが多い。此れ全く婦人の自覺により必要に迫られたるものと思ふ。

此の實狀を靜に考へると婦人の地步は益々向上されつゝあることは疑ふ余地がない

然らば一般婦人は『マルクス』の經濟書や又財政學を繙くかと云ふにさに非らず、其の代りに家計に關する書を讀み、家庭經濟を如何にして合理化するかを研究し、又醫學書を研究せざる代りに家庭醫學書を讀んで簡單なる諸病の應急手當やお產、並に育兒法迄究知應用せんと欲し、或は料理法裁縫や手藝に就ても他動的に敎へらるゝよりも自主的に自ら進んでその蘊奧を極めんとしてゐる。

近代婦人の意氣と力による內面の活動は涙ぐましい程である。

內容に依り其讀書價値は別問題として最近低學年生の讀書慾の旺盛なるは實に驚くに堪へたもので一面此等婦人の感化も與つて力あるものではなかろうか。

職業婦人を見よ！片手には必ず婦人雜誌を携へ何物かを得んとしてゐる。女學生も全じく敎科書の傍ら其往復には此等の雜誌や書籍により絕ゑず世間に眼を注ぐ。目醒めてそして其意氣と力に燃える自覺は、やがて我國の救主でなくてはならぬ。

見聞分分 江湖百話

千駄山房

○世の中には隨分失禮な人があつて、城大醫學部の大塚先生に向ひ、『雜筆で見ると、アンタは鐵砲をやられるさうだが、一體アンタの鐵砲などが生きた鳥に當るんですか』――たび〳〵斯う大上段からやられて、大塚先生『嗚呼天下知己無き事、一に茲に至るか…』非常な御嘆息であります

○ホントウのところ先生は、四五年前までは、鐵砲は下手であつた。愛犬のジョンが、同じ仲間の犬に、『オイ君、ヘタ糞の主人を持つたら、先づ一生浮ばれねえや……』と、ボヤいたさうです。

○ところが、この一語に、奮然志を立てられた先生――實に人の一念ほど恐ろしいものはない。トウ〳〵……先づ古今の名手といふほどに、腕を上げられた。

○イエ……決して與太でない。ツイ昨年十一月九日に開かれた第三回全鮮競獵大會にも、美事第一等をとられた。諸君々々！實に一等ですよ。

○だから各位は、以來口を愼み、苟くもこの大家の前で、『アンタの鐵砲が、生きた鳥に……』などと、途法もないことをいはぬ事――右、嚴にお斷り申す。

× ×

○丁子屋の社長小林源六氏は、幼年の頃から、隨分苦勞をして來た人だといふ。

○故鄕は、伊勢であるが、十三四の頃から、近江、越前の方へ荷物を肩にして、毎日行商して歩いた。

○足を棒にして戻つて來ると、夜は內職にマッチ箱を張り、その賃金を翌くる日の辨當代に充てた。

○有名な親孝行で、氏の鄕人は、氏の今日あるは、全く親を大切にした報ゐであるといふてゐる。

◈寫眞口上書

三木一彦

○御覽の如く、篠田李王職次官でございます。

○次官のも、トンボを追ひ廻したり、飴ン玉をしやぶられる頃のがない。奥樣も殘念だと申されます。

○靜岡縣の御出生、鄕里の小學校を卒へて、錦城中學から第一高等學校、そして東大法科といふ順右端のは、一高時代でせう。辯壯時護士を始めて、有名な小便辯護をやられた。

○なか〳〵のいたづらモノ。

○左端の奥樣は、お景物に、奥樣に內々でチョイト……何、お正月ですもの……。

めてそして其意氣と力に燃える自覺は、やがて我國の救主でなくてはならぬ。

日あるは、全く親を大切にした報ゐであるといふてゐる。

私の味覺

柴山昇
（京城高商教授）

空腹は最良の料理人といひます季節や場所や時間や自分自身の生理的條件やで、うまい、まづいもきまることが多いと思ひます。私の味覺なんて頗る非合理的なもので、うまい、うまくないなんていつたつて勿論何等の普遍性を誇示するわけではありません。たゞ私の世界行脚に於ける味覺の記錄にすぎません。

歐州航路の一等船客には御馳走を喰はすとききました、だが神戸を出て、マルセーユに着くまで、うまいと思つたのは朝餐のメヌーにあるホット、ケーキに蜂蜜をかけてバタを加へてたべるのでありました。南洋、印度洋の菓物はうまいときゝましたが、パパイア、マンゴー、マンゴスチン、季節はづれであつたのか思ひ出すほどのものでもありません。たゞシンガポールで食べた生のパインアップルは從來たべ馴れた鑵詰のそれと同じ甘味であつたのがうれしかつた。支那料理は上海と香港とで二度、上海の方が香港よりもうまいと思つたし、兩方とも滿喫したあとで蒸し立ての饅頭をくつて香り高いお茶を啜るのがなによりも。ライスカレーはシンガポールとコロンボでたべたが、うすぎたない感じをもつただけ、たゞヒリ〳〵と辛かつた感銘なり。巴里ではエスカルゴー、ドールのかたつむり、ブルミエの魚料理、エルミタージュの露西亞料理、特にも露西亞料理のスープは今でも回想の種であります。仙臺味噌に大根のせんろつぽんをたゝき込んだ味噌汁そつくりの露西亞式スープは今なほ忘れ得ぬものであります。それから何の鳥料理、何々の鴨料理とたべて歩きましたが、ユニベルサールでのシヤトープリアンに馬鈴薯を加へてしぶい赤葡萄酒をすすつたときは流石と思ひました。コンソメ、ポタージュ、魚肉料理、サラダとなんでも佛蘭西ではうれしいことばかり。ポタージュではリオンの取引所街の一角のレストランですゝつた時、サバリに似て深き器に入れられたるポタージュ、一さぢかきまはせば菜葉やら馬鈴薯の皮やらが雜然と浮沈するポタージュ、その風味といふかそのうまさ今尚ほ舌頭に感ずる如し。午前二時頃漸くにはねたオペラを出でたべる西班牙マドリッドの料理ストツクホルムでたべるスエーデン料理のオール、ドーヴル、獨逸の維納料理、それから伊太利、チエッコ、ウンガルンでの料理、おのがじし面白いと思ひました。英國ではうまいと思つたことはなくパンもまづければのみ物も料理もうまいと思ひませんでした、たゞレストラン、モナコの生かきとカルトンホテルのグリルでたべたポタージュは今だに覺えてゐます。それにかけた茶碗と茶器、無造作に注がれたる紅茶には茶がすが浮き沈みしてゐるのであるが、そしてどぼりと注がれた牛乳さへ、あまりに神經質に取扱はれる紅茶なり絲茶なりに馴れた日本人には多少の驚愕ではありますが、それでも流石は紅茶の國だと思ふし、またうまいと思ふのであります。紅茶の伴侶ミルク、スコンも他の國では味ひ得ぬものであると思ひました。イギリスからアメリカに渡るマゼスチック號では、前もつてきいてゐたやうに、たべ物はうまくありませんでした。アメリカではうまいときいた菓物も、ハネーデュー、メロンを除いては他を味ひ得ず、うまいレストランを訪ねる機會もなく蹌踉と旅した關係もありますが、歐州では簡單にうまくのめる珈琲さへがアメリカではちつともうまくなく、珈琲素を拔いた衛生飲料ときいたカフエー、ハーグなぞときては全く砂糖水をのむやうでありました。太平洋上で日本酒をのむで二三杯うまいと思ひました、それからは別になんとも思ひません。

◈戒むるの辭

北漢山人

○漢城銀行の堤さん、年頭第一日の日誌に、筆を染めて曰く『子供は、親の反映なり。その遺傳に於て、その庭訓に於て……されば自分も本年よりは、斷然彼等の範たらざるべからず。茲に書して以て自戒の箴となす』と。

○ウツカリ酒も飲めなくなつた

○この人、それほど精神家です

西伯利亞十首

朝の白い汽車の煙まばらの白樺
汽車が遲れたためバイカル湖は寢
てる間に通つてしまふ筈だつたが
明方寢間着姿で廊下に出た時、琅

西伯利亞十首

中村兩造
（大學病院）

○

赤い旗とみすぼらしい服の民衆とうす雪しけるモスコーの街。ナポレオンの一件以來、モスコーと云ふと雪を連想させられるが、モスコーに着いたのは、今年初めて雪が積つたと云ふ朝であつた、そして街上には、三四日前の革命紀念日の名殘が所々に殘つて居た

○

シベリアに今日も暮れたり雪野原その西はての一抹の殘光。夕方になると二重の窓硝子も冷えて、車室の中がうす寒くなる、旅愁と云つた樣なものか、少しほろりとなるのも、然うした夕方である。

○

シベリアの雪の小驛に夕まけて灯かげも見えぬ村の影かな。小驛は小さい停車場と云ふもりである、村はそれから離れて小さくかたまつてゐる、汽車から眺めると、雪の中にかぢかんだ樣な黑いかたまりに見える、『影』と云ふのが、二つあるがどうも仕方がない、一方を假名にしてごまかして置いた。

○

外套の裾を凍て雪にひきずつて劍つき鐵砲のむくむくした兵士停車場には兵隊君が一人か二人突立つてゐる、元來が長い外套なので、だらしなく裾をひきずつてるのではない、この所をはつきりさせたいのだが、歌と云ふものは難しい。

○

重いドア眼鏡曇りて外套と帽子の群のむつとする生ぬるい臭の夜の停車場。

停車時間に驛に入つてみる、眼鏡がぼうつと曇つて、そこに人間の群と云ふ形だけが見える、そしてロシア特有の一種の臭がむつとするのだが、人間の群もむつとくる感じ、と云ふのではあるけれど、感歎と云ふ奴は難しい。

○

凍て雪や二十分停車夜をまつくろな機關車が客車客車に給水してる。

『凍て雪や』でこつちが散歩してゐるのをあらはす、機關車が列車に並行して、所々に止つては、客車毎に給水をする光景である、そして線路上で車輪修理の篝火がちろちろ燃えてゐるのも、この場合にふさはしい景物である。

○

シベリアの冷い夜氣だ星だけだ北斗星をば仰向いて見た。

列車進行中、廊下の散歩にも飽いて、ふとその窓を開けてみた時、星の光の他は何も見えぬ闇のシベリアだつた、そして北斗星がばかにてつぺんに眺められたと云ふのである。

○

バイカルをピジャマの儘で見た朝の白い汽車の煙まばらの白樺汽車が遲れたためバイカル湖は寢てる間に通つてしまふ筈だつたが明方寢間着姿で廊下に出た時、疎林のつひ向ふに、冷い色のバイカル湖が見えた、そして眞白い汽車の煙が白樺にからんでは消えてゐた。

○

南のかの山脈のあなたには蒙古ありとふ雪の廣原。

『鯨吼ゆる玄海灘』がどうとかで『ゴビの砂漠に月宿るらん』と云ふ歌を思ひだしたが『みんなみ』の『やまなみ』と云つた所など、仲々句調はいゝらしいけれど、けだし大人氣のない歌である。

○

食堂にてウオッカを飲めり美酒その色めでゝ三夜を飲めり。

食堂車で試みに飲んで氣に入つたウオッカ、殘念乍らそれからの第四夜は滿洲に入つてゐて、今度の食堂車では日本のビールと云ふものを、久しぶりに飲んでみた次第である。

○

餘白が出來さうだからもう二首追加す。

雪晴れの朝なりし哉——畫はがきを二三枚買つたつけ——エカテリンブルクの賣店の娘。

汽車の停車する所に、木造の粗末な賣店が、二つ三つ野天に並んでゐる、そこで日がきらきらと雪に輝いてる朝畫はがきを買つたと云ふだけの話、エカテリンブルクは前露帝弑逆の地である。

○

だんだんと歐羅巴から遠くなる冬の西伯利亞の汽車は佗しい。

いつの間にかウラルを越えて、いつの間にか二三日は過ぎて、そしてンボでたべたが、うすぎたない感じをもつただけ、たゞヒリ〳〵と辛かつた感銘なり。巴里ではエスカルゴー、ドールのかたつむり、ブルミエの魚料理、エルミタージュ

うまいと思ひませんでした、たゞレストラン、モナコの生かきとカルトンホテルのグリルでたべたボタージュは今だに覺えてゐます。それにかけた茶碗と茶器、無造作

自分も本年よりは、斷然彼等の範たらざるべからず。茲に書して以て自戒の箴となす』と。

○ウッカリ酒も飲めなくなつた

○この人、それほど精神家です

【一三】

臺灣行吟

植村孝子

草山の茂り温泉宿や風すゞし
ヤシの木の茂りて凉し旅枕
霧晴れてヤシの實光る旅路かな
首狩の山に螢の飛ぶ夜かな
阿里山は汽車もつゝまれ霧の海
見下ろせば雲の流れや木々茂る

京城雜筆

てそこに、歐羅巴から遠くなりつゝあると云ふことに、或る淡い侘しさを思ふ、と云ふのだが、食堂にでも行つて、ロシアのお茶の一杯でも飲み乍ら、あの邊を福島中佐が馬に乘つて行つたんだな、と雪の廣野を眺めてると、靄にでも乘つて突破してみたい樣な元氣も出て來る。

◈合財ふくろ

三木一彦

○京日の工場長小川三之介氏はその横顔なら後姿なら、松岡社長と瓜二つといひたい位。

○社中でも、年中間違えられるのである。

○ソコで給仕などは、先づ後ろから前へ驅けぬけ、一渡り正面から拜見した上、錯誤なきをたしかめ、さて『社長樣、ハハーッ』。

× ×

○鮮銀の古田支配人の奥さんは和歌を善くし、筆札に巧みに、內助の功殊に多しと傳へられる。

○或る人『あんたは、仕合せぢや、何んしろ奥さんが賢夫人ぢやからネー』

○答へて曰く『オイ〳〵同じ事なら……のう賢夫人より美夫人……ワシャ別嬪を景仰しとるワイ』

× ×

○殖銀の勸業金融の山口重政氏……人情味たつぷりの人で、しかもその戰術たるや、ふうわりと眞綿で首。義理と人情で締めつける『君、この手にやア敵はんぜ』と某氏の脫帽談。

○山口氏は、隱くれたる俳人でもあるさうです。

◈溫陽風聞記

北漢山人

○正月三ヶ日の間溫陽の神泉舘は、京城の紳縉で一杯であつた。

○中には、隨分正月らしい、溫泉場らしい、ゴシップ種を製造した人もあるといふ。

○コヽに本町の橋口金物店の主人は、丁度溫陽行の列車中で橋本豐太郎氏と一緒になり、向ふに着いてから二人で碁を始めた。

○打つほどに叩くほどに、次第に佳境に入り、いづれかといふと橋口氏の方が少し旗色がよくなつた。『エヘヘ、どうやら今年はゲンがえゝらしい——』、頻りに平手で、頭のテツ邊を叩いて、興に入つてゐた。

○ところが先刻チョイと失禮といつて、便所へ立つた橋本氏、一時間經つても、二時間經つても戻らない。聊か業腹になつて、女中を呼んで、『コレ〳〵、橋本さんはどうされた』、女中平然として『ハイ〳〵先刻から色部（鮮銀）樣のお部屋で、どうも下手と碁を打つのは、誠につまらん。さアこれだ〳〵とお二人で夢中で、將棋を御對局中です』

○橋口さん啞然として、『何ぢや、すりやホンマのことか。ウウーン』

× ×

○こつちの座敷では、色部、橋本兩氏至極おん仲睦まじく、一番勝つては、一番負け、一番負けては、一番勝ち。『どうです名人同士の勝負といふものは、實に公平なものですネ』、『ム、そこですよ。どうして斯うお互に、期せずして名手が滾々として湧出するのでせう』

○この時、橋口金物店廊下を通り合せて、『ナ、何んぢやと、アーン、こちとらは、チツとも面白かアねえや』

變な屍骸

建たない基礎へ、王族堤を迎へ王とし、百官を任命して朝廷を開いた、王は公州へ蒙塵した、遂は明智光秀と同じく、三日天下で、三

變な屍骸

（李适の亂の一挿話）

今村鞆

仁祖王元年の秋十月に、京城々外利夫峴に、人の屍體が横はつて居た事が發見された。

身なりから見れば、相當の兩班である、而して他殺の屍體であるが、變な事には、双傷殺害の上に其の顏の皮が剝いである、のみならず、臍下男兒のシンボルたるべき大切のものが、全く截り去られてある。

捜査の結巢、其本人は故承旨尹敬立の妾の子、尹仁發であることが、着衣から判明し、仁發の子の李旃と、妻とを呼んで、實見させた、愈間違ひ無いと云ふ事となり引取つて、葬送をすました。

其翌年の正月に至り、李适が亂を謀つて居ると云ふ事を、王に密告するものがあつた。

此の李适と云ふ男は、仁祖が光海君を廢立して、王位を乘取つた所謂反正の擧に加擔し、其功績第一で、時の陸海軍大臣である、兵曹判書に任命せらるべしと、人も信じ自分も信じて居たのに、其論功行賞が甚不公平で、平安兵使として地方へ追やられた男である。

乃こで、段々と同謀者を捕へて取調を行つた、鄭榮龍と云ふ男が李适の亂を謀つて居るは事實で、彼が參謀には、尹仁發が附いて居ると云ふ、申立をした。係官は、仁發は去年死んで居るのに大ゥソッキだと言つて、信じなかつた。

然るに李适の謀反は愈本物となり、李适は正月二十日に至り、堂々と反旗を飜し、一萬二千の兵と文祿慶長の役で、降參して朝鮮の軍人となつて居る者共數十人を、先鋒に立て、至る所州郡を破り、二月十日には堂々と京城に入つた其時景福宮は兵火に燒けて、未だ建たない基礎へ、王族堤を迎へ王とし、百官を任命して朝廷を開いた、王は公州へ蒙塵した、适は明智光秀と同じく、三日天下で、三日目には官軍に攻められ、大敗して水口門から逃れ、五日目に捕へられ、斬首せられた。

尹仁發が、适の參謀となつて居た事は事實だ、此男も亦遂に殺された。

初め尹發は李适の陰謀に同意し己の跡を晦ますんとして、自分に身體の恰好のよく似た、奴隷一人を捕へて、殺して自己に裝ひ、面皮を剝いだ、此事は子の李旃には同謀者として內密知らして置いた妻には絕對に知らしてなかつた、彼が屍の一物を切り去つたのは、實に用意周到と云はねばならぬ。

◇耳から筆へ

漢江漁郎

○瀨戸先生が、某紳士を前にして、ヅゲ〳〵と申される。

○『君、金を貯めちやァあかんよ』

○『どうしてです』

○『どうしても、斯うしてもあるもンか。親が金をためると、有能の子は馬鹿になる。無能の子は乞食になる。その例は……』

○『ナル程……』

○『判つたか……君もモウ改心してえゝぞ』

○『……さうですナ』

○『不承知らしいナ。慾を去れば、氣が樂になる』

○『……たじかに健康になりますネ』

○『さうぢや……僕は君の、その青ッ面が氣になつてゐた』

× ×

○城大の杉原博士……古今東西の嗜樂物、一ッとして究めざるなし。

○實に百藝に通達してゐられる

○研究室の若殿原『先生々々、お正月には、何をおやりになりました?』、『ウ、元日には、カルタをやつたよ』、『ヘー、先生カルタまでおやりになりますか』、『ム、、若い娘さん達を集めてネ……』、若い連中、小さい聲で、『オイ聞いたか』

○スルト先生宣ふやう、『ナー諸君!、斯う年中兎（試驗動物）ばかり相手ぢや、全くやり切れない。タマにはいゝだらう。燒くなよ〳〵』

○この時、橋口金物店廊下を通り合せて、『ナ、何んぢやと、アーン、こちとらは、チッとも面白かァねえや』

○ところが先刻チョイと失禮といつて、便所へ立つた橋本氏、一時間經つても、二時間經つても戻らない。聊か業腹になつて、女中

『君、この手にゃア廣ばんせ』と

某氏の脫帽談。

○山口氏は、隱くれたる俳人でもあるさうです。

黄鸝の聲

加藤灌覺
（總督府學務局）

朝鮮に於ける各階級の方々に混つて、色々な民俗資料やなどを漁りつゝある私などは、其談笑の間に絡んで特に趣味ある漫談やなどを聞くの機會が多い。

私が去年の末頃東京から戻つた後、久し振りに前からの知合であつた或老女官を訪問した。

其時恰もそこの主人の部屋に立廻してあつた十枚折の朝鮮屏風に、黄鸝たとか鰍魚だとかいふやうな、特に朝鮮の鄉土趣味を豐ならしめるものが描かれてあるのを見たりした。

其際其老女官が謂はれるやう、私は今日あなたと共に此繪に向つて圖らずも伊藤公爵御在世の頃に承つた黄鳥の話を思出しました、ほんのつまらぬ話ではありますけれど、一寸卅年前にも近い其昔を偲んで、簡單にそれを話させて戴きたいと思ひます。

恰も私が御殿に奉仕してゐました頃、伊藤公爵の御紹介で御殿へ來られた或内地の貴夫人が、折しも御苑に鳴しきる黄鳥の聲を聞かれまして申されますやう。あの黄鳥といふ鳥は私共の國で春の雷信と解して居りまして愛くるしい芽出度い鳥でありますさうして其音色をホウホケキョウといふ風に聞馴れて居ります。私は今日斯ういふ高貴なお場所で聞かして戴くせいか、あの黄鳥の聲が何となう尊い音色にきこえます。御存じの通りあの黄鳥といふ鳥はやつと雀程な大きさで、内地では鶯茶とかいふ特種な茶色系の羽毛を持つてゐますが、あの體格にも似つかぬ高い音色を張るものであります。恐らく朝鮮の黄鳥も矢張内地と同樣で御座いませうねとのお言葉でありましたので、其お側にゐました私は直樣通譯のお方を通じて次の樣な事を申上げました。

朝鮮語では黄鳥のことをクエッコリと申ますが、その大きさは丁度山鳩位でございます、さうして殆んど其全體に近い程の羽毛の色はあのカナリヤに似た黄色をして居ります、それから其嘴と脚とは淺い桃色をしてゐまして、どうやら内地の方の申される黄鳥とは違つてゐる樣に考へられますと申上ました序に、朝鮮に於ける黄鳥に就ての傳說では、丁度今から數百年前朝鮮の王宮に仕へてゐた或妙齡の女官が、白姓の武藝別監といふ職を勤めてゐた青年に失戀致しまして相果ました結果、其一念遂に黄鳥と化しまして明けても暮れても、

モリコーブケヒツコ
（譯）髮を奇麗に梳き上げて
ペクヘルカムホコジコ
（譯）白別監さんにお遇ひしたい

と鳴いてゐるのだと申して居りますと申上ました處。それが非常に面白う其貴夫人のお耳に入りましたと見えまして、態々夫を書き留めてお歸りになつた事などがありました。

それから後になつて朝鮮の黄鳥は黄鸝といつて全く内地のそれとは別種のものであることは知りましたが、今になつても内地の黄鳥を見たことがないので、時しも頃は春色大地に回るの時を見計らつて是非とも内地の黄鳥の姿と其うつくしい音色とを紹介して貰ひたいとの希望を私まで申し陳べられましたが、私も程なく春分の來るのを待つて黄鳥の音色に絡んだ三十年前の談話を蘇へらすべく、其老女官の希望を滿たして上げたいものだと思つて居ります。

車窓

私は起き上つて服をきて、顔を洗つて、ソレから取片づけられた坐席に戻つて、斯うしたあなたへの

の運命を暗示するものであります

車窓

長谷井市松
（朝鮮銀行）

さる女友に

歳末でお忙しいのに、而して又お寒い處を、態々御見送り下さいましたことを感謝致します。足かけ四年振で東京に歸つて、初めてお目にかゝれた丈でも仕合せでしたのに、こんなに迄親切にして頂いて、誠に御禮の申上様もありません。停車場では何と云ふ慌しいお別れでしたか、殘念に思ひます十分ばかり車の來るのが遲れたばかりに――でも澤山の人込みの中に、あなたのお顔を見ました時、どんなにか私は嬉しかつたでしよう、私は言葉には言ひ表はせなかつたけれど、心の中では如何にあなたの御厚誼を感謝したことでしよう、御想像下さい。

驛には年若かな私共の二人の姪が來てくれました、是非とも送つて行きたいつて、止まらなかつた人達です。私は此様な純眞な乙女心を尊重し且つ感謝致します。今一人丈の高い痩形の男が居たでしよう、御氣づきでしたかどうですか、アレは私の義弟のTと云ふ男で、札幌農大出の、ソレは誠に義理堅い、石の様な人なんです。出おつぐうで、無口で殊に風邪氣味であつたのに、彼をして出動を餘儀なからしめたことを、私は氣の毒に思ひました。

思ひがけなく、あなたからS君の見送りを、お知らせ下さいまして難有う！私は彼を寝臺車の出口で、とう〳〵捕へることが出來ました。友の様々な心盡しを誠に難有いと思いました。今度私共が上京してから、特に痛切に感じたことは、友情の一語でした。『持つべきものは矢張り友である』と、つく〴〵思つた事です。彼は堅い握手を交して、ホームに下りてゆきました。而して車の進行と並行して『其うち早く出て來給へ、又遇ひたいなあ』――などゝ言葉を交し乍ら、でもとう〳〵見えなくなつてしまいました。私は初めて自分の室に歸つて、皆様からお受けした御厚意――殊にあなたに依て感受した様々な思出を、繰返さずには居られませんでした。同時にあつい涙が頰に傳はりました。私はソッと手の平で拭いて、さてソレから靜に身体を横にして、闇の夜の旅――殊にも師走の暮れの勿忙たる旅程に就て、私自身の運命に就て、ソレからソレと、近頃『考へる』と云ふことに就て趣味を持つた私自身獨特の冥想三昧に這入つて行つたことでした。

○

今朝は七時半に起きてしまひました。幾分身体が疲れて居る様ですけれど、たつた一人の、而して全く孤獨の旅です。人生を孤獨の漂浪の旅です。ソレは嘘て私自身の運命を暗示するものであります私は起き上つて服をきて、顔を洗つて、ソレから取片づけられた坐席に戻つて、斯うしたあなたへの旅の便りを書き初めたのです。

今日は幾分曇つては居ますが、極めて靜かな日です。茫洋たる勢多川の流れを渡つて、石山驛を通つたばかりです、山々に白く濃霧が懸つて居ます。竹藪や雜木林や柿の老木の間から村落が現れたりソレが隱れて更に殷賑な市街となつたり、或は又青々とした麥畑が一路田川の流れを界して遠く列つたり――あゝ今薄雲の間から太陽が微光を送つて居ます。天地が急に晴々しい、爽かな氣持になつて參りました。もう大津に近いのでしよう。賑かな家並が展開致します。柿の實がまだ赤のまゝに纏絡してをり、柑橘が黄に輝きを放つて居るかと思ふと、薄紅色の乙女の唇の様な、山茶花が一面に繚亂として居るさまが、さすがに内地の冬の旅の印象を、いやが上にも印象づけてくれます。今八時四十七分――大津に著きました。

○

大津を距ると間もなく長い隧道にかゝります。私は姑し筆をとゞめて、此暗いトンネルの中で、たつた昨日まで味ひ來つた東京生活の卅日に付て様々な追憶に耽りました。誠に慌しい此三十日間であつたけれど、ソコには忘れ難ない思出の數々が殘されたものだ、泌々私はソンナことを思ひめぐらさずには居られませんでした。コヽには一々ソレを書き記すべき時を許されないが、希くはあなたの豐富な想像力と、聰明な推理の力によつて、充分御考察を御ひ願したいと思ひます（以下次號）

【一七】

犯罪人の癖

野村薫
（京畿道刑事課）

人に癖のあることは、『なくて七癖』とさへ云はれて落語などの好話題として取扱はれてゐる。

犯罪人も犯罪を犯すに當つて各自の犯罪癖を必ず出すものであるいひ換ふれば、犯罪の現場へ自身の癖を數限りなく殘して行くものである。吾々は今日捜査上この殘された癖を見破つて捜査の好端緒とすることに努力してゐる。殊に最近に於ける捜査の流れはこの方面に着目する傾向を持つて來た。そして吾々はこの癖を手口と稱へてゐる。

昨冬新聞紙上で騷いだ長湖院駐在所の銃器窃取犯人は窃盗前科五犯あつて、昨冬十一月三十日に咸興刑務所を出獄したものであるが彼は自轉車に乘つて來て乘つて逃げるといふ癖を持つてゐて前科五犯共に自轉車を他から窃んで來て窃盗に入つてその自轉車でいつも逃走してゐた。今度長湖院でもこの癖を實行してゐる。

大正十五年夏東大門警察署の金龍星部長を殺害した犯人も亦犯罪癖を出した爲に逮捕されたのである。即ち彼は宵の口に朝鮮の布木商を襲ふて現金を强奪する男であつて、東大門警察署管内の苑南洞で宵の口に布木商を襲ひ金龍星部長に追跡され逃場を失つた爲め遂に同部長を殺害して逃走したのである。そこで私は宵の口に布木商を襲ふ癖のある前科者が道内にあるか否かを調べて見た處、水原の金〇〇といふ前科者あることを知り、部長殺害後部長の佩劍を奪つて他に投げ棄てた時刀身に附着した血染の指紋と、刑事課に保存してあつた彼金〇〇の指紋とを對照し犯人は正しく彼金〇〇であることが判明し遂に逮捕したのである

斯樣に犯人には何れも癖があるが、然らば何故捜査の好資料となる、犯人にとつては不利益な癖を出すか。勿論犯人自身は努めて癖を殘さないやうに注意してゐるのであるが、個人の性癖習慣は各人個有なもので、如何に修養を加へ術策を弄し、周到なる用意を以て臨むも不知不識の間に自然に必然の現象として發現するのである。即ち犯人は自已の個性を全然抑制することが不可能であつて行爲の一部に必ず其の個性を象徴し、自已を裏書する何等かの印象を殘すのである。と同時に自分がやり來たつた慣れた方法以外の方法で遣ると、何んだか發見されるやうな不安があつて、慣れた方法以外の方法を採ることが出來ないのである。

そして吾々はこの癖（手口）即ち犯罪の方法からいろ〳〵な名をつけてゐる。其の名の二三を書き列べて見よう

船舶内で窃盗をする專門犯人を『浮巣』、懐手握り睾丸をして活動寫眞などを立見してゐるときに羽織を脱ぎ取るのを『達磨買ひ』女の簪を抜き取る掏摸を『おかる買ひ』、靴專門の泥棒を『九官ゴ』又は『下足ゴ』、車の跡を追つて車上の荷物を窃取する者を『源氏追ひ』、猫を取る窃盗犯人を『四ツ師』といふが如き仲々滑稽な面白いものがある。

【一八】

詐欺犯で『暖簾師』といふのがある。例へば腐敗した鷄卵四五十個を景氣好く盛り上げ下宿屋又は飲食店などへ持つて行つておかみに買つて呉れと申込み、一寸おかみが話に乘りそうだと卵の一つを臺所へ落して破つて『商賣しない内にお釋迦樣が出來た、地面に喰はす位なら安く賣つた方が得だ、一つ買ひなさい全部なら一圓五十錢に負ける』といふて決局一圓位に負けて逃げて行く。おかみさん安い物を買つたと喜んで使つて見ると皆腐つてゐるといふやうな鹽梅落して破つた卵は勿論腐つてゐない一個だ。それを『トリック』に過つて破るのである。

『なくて七癖』吾々は悪い癖は是非矯正したいものである。

◈筆のしづく

三木一彦

○正月十一日の日曜に、總督府の連中が七八十名で將棋會（京城クラブ）を開く。

○全勝——七人抜は、鑛務課の入江某氏で、この人は碁は初段だが、將棋は空ッきし下手……。皆に駒をおろして貰つて、それでも全勝一等賞！。賞品を握つて『エヘッ、少々氣恥かしいナア』

○滿場ドッと大喝采……

閣下の前垂

事を疑はれることとなる、善意に解釋してよい。

所が、それでは商道なるものを嚴守し日夜營々として業務を勵む

長に追跡され逃場を失つた爲め遂に同部長を殺害して逃走したのである。そこで私は脊の口に布木商を襲ふ癖のある前科者が道内にあ

列べて見よう

船舶内で窃盗をする專門犯人を『浮巣』、懐手握り睾丸をして活動寫眞などを立見してゐるときに

に駒をおろして貰つて、それでも全勝一等賞！。賞品を握つて『エヘッ、少々氣恥かしいナア』

○満場ドッと大喝采……

閣下の前垂

山村翠
（京城府樓上洞九七）

京城雜筆

武人に武士道が存する如く、商賣に商道あるは當然である、しかし其の根原に遡れば二にして一、決して異種のものではない、日本人が遠く祖先から享けついだ武士魂、それを多年自已の職能として鍛えた人、即ち軍職に在つて其の傳統的氣質を更に研磨した人が、偶ま商事に關係して世に立つとすれば、立派に商道に則り、社會的にも尠からず貢献すべきは何人も期待し得べき所である。

時代とかけ離れて興味を惹かない故か、今はあまり演らないが、明治時代にはよく落語家が、士族の汁粉屋と云ふのを演つたものである。これは士族なる階級が、あまりにも世間を知らず、自分の周圍の極めて狹い部分より外に見たことがなく、全く世間を觀察する明を喪つて居たことを諷するもので、隨分と人を笑はしたものである。

又澁澤翁は士魂商才なる語を以て一般世人を誨えられた、これは勿論武士的の思想を以て、機略縱横の才智を商業上に應用することで取りも直さず商道を重むずべき意である、元來商人は多年階級的思想に累せられて常に頭を擡げることが出來ず、其の結果唯金儲けをすれば良い、金儲けするのが商人の本分だ、權道に依らうが、詐を行はうが、乃至は術策を構えて他を苦しめやうが、それは商人として愧づべきことでは無い、唯あまり非道をすれば因果は旋る小車の、自已又は子孫に災禍を招くと云ふ考で、多少慎むで居たと云ふ狀況に過ぎぬ。これは西鶴の永代藏を讀むでも能く窺はれる所である。

商人たるものの眞の使命を解し吾こそは商人として社會の爲めに渾身の勇を鼓して働らこうなどと云ふ考の人は恐らく寡かつたであらう、否現代富豪としてオホンと構えて居る人々の成功談を見ても隨分と桁外れの所業があり、又投機的行爲で儲けた場合が多く、社會の爲めに貢献どころか、自分の金儲には社會に尠からず害毒を流すことも平氣で遣つて居る、儲けた後には社會事業にも公共事業にも出資こそして居れ、金儲手段に到つては實に唾棄すべきものがある。

所が近來は案外社會奉仕などと云ふ聲が盛むになり、時にはストック處分や、資金遣繰の賣出にまで此語を標榜する嫌はあるが、兎に角商人に此覺悟を生じて來たのは嬉しい現象である。

百貨店で成功したジョン、ワナメーカーの如きは、無論出發點を宗教においた爲めであらうが、此の點に就て極度に留意せしものの如く察せられる。宣傳上手の米國の事であるからとて、こんな事まで宣傳だと見るのは偶ま當方の心事を疑はれることとなる、善意に解釋してよい。

所が、それでは商道なるものを嚴守し日夜營々として業務を勵むだならば、其事業は一路繁榮を辿るべきか、と云ふにナカナカさうは參らぬ、これが武士ならば惡戰苦鬪刀折れ矢盡きて身を殞てれば事が濟む、商賣ではそれは出來ぬ殊に株式會社などで重役としての行動であれば、株主等の苦情やら反對やらで砲彈以上に精神を痛めつけられる、いよいよ慘敗となつて打死しても其の壯烈振を譽めて呉れる人もなからう。

頃日新聞紙で某陸軍少將が、或る商事會社の顧問とか相談役とかになつて、其の事業の革新を圖り更に將來の發展を企てらるると云ふ記事を讀むで、こんな事を書いて見たが、其の少將は高潔な品性廣汎な趣味、豐富な雅量、親しみ易く押れ難い、又頗る飄逸な氣質閣下なんぞと言つて呉れるない、と常に磊落に語る人である、關係せらるゝ事業は朝鮮とは深い緣故がある、又支持者も決して尠くない事業であるが現在では極めて不振の狀態に在る。

無論閣下の努力によりて、此事業が伸展を期待せらるゝのであるがサテ其の前垂の捌き具合多少の心配が無いでもない。

今村鞆氏著
朝鮮漫談
（一冊三六〇錢）
お取次致し候

京城雜筆

斷片の斷片

眞能義彦（京城醫專）

親子

家内と娘が時々大喧嘩を始める男兄弟ばかりの中で育つた娘は、言語動作から氣性まですつかり男性的で、何をやつても荒つけない此れが家内の氣に入らない。注意をすると生れつきだから仕方が無いと云ふ。直す氣が無いからだと反ばくする。激しい口論の末、そんなに親の云ふことが聞かれぬ樣なら私は世話をえせぬから、勝手にどこへなりと出て行くがよいと家内が激する。最后の宣告だ。それが學校などへの出かけだと、娘も行懸り上、もうこんな所へは歸るものかと云ふ顏付で出かけて終ふ。所で夕方になつて、娘がどんな樣子で歸つて來るかと、一種の興味を持つて見てゐると、いつものやうに、只今歸りましたと、朝の事なんか、頭の角の角にも殘つて居ない樣な、涼しい顏をして歸つて來る。僞つても、てらつても居る樣子は微塵も無い。夕食の時になつても、悪うございましたとあやまりもしない代りに、一點母親にふくむ樣子などはなく、前の通りにゲラゲラ、バタバタ、青天白日の上天氣である。

私はこんな情景を見る度毎に、親子の關係の偉大さに打たれる。親しい夫婦の間でも事によつては一旦口に出すともう取かへしのつかぬ結果に成ることが隨分ある。否夫婦の間などは、感情がデリケートなだけ殊更悪い、些細な事から大事件のもち上る事が頗る多い友人は無論の事、肉身の兄弟でもうつかり冗談も云へない場合が相等多い。所が親子となると特別なのも無いでは無いが、親は子供の信順を信じ切つてゐるし、子供も親の愛護を信じ切つて居る。だから怒つても叱つても其場きり、根に持つ事もなければ、反感を久しく殘す心配もない。あしたの事を夕に忘れて親も平氣なら、子も平氣。そこに何等の不自然もない。誠に尊く嬉しい者は親子の情だ。

讀ませ方

子供の讀物を時々拾ひ讀みに讀んで見る事がある。餘り悪いものは見當らない。大人が讀んでも爲めに成ると思はれるものが、かなりにある。然るに其の讀物の効果らしいもの、殊に良い方面の効果らしいものが殆んど現はれて來ないのはどうしたものか。思ふに材料には不足はない。子供は讀み方感じ方を敎えられて居ない。孝子の傳を見ても、篤行の士の話を讀んでも、彼等はおとぎ話以上に感激しない。將來研究すべきことは材料の吟味でなくして、寧ろ讀ませ方の研究にある。

時計

私の家には大小合せて十個程の時計があり、お向ひの大工さんの家には只一個の目覺し時計がある十個もあればどれかが動いて居さうなものなのに月に何回かは其の只一個の目覺時計の時間を聞きに行かねばならぬ。何んでも無い事のやうで、實は誠に恥かしい事だと時々思ふ。獨逸で下宿をさせてもらつてゐた判事さんの家には、懐中時計は別として、かけ時計と置時計が八つ程あつた。一年半ばかりの間に、其の一つでもが、少くとも私の見た時に停止して居るのを見出した事がなかつた。安いやうで、たやすく無い事だと今更思ふ。

まだまだ

太平洋や印度洋を汽船で通る時一週間も二週間も、晝夜間斷無く回轉してゐる機關の音を聞いて、機械力の偉大、從つて其の機械の創造者の人間の偉大を祝福したい氣持ちに成る。又新聞で飛行器の滯空レコード五百何十時間といふやうな記事を見ても、あの一分間千何百回と回轉するプロペラーが何百時間故障無しに持續回轉し得るのかと、愈進展發達し續ける機械力、人間智力に感嘆を催すのであるが、然しひるがへつて、もつと手近かに、もつと驚く可きものがあることに氣付くと、人間智もまだ〳〵いばれないと思はれる。人間の肺や心臓の運動は、たとへば私の肺、私の心臓は、既に母の胎内にある頃から動いてゐて、此世に出てからでも、既に早や五十年近く、只の一回の停止もせずに動いてゐる。こんなことに考へ及ぶと自然には到底及ばぬと云ふ感じが深い。

輸入したき事

すると相手は、それこそ親しみある友愛の微笑に埋もれ乍ら、わたしの質問には答へないで連りに帽

輸入したき事

兼安麟太郎
（京城高商）

一九二七年頃の巴里の青年の一部には、ジュマンフォーテイズムと云ふ言葉が流行して居た。例へば、メトロ等が混み合ふ場合、強いて座席に頑張つて、眼の前の婦人が人波に揉まれる有様をば、冷然と眺めてるが如き之である。

アナトール、フランスは彼のビキユールの園に於て、『最後に若しも私が女性であつたならば、女性を男性と同一になさんとする凡ての開放主義者に反感を抱くだらう。彼等は諸姉の權力を失はしめんとする。諸姉を辯護士や藥劑師に比肩する事が、諸姉にとつて結構な事だらうか。要慎すべき事である。已に諸姉は幾分の神秘を又多少の魅惑を失つた。だが全部ではないので、男性は尙ほ諸姉の爲めに自ら苦しみ、勝手に破産し自殺もする。だが、電車の中の青年達は、自分で腰掛け乍ら諸姉をば立たして居るではないか。女人禮讃は古き様々なる禮拜と共に亡びる』とペンを走らして、近代婦人に痛烈なる揶揄を與へて居る。

このフランスのペンやジュマンフォーテイズムより見て、少くとも私自身が想像して居た歐州に於ける男女間の關係は、生活戰線の擴大が婦人の方面に普及するに從ひ、漸次非浪漫的になり行くが如くに思へるし、而して之が單に歐州のみならず、現今の所謂文明國を通しての實相であり、世界戰爭が殘した土產の中の顯著なる一つであるが如く考へられる。恐らく此の男女間の儀禮なり道德なり闘爭なりは、今後の人間社會に殘されたる最も興味多き問題の一つであらう。しかも現今の社會生活形態がこのまゝに繼續する限り、免るべからざる問題の一つであらう。

か様な深刻にして不可避、又甚だ不愉快なる傾向の芽生えある社會生活の半面に於て、わたしはいともなごやかなる心で笑み迎へ得る生活慣習或は社會的儀禮の若干を拾つて來た。しかも之等は、わたし等日本人に對し、そのまゝに實踐の可能性を持つと考へらるゝが故に、茲にその一二を披露して雜筆社に對する文債を果す事にしやう。

巡査の愛嬌

七月の暑い或日の午後であつた新聞廣告によつて得た手紙を片手に、市外ヌイ町へ貸間探しに出た事である。所で、その貸間のある家の街がどうしても見當付かぬ。街さへ發見すれば、家を探すことは、日本のそれと異り、地番が甚だ科學的に設定されて居るだけに極めて容易なのであるが、街がわからぬのでは何と致し方もない。それでちよつとイヤセな感じのする巡査にその所在を尋ねた。わたしはその折に何心なく、先づ帽子を脱いでお辭儀をしたものであるすると相手は、それこそ親しみある友愛の微笑に埋もれ乍ら、わたしの質問には答へないで連りに帽子を着けよと云ふ、わたしが稍狼狽の姿で帽子を蒙ると懐中手帳の一頁を割いて地圖を畫いたが、更に、自分は今から非番でその街の近所迄歸るのだから連れて行くと云ふ。わたしは無性に嬉しくなつたが、たゞ嬉しくなつただけで、之を相手に表現すべき言葉の持合せがないのに心付き、渺々とエトランジェーの悲哀を感じたものである。

外國でも、帽子は脱ぐ方が儀禮的であるらしい。同時に、單なる義務の遂行と云ふ感じを見せぬ此のイヤセな巡査をば日本へも輸入して見たい。巡査がよいから公衆がよいか、公衆がよいから巡査がよいか、此邊の因果關係はありとするも不問に付する。只、日本の公衆と巡査との儀禮的道德的或は法律的關係に就ては今少しく考慮の餘地があるのではあるまいか。

バスの乘客順序

現代の文明都市が持つ苦惱の一つは、彼のラッシュアワーに於ける奔流のやうな人波をば如何に整理するかと云ふ事であらう。そして此の對策も色々想像され得る事であるが、此處では巴里市のバス乘降場に於ける一方法を紹介しやう。此の都會の乘降場には一本の黑塗鐵柱があり、之に、番號順に綴られた、日本の汽車切符より稍々大きく、そして極めて薄い紙片が、大人の手の届く高さに吊られて居る。バスに乘る人々は先づ此の紙片の一枚宛をば、その乘降場への到着順序に從つて捲り取る。到着せるバスの車掌は先着者が示

【二一】

時計

私の家には大小合せて十個程の

私はこんな情景を見る度毎に、親子の關係の偉大さに打たれる。親しい夫婦の間でも事によつては一旦口に出すともう取かへしのつかぬ結果に成ることが隨分ある。

材料の吟味でなくして、寧ろ讀ませ方の研究さある。

年近く、只の一回の停止もせずに動いてゐる。こんなことに考へ及ぶと自然には到底及ばぬと云ふ感じが深い。

京城雜筆

五拾錢の價値

井上要二（京城女子技藝學校）

私が昨年秋内地に旅行し大阪驛に下車した時僅かに一二時間の間に實に五拾錢の價値の大なる相違を味ふた。大阪驛を出ると前面に數多の商店がある。飲食店、カフエー等の乘客待合所あり、土產物を賣る菓子果物店等其他種々雜多のものがある。下車した時にちよつと寒かつたので一杯を酌んで用事に取りかゝらんと思ふて一飲食店に入つて一本の德利と一皿の料理とを命じた。命の如く饗せられた一皿の料理、分量も少なく味もまずかつた、調理法もなつて居らず、大阪のような大都會に現今では田舍でもない位のまずい料理であつた。しかしそれでも杯の爲に兎に角口には入れた。で、いざ勘定といふ事になつて其價を聞くと其の料理代が勿驚一皿五十錢なりと。田舍者と思ふて人を馬鹿にして居ると思ひ、ブンなぐつてゞもやりたかつた。實に余りひどい事をいふではないか、この料理が五十錢とは、斯樣な不都合な事をすると大阪商人の面目を汚すではないかと余りに不正な暴利を貪る事を憤慨したると同時に如斯商人が大阪市の中に居るといふ事は大阪市の爲に大にしては日本帝國の爲によくないと思ふて實に五十錢とはひどいではないかと言ふと、決して高くない吟味した料理であると言ふて平然たるものであつた。今にまだ其不正な利得をなす老主人の顏が目に止つて居る。これは五十錢の價値がなかつた例である

用事をすませて大分遲くなつた汽車に乘らんとして駈けつけると汽車は丁度ピーの音と共に驛を離れた。汽車に乘り遲れた程馬鹿げた者はない。しかし如何んともすることは出來ない、驛附近の一旅館に投ずべく決心した。すると驛前に一婦人が聲をあげて宣傳して居る。『汽車ばもう終ひです、此驛の有料待合所を御利用下さい、朝一番迄五拾錢（コーヒ付）で荷物も親切に御預りして安心して休まれます、どうぞ御越し下さい、驛に向つて左側の有料休憩所であります、化粧室もあります』と。今より朝まで五拾錢で休む事が出來れば旅館に身を投ずるより遙かに都合がよい、旅館に入ると朝早く出る事も出來ない、停車場の待合室で休ませてもらへればそれで結構であるけれど、停車場の待合室では休ませてもらへないから仕方がない、それに代るべき待合室があれば結構であるが五拾錢とは餘りに安値である、五拾錢で人を誘引し其の上で何にかを得んとする計畫ではあるまいかと思ふと、なんだか氣味が悪いようにも思ふたがそんな場合に遭遇せば飛び出せばよいと思ふて其の休憩所に入つた。すると左程廣い室ではないが、卓子を中央にして卓子を圍むベンチと室の周圍にベンチがあつて私が入つた時は三四人であつたと思ふが、時を移さず滿員となつた。三十人餘も居つたかと思ふ。皆々旅の空の疲勞の色に滿たされ肩を接して卓子にもたれ壁にもたれて眠に就く事となつた。眠る前に宣傳の如くコーヒー一杯をも與へられた。別に豫想したような心配もなく朝まで安眠する事が出來た。この五拾錢が前の一皿の料理の五拾錢に比較すると非常に價値ある五拾錢であると思ふ。

◈お玄關にて

をんな

○竹添町の松月先生のお宅へ御伺ひする。

○玄關に、お小さい御姉弟が出て見える。

○『私、雜筆ですがね……』と申し上げると、御姉弟お顏を見合せて、『アラ……今日は女の雜筆だわネー』

す番號より順次に讀みあげる。人は此の聲に應じ紙片を示し乍ら乘込む。如何に雜沓せる乘客も、かくて甚だ容易にかつ平和に整理さるゝのである。此の方法が彼地では極めて自然に、聊かの無理もなく行はれるのであるが、果して日本の都市に輸入してどうであらうか。だが、若し日本に輸入されて行はれなかつたとしても、それが方法の罪でない事だけは確實であらう（以下次號）

事實悲喜劇 透視

夫『遠くと云つて困つたなぁ』
妻『警察へも頼みませうか』
夫『探しに行つた歸りに頼んで置いた』

て居ると思ひ、ブンなぐつてゞもやりたかつた。實に余りひどい事をいふではないか、この料理が五十錢とは、斯樣な不都合な事をすると大阪商人の面目を汚すではなく朝一番迄五拾錢（コーヒ付）で荷物も親切に御預りして安心して休まれます、どうぞ御越し下さい、驛に向つて左側の有料休憩所であります、化粧室もあります』と。

○『私、雜筆ですがね……』と申し上げると、御姉弟お顔を見合せて、『アラ……今日は女の雜筆だわネー』

て見える。

京城雜筆

事實悲喜劇 透視

宮崎毅（辯護士）

第一景　或る家庭、朝　晩秋

十四才の少年『お母さん僕は一寸散歩に行つてくるよ』

母『お前は今日學校の宿題をする豫定じやなかつたの』

少年『ウン、だから一時間位で歸つてくるよ』

第二景　淸涼里街道、午前十時頃

以前の少年京城に向ひ來る、京城の方より同年輩位の少年二名漁具を持ちて來る。

以前の少年『やあ君達何處へ行くんだ』

此方の少年『淸涼里へ、一緒に行かないか』

以前の少年『僕は辨當を持つて來ないんだ』

此方の少年『いゝよ、僕等のを分けて食はう』

以前の少年『よしそんなら行かう』

第三景　淸涼里川邊、午后二時頃

少年甲『隨分とれたなあ、だが未だ魚籠に半分だ』

少年乙『腹が減つたなあ、晝食にしよう』

少年丙『二人分を三人で食ふんだ、腹が一杯になるかしら』

少年甲『足らなけりや僕が菓子を買つてくる』

第四景　以前の家庭、午后三時頃

妻『ねー貴所、何うしてこう遲いんでせう』

夫『何處か友達の所へ寄つたんだろう』

妻『でも心配ですは、探しに行つて見て下さいな』

夫『だつて何處へ行つていゝか見當が付かないじやないか』

妻『あの子はいつでも淸涼里の方へ遊びに行きますよ、心當りは皆んな電話で聞いたり使ひをやつて見たんですが何處にも居りませんは』

夫『そんならぶら〳〵見て來よう』

第五景　午后六時頃、淸涼里下流

少年甲『だん〳〵澤山はいるやうになつたな、ズッと夜る迄とろうか』

少年乙『でも辨當がないや』

少年甲『いゝよ、僕が金を持つてゐる何か買つて來る』

少年丙『賛成々々、徹底的に川魚征伐をやつてやろう』

第六景　以前の家庭、午后八時頃

妻君泣き聲『もし貴所、何うしたんでせうねー、辨當も持つて行かなかつたんですよ』

夫色青ざめて『淸涼里へ行く途を隨分探したが皆目分らない』

妻『あんなに近所の方々まで手分けをして探しても分らないんですから何處か遠くへ行つたんでせうか』

夫『遠くと云つて困つたなあ』

妻『警察へも頼みませうか』

夫『探しに行つた歸りに頼んで置いた』

第七景　淸涼里の下流、午后十時頃

少年甲『あゝ愉快だつたな、ポツ〳〵歸ろうか』

少年乙『ウン丁度尾籠も一杯になつた歸るとしやう』

第八景　以前の家庭、午后十時頃

近所の者多數集合、自動車が二臺來てゐる。

妻『あなた、透視の先生が○○旅館にとまつて居りますは、見て貰ひませうよ』

夫『そう〳〵電話で聞いて見やう』

夫電話の應待『ハ、ア、なる程淸涼里方面の、突き出た岩の上に身體がある、生きてゐませうか？、エ、分らないと』

妻泣き崩れる、夫近所の者七八名と自動車に分乘して出掛ける、妻泣き乍ら立つて佛壇に燈明を供へる。

第九景　淸涼里街道、午后十時半頃

淸涼里方面から少年三名高聲に愉快そうに談し乍ら來る、京城方面から二臺の自動車疾走し來る、出合頭にピタリと止まる、自動車より父轉ぶ樣にとび下りる。

父『おゝッ、お前歸つたか』

以前の少年『あつお父さん、何處へ行くんですか』

父『何處へ、ウフ、、、ハ、、、、さあ自動車へ乘つて歸ろう』

以前の少年『僕、友達と一緒に歸る、着物がズブぬれで寒くてしやうがない、之丈持つて歸つて』

まるめた着物を父に渡す。

【二三】

京城雜筆

第十景　以前の家庭、午后十一時頃

自動車來る、妻走り出る、夫が『居つた〳〵』と云ふのが『あつた〳〵』と聞へる、夫着物のまるめたのを抱へて出る、妻之れを死體と早合點して卒倒す。皆々介抱す。氣付く。

夫『オイ心配はいらんよ、今歸つて來る、途中で會つたんだ』

妻だん〳〵事情が分つて泣き笑ひの表情（了）

◈電車の中で

漢江漁郎

○新年を迎へて間もない一日、電車の中で、仁川の朝日釀造の支配人清水新七氏と出逢ふ。

○清水さん、イヤにニコ〳〵してゐられる。『上機嫌ですネ。何かいゝことがありましたか？』、『どうして……この不景氣になか〳〵うまいことはありませんよ、エヘッ』、京城驛前でお別れをする。

○ところが、あとで聞いて見ると、龍山の軍司令部では、これまで酒といふと、內地製の某酒を使つてゐたが、今度清水さんが、單身乘り出して、滔々黯河の辯を揮ひ、鮮產愛用の意義から說き起して、遂に金剛鶴の卓効に及び、トウ〳〵難攻不落の壘を押し切つて同酒を納入することに、完全に手打が出來たといふ。どうして恐ろしい凄腕といはんければならぬ。

○一見朴實の感じのする人だ、だが、熱と信念とで、猛然と押すなか〳〵以つて隅に置けぬのであります。

凍夜歸來

角田不案

夜業終へて歸る夜更の凍りゐて氣をつけて踏めどいくどもすべる

氣をつけてふめどもすべる凍りゐて轉ばんとすなりいくどもいくども

すべらざるところのありてのし〳〵と大股にきぬ靴にまたぎて

正月の夜ふけさむ〳〵とチゲの上にならべ賣りてゐぬりんごと密柑

凍る夜をチゲにみかんを並べ賣るあはれなる人を見てかへりきぬ

まちかねてついいねたるか子供等は一人も起きてゐず枕もとに置かむ（六、一、九）

居眠病

河本禎助

電車や汽車に乘つて見ると、日本人にはどうも居眠りして居る人が非常に多い。その狀態は鷄の白米病の狀態とよく似て居る。また日本人は夏痩せといふことをよくいふが、西洋人にはその夏痩せもなければ、電車などで居眠する人もないのである。

鷄は玄米と水とで養へば何ともないが、白米を食はせると二三日たつと、絕えず可なりの糖分を分解しつゝある所の血液の解糖力がグッと減つて、血液は酸性に傾いて來て、同時に鷄は立ちながら居眠むりを始めて來る、この時ヴイタミンBを注射してやると、血液の解糖力はグッとよくなる。

これから考へると日本人の眠がるのは、白米をあまり片寄つて餘計に食べるが故に、血液の解糖力が輕減する等の事があるのではなからうかと思はれる。

東大水泳部の選手大木君は、京都で京大選手にならつてヴイタミンB製劑を食べ始めた所が大變工合がよく、愈々競技となつてこれまでの百メートル一分六秒のレコードが一分四秒となつた。所が歸京後ヴイタミンBを食べずにやつたらまた元の一分六秒に戻つたといふ。讀者諸君！玄米を食べたいですネ。

家傳の妙藥

○

私は愚妻と共に、生花茶の湯に

ては、我又何をか言はんやである

しい凄腕といはんければならぬ。

○一見朴實の感じのする人だ、だが、熱と信念とで、猛然と押すなか〳〵以つて隅に置けぬのであります。

鷄は玄米と水とで養へば何とも

ないが、白米を食はせると二三日たつと、絶えず可なりの糖分を分解しつゝある所の血液の解糖力がグッと減つて、血液は酸性に傾い

ードが一分四秒となつた。所が歸京後ヴイタミンBを食べずにやつたらまた元の一分六秒に戻つたといふ。讀者諸君！玄米を食べたいですネ。

京城雜筆

家傳の妙藥

長郷衛二

（總督府内務局）

○

家傳の妙藥とか、一子相傳の秘法とか云ふ事が、我國で相等に勢力と信用を持つて居るのが私には不思議でならない。一体家傳の妙藥、一子相傳の秘法なぞは其効能効驗を吹聽宣傳する事は誠に熱心ではあるが、如何なる理由によつて効驗ありやといふ説明は、決して成さない。之は其理由を秘して其結果のみを賣らんとする、非科學的な遣方で大變に危險なことである。

○

我國には此家傳の妙藥類似の事柄や、又少々誇大に言へば、此種の制度が可なりに多いのは誠に遺憾である。

往時、世界の文明文化の中心地として繁榮した支那や印度が、現在の樣に萎靡沈衰したのは、他にも色々な原因はあろうが、此家傳の妙藥、或は一子相傳式の非科學的な秘密制度に、禍根が有ると私は信じて居る。

一つの發見された事實、或は眞理を、其然るべき理由を解明公表する事なく、之を秘法として、單にそれよりの利益のみを獨占せんとする、此種の制度は、伸びんとする文明文化にとつては一つの大なる障害であらねばならぬ。支那印度の影響を、善惡共に受け入れた我國が、又此弊に災されたのも尤もではあるが、猶未だに其羈絆より脱し得ないのは、我國の一大恥辱と言はねばならない。

○

此惡制度は、我國の音樂、技藝にまで其根を下して、所謂家元或は許狀の制となつて、斯道の發達と向上を阻害した。

技量なくとも家元であれば、其道の第一人者とされたり、技量あつても家元の許狀がなくては、常に下積みに甘んぜねばならぬのが斯道の現狀である。のみならず、此許狀なるものが其技の優劣によつて考へられると云ふよりは、多く金錢によつて考へられるに至つては、我又何をか言はんやである

○

私は愚妻と共に、生花茶の湯に五六年來趣味をもつて精進して居るが、其道の深き味と好さに非常に愛著を感ずると共に、此制度の弊を心から殘念に思ふのである。私も愚妻も其道々の許狀は、已むを得ずして稍最高のものまで得ては居るが、之は一片の反古同樣と考へて居る。要は其人の技と熱の如何にある事で、決して許狀の有無によつて判斷すべきものでないと深く誠しめて居る。

○

昨今博士號を一種の許狀扱ひにする人、又博士號を家傳の妙藥扱にして、何の爲め博士なるかをほかして、博士なる許狀をもつて私利を獲んとする人が增加した。之等は又文明文化に對する一種の冒瀆と言はねばならぬ。

（一月十四日）

◇耳にはさむ

北漢山人

○寺田榮氏といふと、辯護士中でも、屈指の左黨だ。

○が、今年は、謹愼中とあつて近年になき寂寥たる正月をした。

○それを、ヒドク同情したのが京電の森庶務課長、『オイ親友の俺のとこ位は、やつて來いよ』ー一夕清宴を設けて、大に友人の鬱懷を慰める。

○夜半に及んで、寺田氏歸るといふ。『さうか、ぢや送つてやらう』、イヤそれには及ばぬといふのを、無理に寒夜の途を、ワザワザ寺田氏方まで送る。

○『オイ窮屈と思ふなよ。君ア元來呑氣坊だ。斯うして俺が送らぬと、ドコでどう氣が變つて、横道へ這入らうも知れぬ。だが、これで俺も安心した。歸る……君ア早くやすみ給へ』――に、我慢强情で聞へた寺田氏も、ホロッとして、『オイ女房……聞いたか。ウーン、持つべきものは、親友ぢやのう』

× ×

○三越の玄關口の名物金子少年も、チト巫山戲方が過ぎるといふので、今は地下室か何處かへ追ひやられ、配處の月を眺めてゐる。

○でも、口のヘラない金子少年『何、支店長は、判つてます。今に私もバッテキされますよ』

多樣の統一

松月秀雄
（城大法文學部）

京城雜筆正月號の『思はず放つた矢』の筆者がK編修官と一緒に年賀に來て下すつたのは三日のことであつた。扁桃腺をひどくやられて溫突に籠城して居た彼は臥床のまゝ陰氣な應接をせねばならなかつた。しかし客も心ある人のことゝてこの失禮を覓恕して呉れたのみならず快談久しうするものがあつたのはこよなく嬉しいものであつた。

談たまたま雜筆に及んで、彼が『思はず放つた矢』を面白く讀ましていたゞいた話を持ち出すと、豫てその梗概を彼の口から聞いて知つて居た子供達がくす〳〵笑ひ出した。K編修官も彼の枕邊にあつたK正月號を彼の手から受取つて、『なるほど』と感心された。

その主旨は然し、たゞの笑ひ話ではないとのこと。テニスンの詩にもあるとのことだが、『人の惡口をいはぬ』といふ事ださうな。思はず放つた惡口の矢がとんだところで思はぬ人に致命傷を與へることになるとの意味ださうな。彼は新年早々此の上もないよい修身上の教訓を得たと客の去つたあとでも床の中でそれを反芻した。

同じく同筆者の御話に依ると、北漢山人も漢江漁郎も同一の存在で、しかも永樂町人すらがそれと別人でないとのことで正月早々初耳を驚かされた。永樂町人は他の雜誌の主筆と反對にいつもシツトリした味ひのある筆致を示して呉れる人である。漁郎や山人はそれと反對に人をして抱腹絶倒せしめずんばやまざる輕妙なる筆の持主である。英國の或る大新聞記者がオックスフォードかどこかの大學教授となるべき希望を擲つて記者に商賣替へをしようとした時にかたい文章とやわらかい文章とを二樣に要求されたといふことが蘇峰さんか誰かの筆で記されて居たが、漁郎と山人が永樂町人と同一存在ならばそれは硬軟兩派を兼備した二樣統一的な存在である下戸にして上戸ではないかも知れぬが、世の中を明るくも暗くも觀且つ寫し得る存在であるともいへる。

彼は四年許り前から毎年お正月には松本武正といふ名前の賀狀をいたゞく。武正君は多分城大法科の學生で顏は知つて居るが名前を知らない青年であらうとうつかりひとりぎめにきめて居た。ところがこの武正君は何年たつても同じ京城から不相變賀狀を寄せて呉れるので隨分入念に學生々活をする人だなと不審に思ふ樣になつた。そこへ今年も同君から早々と賀狀が來た。いよ〳〵不審に思つたが別に松本武正君の本體を明にしようといふ努力心も湧いて來なかつた。新年になつて扁桃腺の床の中で雜筆の新年號を繙いて居ると、その第五五頁に『謹賀新年』とあつて、次に『健康未だ十分でございませぬため勝手ながら年頭の御挨拶失禮いたします』そして最後に『松本武正』とある。不思議に思つて最終頁を開くと『發行兼編輯人としてその人の名前が極めて明瞭に印刷されてある。そこで松本君の卒業しなかつた理由がはじめて分つたが『思はず放つた矢』の筆者に依つて『二樣の統一』であつた不思議の存在が、今や三種四種の渦を捲いて一時に彼の頭の中へ流れ込んで來た。

名前一つに依つて一つの存在を認識し、また他の名前で他の一つの存在を認識し、多樣の中に潜める統一を直觀して常に物の本質を洞觀することを知らない自分の不敏を人生の大部分を無意味に過して來た後になつて漸く氣づいた彼の淋しい氣持は鈍物の彼の筆ではとても描けつこない。

然し『思はず放つた矢』の筆者の言を信ずることに依つて、京城雜筆の記者の中から、漢江漁郎と北漢山人との二人の名記者のそれぞれの實在性を失ふことは彼にとつて一層淋しいことである。

新築落成
一階　食堂撞球場
二階　御宴會場
三階　無料開放
本町五丁目
阿波文
電本一八三七

痩せた人肥えた人

永年の難病生活で、學生時代から一際目立つて痩せた男でありました。療病生活の十七八才から廿五六才までは、身長五尺三寸で體重

で、しかも永樂町人すらがそれと別人でないとのことで正月早々初耳を驚かされた。永樂町人は他の雜誌の主筆と反對にいつも卷末に

痩せた人肥えた人

占部寛海
（占部醫院）

三

次ぎに痩せた方は、それが病氣でゝもある場合には、何としても先づその病氣の療養が根本であります。『呑むだけ血になる云々』などと、痩せたものには飛びつきたいやうな、巧い廣告をしてゐる如何がはしい賣藥屋がありますが、之等はみんな眉唾ものであります彼の次亞燐の廣告に釣られて、わざ〳〵大阪の次亞燐本舗を訪ねた私の知人は、本舗の主人公が至つて貧弱な痩せた男であつたのに、愛想を盡して、爾來次亞燐の飲用を全く止めたのであります。之等は實に滑稽な丁度話家の話のやうな、而かも事實談であります。若し藥の力で肥えられるものなら、醫者である私などは、疾うの昔から見事に肥えて居るのであります又美味滋養によつて肥えられるものなら、金持に痩せた人はない筈であります。

尤も單に肥えたいと思ふ人は、脂肪や含水炭素を澤山攝つて、睡眠時間を長くし、適宜アルコール分でも飲んで、なるだけ心身を勞せないやうに、安逸遊惰な生活をして居れば、自然幾分かは肥滿して參ります。彼の徒食放縱の輩が酒池肉林に惑溺して脂肪切つた體をして居るのはその好適例でありますが、私はこの方法には斷然反對であります。何となれば、かゝる非活動的な行り方では、よし一時は肥つたにしても、それは健康上にも、生活上にも、百害あつて一利ない事で、活動すれば直ちに元の杢阿彌になつてしまふのであります。

眞に健全なる肥滿法は、適度の運動、睡眠、攝食と云ふ、畢竟人體の健康法に外ならないのでありまして　尙ほ特に私が痛感して居ります問題は、行往坐臥常にみだりに感情を動かさないと云ふ心の持方如何であります。之が爲には日頃精神の修養に心掛けて、八風吹けども動せざる底の不動心を鍛え上げることに精進すべきであります。

世間には、痩せてゐることを苦にして、肥えたい〳〵と思ひ惱んで居られる方も隨分多いやうでありますが、之等はあまりに考へが淺薄であります。肥えたい人は、なるだけ無用なことに神經を過勞させないことが肝心であるにも關はらず、肥えるがどうの、痩せるがあゝのと、一般の人の考へ及びもせぬことにまで、徒らに神經を惱まして居られる爲に、更でだに消耗し勝な精力は、彌が上にも消耗するわけで、結局肥えたい〳〵と思ひ惱んでゐることは、却つて痩せたい〳〵と焦つてゐることになるのであります。之では益々痩せるのが理の當然であります。

私なども生來の素質に加ふるに永年の難病生活で、學生時代から一際目立つて痩せた男でありました。療病生活の十七八才から廿五六才までは、身長五尺三寸で體重は八貫乃至九貫の間を往來して居たのであります。徵兵檢査には體量僅かに八貫三百匁……衆人環視の中で、眞裸にされて、而かも無情な看護卒等からは、『やれ金火箸だ、骸骨だ』と、まるで罪惡でも犯したものかのやうに、口汚く罵られたのであります。當人の私としては、兎に角云はれない先から、他人の立派な體を見ては、恥かしいやら、悔しいやら、涙の出る程、情けない思ひをしてゐるところに、この罵詈嘲笑の言葉であります。こんな辱めを受ける位なら、寧ろ一思ひに死んだ方が優しだとまで思ひ込んだのでありますが、而し心の奥底からは、『今に見て居れ』他日必ず醫道の奥を極めて、世の中の多くの病弱者、殊に痩せた人の味方となつて、いゝ意味の復讐をせねばならぬ』と我れと我が心に誓つたのであります。

又、學生時代に一番嫌に思つた事は裸になつたり、體重を計つたりする體格檢査でありまして、その度毎に命の縮まるやうな思ひを致したのであります。寄宿舍に居りましても、友達と一諸に洗湯に這入るのが恥かしくて、誰一人知つた人のゐない町の洗湯に、こつそり行くと云ふ有樣でありました

遂には人生の最大幸福は、肥えると云ふことにあるものゝやうに思はれて、人さへ見れば一にも、二にも、その人は肥えてゐるか、痩せてゐるかと云ふことばかりが目について、夢寐の間も、この問題を念頭から去ることが出來なか

電本一八三七

京城雜筆

つたのであります。

かやうに人々の思ひも及ばぬ事までに、日夜神經を過勞して居たのでありますから愈々益々痩せ細ると云ふ有樣だつたのであります

而し幸に一度眞健道を悟り得ましてからは、飄然心氣一轉して、かゝる無用な心配はさらりと止め只與へられた天賦の體力を最大限に發揮して、之を如何に巧妙に運用するかと云ふことのみを專念して居ります。二王樣のやうになりたいなどゝ云ふ柄にもない野望を一切棄て果てた今日の私は、最早や他人樣のお肥りになつた體を見ましても、露ほども羨ましいなどとは思ひません。否却つて肥り過ぎた方を見ては、お氣の毒にさへ思ふのであります。之は痩せた私の痩せ我慢ではないのであります

かやうに平和な氣分になりましたお蔭か、事實は反對に、段々肥つて參りまして、一頃に比べますと、優に四貫目位は增して居るのであります。

要するに痩我慢では駄目であります。實際悟つて見れば本來空であります。否本來水であります。二十貫、三十貫と云ふ大兵肥滿な人も、その六、七割は水から出來て居るのであります。結局肥つて居る人は水分を澤山含んで居る人であります。運轉に不便な體を持つて居る人であります。

畢竟痩せるも肥えるも、根本はその人の天性であります。無理から痩せやうとか、肥えやうとか思ふのは、自然に對する反逆であります非道であります。只已れの不節制から來る肥滿や羸痩は、何處までも矯めなければなりません。

【二八】

私が敢えて切言致しまする點は彼の愚にもつかぬ迷ひから、自然を無視した有害無益な人工的方法に賴らんとすることを退けるにあるのであります。殊に肥滿と健康とを同一視する一般世人の迷蒙を打破したいのであります。

而して、肥えるだの、痩せるだのと云ふことは眼中に措かないで只如何に強く、而かも思ふ存分の活動が出來て、相當長命を保つことが出來るかと云ふことを考究することが、最も健全な道で、之がやがて肥え過ぎた人は適度に痩せ痩せ過ぎた人は適度に肥える唯一の道であるのであります。

◇麗人を見る

北漢山人

○廣江澤次郎氏が、一代の麗人九條武子さんに初見參した記事は前號に登載したが、ソレには大分誤謬が多い。仍つてコヽに改めてホントウのところを、ゴ紹介することにする。

○東上中の或る一日、廣江氏は築地の精養軒の、大ホールの或る一卓に凭つて、山崎猛、板橋菊松の兩氏と閑談に耽つてゐた。

○勿論その周邊には、幾群もの紳士淑女が、それ〳〵の物語をしてゐた。

○と、忽然として、天女雲間より降るが如く、世にも神々しく、麗はしき一人の女性が、この大ホールに這入つて來た。つき從ふ侍女兩三名――滿場は覺えずシーンとなつた。

○麗人は、しばらくユックリと休息し、侍女達と何事をか語り興じてゐた。

○『誰だらう』、『ウン、この生ける女菩薩は?』と、滿場の男子悉く涎たら〳〵。その中廣江氏等は、それが九條武子さんと判つて、『オイ、スバらしいもんぢやのう』、『ウーン、實に言語道斷ぢや』

○やがて、武子さん一行は、滿場の男子に名殘を惜しまれつゝ、しづ〳〵と退場――それを機會に多くの客も、大抵は歸途に就いた

○『オイ、我々もお興を上げやうぜ』といひつゝ三名は、立ち上つて、何心なく前方の卓子を見ると、あら尊とや、ソコには紛れもなく天女の遺し給へる紫色絹製手袋があるぢやないか。三名士は、我れを忘れて駈け寄り、互に奪ひ合つて、その妙香馥郁たる手袋を嗅ぎ合つたのであります。魂、天外に飛んだと申します。

○さてそれからが――この手袋を、三名の共同保管物とし、尙細則を設けて、各自は、三日づゝこれを樂み、樂んだら次の順位者へ滯りなく廻附する事等々を協定し以來幾年かこの樂みを續けたとはどうです皆さん、世の中には隨分御奇特なお方もありますネ。

易
小唄
阪
岡村介石

友に語る

此の作はいつ何に發表されたかは私の知るところでありませんがとにかく作者の深い內省力がうかゞはれ今や社會も文壇も、更に小さ

友に語る

川上喜久子
（東拓木浦舍宅）

御親切にお尋ね頂き恐れ入りました。

師走といへば京城のお寒さもかなりきびしいことゝ存じますがお障りなく御活躍の御樣子承はり安心いたしました。私も誰に賴まれたわけでもないのに再び例の精神勞働に取りかゝり体にも心にも余裕なく暮して居ります。心持の異常な緊張のせいでせう病氣のことなど忘れ果てゝ暮して居りますが矢張り本當の健康ぢやないなと感ずる徵候が度々起つて參ります。しかし逃れたくも逃れられない生死の牢獄に囚はれながら私に課されたこの一種の刑罰、勞役に傍目もふらずいそしめる事だけが今許された唯一つの慰安であります。かうした見方を以てすれば藝術も宗敎と等しく忘却の手段、亞片の醉にちがひありません。同時に唯物論そのものも人生の謎に明答を與へてくれない限り同樣に譬へられないことはない――イギリスのストリーター博士はそのリアリティといふ著書の中で、唯物論が科學の盛んな現代人心に最も迎へられる所以は、唯物論も亦つまりは知られざる實在の時期をえた、最も巧みな描畫であるからに外ならないといふやうな意味の事を論じて居ります。此の本は私どもの疑問によく答へてくれる本でいづれ讀み返してみたいと思ひますが最近は自分の書くものゝ準備のために必要な書物を少しばかり讀みました。その中で堅苦しい書物のことはさておき、佐藤春夫氏の更生記を一讀し、フロイドの精神分析學を取り入れたわが國では最初の長篇ではないかと思ひました。此の小說は洗練されたよい文章と物馴れた構圖とが、物を書かうとする者に多少參考になればなるのですが、作者の新しい試みも精神分析一卷と精神病の本でも讀んだ者には特別に驚異に値するものではありませんけれど、專門の精神病醫ですらフロイド學說を治療に應用した位で新聞に事々しく報告されるあたりをみるとこれもやはり目新しい小說といへばいへるでせう。たゞ私はこの小說に出てくる須藤といふ文士とその家の描寫などから佐藤氏の風貌やベランダで鳴いてゐた鶯のことなど思ひ出させられ、次いで此人の內外に事多かつたらしい生活などを想像させられました。さうして丁度私が佐藤氏に會つた時はあの『のん、しやらん記錄』が發表された直後で、改造社の記者が芥川氏の河童のやうに此の作が作者の心境の危機を感ぜしむるものだといつて里見さんが大へん心配してゐられたと語つてゐた、それは具眼の士の誰しも直感するところの感じでありましたが此の更生記に盛られた作者の肯定的な穩やかな人生觀は我々にひとつの安心を與へます。

此の作はいつ何に發表されたかは私の知るところでありませんがとにかく作者の深い內省力がうかゞはれ今や社會も文壇も、更に小さく我々文筆修業者も、ひと頃の騷々しさから本當の反省に返る時期が來たのではないかなどゝ私は漠然と思つたりいたしました。

それから野上夫人の小說をよみました、これには感想が澤山ありますけれど茲まで書いてきて大へん疲勞を覺えます。きつと連日の無理がいけなかつたのでせう。こんなお話なら夜の明けるまでゞもいたしませうが自分の仕事の完成のためには何よりも先づ健康に注意しなければなりません。こゝいらで失禮いたしませう。

今日は師走の九日、たしか夏目氏の命日か與謝野夫人の誕生日のどちらかであつた樣に記憶してゐます。木浦に於ける此日、橋本豐太郎氏が逝ける君子孃の追悼のため編まれた『菊の名こり』を拜見し、當地に永く住まれる若松氏の廿二で亡くなられた令孃の葬儀に出席し、つい先日まで私の病床の枕近く大輪の薔薇がどういふものか開かないまゝ凋んでゆくのを見ながらいやでも死の問題を考へないではゐられなかつた。それと同じやうな暗い悲しみにともすれば心を閉されがちでございました。

本町二丁目
龜屋喫茶店
（電話本四二四五）

臺灣の話

松井權平
（城大醫學部）

或る警察官

臺灣の嘉義市は阿里山への登山口材木屋さん達の買ひ出しに來る處、狹斜な都と云ふ事である。又北回歸線の標も近くにあり正に熱帶圏に接した常夏の町である。が他面阿里山の巨木林が斧の響も無い太古自然の儘に森々と繁つて大空を摩して居た頃は土匪を平定して此地の人が嘉義と云ふ名を清朝からもらつた事や、小學讀本に出て居る義人吳鳳が身を殺して仁をなし、二百年の昔阿里山蕃の首狩の蠻風を止めた地も此近くである即ち以前は誠に道義的な土地であつたのである。吳鳳は當時支那人から其德を彰表されて廟に祀られたが今では生蕃の神だとて本島人から昔程に崇められないと云ふ話だ。今廟は改築に取りかゝつて居る。利に敏い臺灣人にも昔はこんな人物があつたのかと不審がる人もあつた。其話の序に永松君が巡査で而かも極近頃本島人から神に祀られた人があると談られた。此事を永く臺灣に在住して東南の地方の事柄に精しい松本君にたゞした。所が其松本君が名を失念せられた位、著名な人物では無い謂はゞ無名の一地方小官吏で今に其靈驗いやちこなので本島人間は勿論或る一局部の地方ではあるが鳴祖樣の伴位に崇拜祭祀せられて居るそうである。何でも領臺當初に嘉義から遠くない海邊の一寒村に駐在して居た警官で頗る熱心に土民を敎化開發し、其痩せた鹽分のある土地を自ら率先して改良し、鍬をとり耕作し播種し土民から君の如く尊まれ親の如く懷かしまれたそうだ。其間一脈の情誼が湧き、役人と人民と云ふ樣な隔てはなくなり、或時は減稅嘆願を執拗にしたとかで上官から甚しく叱責された事もあつた。其至誠に無智單純なだけ土民は動かされたらしい。其在職中に其地で歿したが骨は其處に埋められたか故山に海を渡つて歸つたか詳しく聞かなかつた。丹精の効は空しからず、辛く漁業などで細々と暮した寒村もどうやら生活に餘裕も出來、土民は巡査の德を素朴な腦髓に銘して居た。死後十年の間吹く風は吹き降る雨は降つて、其村には平和以外何も起らなかつた。ある年殆ど臺灣全島にコレラが流行し、猖獗を極めた事があつた。其村とて免る可き譯は無いのであつたがコ、に一つの不思議が起つた。それは或夜保正の夢に十年以前の巡査が現はれ『コレラ』が蔓延して村にも入つて來たから早く調べて疑はしいものは隔離し消毒豫防攝生等日頃月頃會て敎へた通りにして此の災禍からのがれよと戒めた。翌朝保正は村の某と云ふ鑄掛屋の天秤棒式の人々を召集してさて夜前の夢の物語をした。處が之はどうも唯事ではないと單純なだけ迷信深いから誰ひとり夢疑ふ者なく早速手を分けて戸別訪問疑似患者搜索を開始した所が御告げの通り既に二三の患者があつた、そこで一さい查公の遺訓通りに處置して遺憾なく消毒豫防をし他村のやうな猛烈な流行から逃れることが出來た。さらでだに有難かつた查公の事であり今又あらたかな靈顯を見た土民は神と信ずるより外はなかつたのである。そこで御姿を二尺程の木像に刻み支那流に赤く極彩色に塗り上げて奉祀した。これ迄は無難な當然な成り行であるが、誰とはなしに疫癘除けの神であると宣傳され硝子張の箱に納められ重病で參詣の出來ない病人の爲め近鄕數里出張までして病魔退散を努力して居るそうだ。孔明の木主が仲達を走らせた故事のある支那の流を汲む處とて今に效驗あらたかでさびれないそうだ。松本君も不便な田舍路を辿つてわざ〳〵參詣に行つたら木像は御留守であつたが、後偶然その御出先で拜觀したそうである。

生蕃の話

臺北帝大の宮本君、考古土俗の權威者の臺北醫專の宮原君、中央研究所の『バイブ』の趣味的研究者の服部君、嘉義の松本君などから聞いた話や案内記や霧社事件後新聞で見た事の總合である。文明の溫氣にあひ近代經濟の風が吹き込むと古代原始の風俗など消失してしまふので人類文化の發達過程の標本である未開人の衣食住も迷信もふつとんでしまふので土俗學者達は今の内に何とか保存の道を講ずるか、調査記錄しないと悔を千歲に遺すと云ふ譯で頭を痛めて

京城雜筆

或る一局部の地方ではあるが鰐祖樣の伴位に崇拜祭祀せられて居るそうである。何でも領臺當初に嘉

は村の某と云ふ鑄掛屋の天秤棒式の人々を召集してさて夜前の夢の物語をした。處が之はどうも唯事者達は今の内に何とか保存の道を講ずるか、調査記錄しないと悔を千歲に遺すと云ふ譯で頭を痛めて

居る。人間社會の事とてアルコール漬にも燻製氷詰にも出來ない。紅頭嶼のやうな島は學術的標本として大學で引き受け撫民敎化もし調査研究したらと唱へる人もある宮本君など重い機械を山に擔ぎ上げ歌や言葉を『レコード』にとり保存すると共に言語學的の研究もし母音の振動數も調べられると云ふもので躍起となつて居る。既述紅頭嶼の不便な孤島の住民は二千未滿のヤミ族で、首狩は地形上から他民族の頭が獲られぬ爲めか遠い昔から無くなり、『カッパ』のやうに水に親み漁を生業とする小民族である。小學校の兒童が小さな筏を擦いで河を泳いで越して通學する樣蛮樣である。此島から出る胡蝶蘭は總督府から保護植物として指定され採集は禁じられて居るが、既に本島にも擴がり可なり栽培されて居る。名づけ親は新渡戸先生だそうで先生御自身は忘れられたと屏東の公園を管理する老園丁が話した。ヤミ族は永く海から保護され平和な桃源鄕裏に大古無爲の民として暮して來たが時代の勢で追々と文化の侵入を受け、駐在巡査からだと云ふ噂であつたが肺結核に見舞はれたそうだ。從來未開人に無かつた病氣が交通の發達と共に侵入して來ると案外脆い相である。黒人は肺結核に弱いそうである。之は舊世界に於けるもので北米ではどうか聞かない。アイヌ族も結核と黴毒で減少して行くとか聞いて居る。タスマニア人の轍もある事だ、台北大學の人達の考も突飛でない。地球上廣しと雖六尺の褌を腰に纏ふ民族は我日本民族と我後進の此小民族の外はない。酒を知らないと云ふのも世界的の一驚異で昔は酒を釀したものが自然と或は何かの動機で忘れられたのかそれとも人間となり一邊の旅人は不念ながら聞きもらした。禁酒黨や禁酒國民は一度視察する價値があり正に超國寶で國際寶であらう。アイヌ族は土器を作らぬと考へられ千島アイヌが近き頃迄製作した事を鳥居さんが發見し、青磁燒を曾つて作つた民族が近頃迄は素燒の水瓶位しか作らないと、一般燒物は工藝として消長の激しいものゝやうである。ヤミの土器は台灣土產の一つであり轆轤なしで一年中定まつた季節に丈製作する。玩具も土製で近頃は好事家の需要と指導で上手になり從つて原始的稚拙な手法は失はれ上手になつて風韻は薄くなつて行く。止むを得まいが到底土器である精巧な實用な製作法を傳習して實際の生業とさせるなら兎も角原始人に近い手工品と云ふに價値がある。然りと雖も玩弄品製作の爲め一民族を開發せずに置くも人道上どうか。とんだ理窟になつたが木船もあり大木をくりぬき外側には曲線や人體の模樣を彫刻し舳も艫もあり、一寸『ゴンドラ』風で之で海の冲遙かに出かけるそうだ。喜田さんの海部がこんなものだつたであらう。劍が申々風雅で沼田さんだか坪井さんだかの日本民族の南方說の一證左として之と石、銅劍とが似たのなど引かれてあつたやうな氣がする。甲は丁度古墳時代のものゝやうで竹製で之に銀の薄葉を張り之に竹と魚皮製の胴をつけ今では祭禮の服裝だそうであるが、武者振英姿颯爽たるものがある。も一つ此小さき存在が國際的な問題を惹起したと云ふので笑はされる。英國の船とかが此近海で難破し船員はボートで島を目指して漕いで來た。所が好餌御參なれと『コルモラン』連師躍して海に潛りボートの底に穴を穿ちて沈沒、さて英國から嚴重な抗議が我國に來たと云ふ。漂流人や難破船の人々に同情や憐憫持つ事すら知らぬ憐むべき輩である。之と似た事件は本島の南方族で琉球藩民五十四人の漂着せるを馘首

人蔘劑では
一も二もなく

總督府
專賣局

精製の蔘精
に限ります

發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
（電本一三八番）
（振替七六一番）

京城雜筆

し明治七年西郷從道將軍の征臺となり後南端で遭難せる米國船員とかを殺し海兵から攻擊されたが地の利ある彼等は陸戰隊に一泡ふかし清國政府は米國の抗議で航海安全の標識の燈臺をガランビに建てる事となり明治十六年に初めて點火したと云ふ。此張本人はパイワン族である。之も七つの生蕃中異彩發する一種族で母系相續、女酋長などあり、我國太古九州邊にもこんな風習があつた樣である。土俗學通の宮原君は皮膚科專門で丁度其領域の疾病『熱帶フランベジー』と『チネヤ、イムプリカター』は此蕃族丈にある事や、宮原君の考古學上から『ペルシヤ』傳來說、中央研究所の服部君は工業化學方面で『エジプト』傳來說のトンボ玉を祖先から傳へて居るのも此パイワンである。近頃大阪名古屋で模造して居る。農民或は鄕土藝術の保護奬勵者である山本鼎さんがパイワンの木彫を見て始めて生蕃にも鄕土藝術ありと喜ばれ今總督府で保護指導して實用向のものも作つて居る。蛇人の首、鹿を刻り木偶をきざんで居る。中央及び北方の蕃族に就いては餘り聞かなかつた。松本君の話された未だ曾て文書に記載した事がなきパイワン族のある部族の談部の口碑に遺る女酋長の由來は頗る猥談で記載を憚る。

本塲銘仙
毛糸各種
ちゝぶや
本町二丁目
(電話五〇五番)

◈散々敗亡記

北漢山人

○洋畫の山田新一氏が、昨秋東上中、同期に美術學校を出た連中と、その翌年の連中とが、對抗野球試合をした。

○そして山田氏の組が、大勝を博したのである。

○スルト翌年組は、今度は、將棋で雌雄を決したいものだ。その勇氣がありますか——

○これを聞くと、山田氏の組は手を拍つて驚喜した。といふのは我れに驍勇山田あり、その儀なら一番總營めにしてやらうといふのである。

○コヽで、一寸說明します——山田氏の同年組には、棋客も相當多いが、誰一人として氏に勝つものはない。『お前は、馬鹿に强いのう一体何段を指すのかい』、答へていふ、『何段か知らぬが、今の世では、先づ關根名人を除いたら、ワシの前に立つものは、先づあるまい。オツホン』——斯くの次第だから、連中は、まことにいゝ心持になつた次第であります。

○いよ〳〵當日が來る。ヘボ同士よりだん〳〵指し進みまして、遂に敵の大將と、我が總帥山田とが取ツ組む。敵味方固唾を呑んでこれを觀戰いたします。然るにドウしたワケか、敵は一手は一手より優勢に、我れは、指せば指すほど劣勢に、いはゞまア岩石をもつて雀の卵を、ヘシつぶしたやうに至極あつさりと片づけられたのであります。

○日が悪いとしても、これはチト徹底し過ぎてゐます。仍つて御本人も、お味方連も、ポカンとして、開いた口が塞がらぬ。

○だが、よく〳〵聞いて見ると敵の大將美校を出ても、繪は物にならず。年がら年中東京の將棋所をウロづき廻つて、この方は正に三段格——いつて見ると、まア賭ケ將棋がその本職のやうなものだと判る。

○ソコで、友人連が、『オイ山田！負けるにしても、チトきよくがなさ過ぎるぢやないか』といふと、山田氏ケロッとして、『オイ聞いたか。のう相手は三段だぜ。だとすると、オレがさんだんにやられるのも、のう敢て不思議はあるめいヨ』

一番緊張めにしてやらうといふのである。

○コヽで、一寸説明します——

ど姿勢に、いはゞまア岩石をもつて雀の卵を、ヘシつぶしたやうに至極あつさりと片づけられたので

だとすると、オレがさんだんにやられるのも、のう敢て不思議はあるめいヨ』

ふぐ料理
お座敷金婦羅
川長
旭町一丁目

最尖端を行く
明るく靜かな
カフエー
アルプス
京城本町二丁目
（山本旅館前）

茶いろ〜
茶器いろ〜
青々園茶舗
京城本町二丁目
（電話本局一一一一番）

外科
皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

お二人で一つの保險に
はいれる然も保險料は
普通の一人分餘ですむ
二人保險
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期配當の外
に普通配當がつきます
不老保險

M式卷上日覆
ホロ形日覆
各種テント
踏車用雨覆
非常袋
フトン袋
其他帆布製品
製作販賣
京城驛前
中西テント商會
電本二八四八

京城永樂町二
酒井婦人病院
院長 酒井一郎
（電話本局一八番）

京城本町二丁目
一番瀨醫院
院長 一番瀨慶次郎
（電話本四〇〇五番）

朝鮮運送
株式會社
京城支店

金物類
近藤商店
京城本町三ノ三三
電話本局一五六二番

明治町二ノ七五
利根川齒科
院長 利根川清治郎
（電話本局二八六七番）

感想一片

嚴肅な氣持で力強く『俺こそは詐りなき者だ』と即答し得るものは幾人あらうか。

冬服
既成品
廉價無比何卒御來店を乞ふ
特別仕立
新地着荷
御注文に依り入念調製仕候
京城府鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

感想一片

後藤長治
（府廳學務課）

私は此頃自分の本當の心持のまゝに言つたり行つたりする事がどんなにむづかしい事であるかといふことをしみ〴〵と考へる。假令ば雜筆の原稿を書くにしてもいろ〳〵の意味で隨分自分で自分が拘束されるやうなかたくるしい氣分になる。本當に之は卑怯な態度と思ふがせめて匿名でもあつたらと思ふやうな事さへ屢々ある。

毎夜寢に就く前必ず其の日の事を反省して有りのまゝ自分の心の動きを記すべき日記でさへ稍もすれば自分の醜惡な一面にはそれとなくふれないやうにし自分の光明の方面をのみ然も誇張して表現し勝なのである。勿論それは『何も不快な印象までも書き殘す必要はあるまい』といつたやうな氣持からではあるが、又更にその心を深く分析して見るならばそこにはやつぱり人に見られてはいけないとふ氣持が多分に支配してゐるやうに思はれる。よしそれは假令對他的に些の影響のないことであるにしても自分の心の眞の動きを覆ふてゐるといふ意味に於いて虛僞の態度だといはねばならぬ。

私共の日常生活に於いてかうした本當の自分の心にそぐはない態度がざらにある。『金を貸してくれ』といはれてあるにも拘はらず『なくつて』といつたことはないか。『不賛成』であるにも拘らず『賛成』だといつた事はないか。少しも笑ひたくないのに先方の御氣嫌に添ふべく無理に如何にも自然らしい笑ひに見せかける爲に努力したことはないか。其の他『相槌を打つ』とか『迎合する』とか或は『妥協する』とか凡て對者の爲に自分自身の心を僞つてしまう事が數限りなくあることに氣づくであらう。弱き者よ汝の名は人間なり矣。

人はその生活の觀じ方に於いて特に生の內面を反察しない場合に其の事が人道上また倫理上如何に墮劣な憎むべきことであつてもそれ等の憎むべき事實が現に一般に存在し通用してゐるといふことから全く無關心に習慣的に看過してゐることが少くない。

欺瞞や謀詐はたゞ單に社會的な罪惡なばかりではない。之を個人の生活について考察しても、さうした生活が、どれ程その個人に複雜な戰慄に値する不必要な苦痛を感じさせるかわからない。一つの欺瞞は更に一つの欺瞞を必然的に生み果は無數の欺瞞が遂ひに個人の生活を根底から暗黑にしてしまふ。

トルストイは言つた、『自分を詐ることからすら脫し得ぬものがどうして對人の社會に事をなし得る資格があらうぞ』と、全くさうだ。からした言葉に對して心から嚴肅な氣持で力强く『俺こそは詐りなき者だ』と即答し得るものは幾人あらうか。

敎育史は傳へる。ラグビーのアーノルド校長は決して嘘のいへない人であつた。自分で嘘がいへないものだから誰も嘘はいへないものと信じてゐた。それで生徒がどんな冗談をいつてもそれを眞にうけてそのまゝ行つたものだ。生徒達はその事を面白がつて隨分校長をからかつたものだがアーノルド校長はどんなにだまされても決して生徒達を疑はなかつた。こゝに於いて始めて校長をからかつてゐた生徒達は今度は校長のこの少しも疑はない態度そのものが何よりも恐ろしいものとなつて來た。私達はかゝる何物も疑はないむしろ『あまりにも愚直』ともいひたい態度に一種の憫笑をさへ感ぜしめられる者であるが、私は自分自身あまりにも疑に滿ち虛飾に充つるものなる事を內省するものなるが故に此等の先達の疑はない態度を見て此の上ない尊いものだと思はないでは居れない。

私達は日々の生活に山積してゐるかうした事を訂正して行くこと言葉をかへていへば自己を鞭打ち戒め、愼むことを所謂生き甲斐の內容としたい。

敎育といふやうなことも、それはたとへどんな立派な形容で修飾されようとも其の任にあたるものが自分の虛僞からさへ脫しかねてゐては本當に輝かしい業績をそこに見出すことは出來まい。

私は暗い溝のないすつきりした明い心と心とをもつて相接する社會がこの世に現出したならどんなに嬉しいものであるかも知れないと常に思ふ。（六、一、一七）

古本屋

飯島滋次郎
（京城醫專）

古本屋も花屋のやうに趣味の商賣であるから、間口がいやに駄々ッぴろかつたり、塵にまみれた古雜誌がうるさく積みかさねてあるのは、面白くない。それに素見しやうと足を停めると、すぐ小倉服の少年が附纏つたりして、薄暗い奥の一段高い所には牢名主然と苦い顔が浮んでゐるのはさらに面白くない。

震災前に神田小川町の外に幾許の町を代表する古本屋があつた。そんな家の亭主は嵩山堂とか朝倉屋など和漢書の老舗に年期奉公を務めあげたので顔付も古典的に引緊つて、それに書物を愛撫する念が傳統的に傳つてゐるから店にも手垢だらけの汚い本は並べてなかつた。

そんな店が一軒青山にあつた、馴染の客には苦茶など汲んでくれた。山路愛山などもよく來るやうだつた。お可笑しいのは愛山が、『これ貰つて置こう』と鷹揚に眇らませた和服の懐中に棚から抽出した本を入れると、『をつと、先生、そりやお可笑しい、それは先日お宅から出たんで』と云ふと、『又やつたな』と苦笑しながらも默つて買つて行つた。家の書生が寄贈してくる本を持出しては餅菓子の代に換へるそうであつた。

淚香の探偵小説には巴里のモルグと云ふセース河畔の變死體陳列場は何人でも覗かれるやうに書いてあるので自分も恐る〳〵行つた然しそれは昔の事柄で今では何人にでも參觀させるのではないと解つた。そこでセース河畔の古本屋を素見してみた。作りつけの屋臺に鍵がかゝるやうになつてゐる。並べてあるものはゾラでもユーゴでも安ッぽく彩色した表紙の安本ばかりであつた。此處も昔のセーヌの古本屋と其内容を異にしてゐるそうである。

ライプチヒは流石に本の市である。統計によると獨乙の本を買ふ國はアメリカがトップで其次が日本である。然しアメリカの數十萬麻克は恐らく獨系米人の需要の爲めであらう、日本は多分に獨乙の粕を嘗めさせられる理由になる。

矢鱈に分類してみたがるのは獨乙人である。『貴下は如何なる書物を欲するか』『植物學』『其如何なる部門か』『隱花植物』『その如何なる類か』『苔類』、然らば此方へとカードを繰つて案内する。こんな店では悠々と素見しは出來ない。そんな大きな店より巴里倫敦又はアメリカを薄手に眞似ない古き伯林（ベルリン）の區劃にある古本屋が好ましい。舊式な戸を押すと鈴が鳴る。狹くてうす暗い店には書藉版畫が雜然と並べてある。出てくる亭主もブッシュの繪筆に描かれた伯林人である。譬へばチョビリ毛髪の殘つた禿頭で、粗末な服に底皮の厚い大きな靴を穿いて、老眼鏡が鼻の頭に乘つてゐるやうな人達である。少しむずかしい本を買ふと、『然り教授よ』と呼ぶ戰爭記でも買ふと、『然り、大尉殿よ』と尊稱を奉つてくれる。」

【三八】

都鳥
割烹
鳥水
焚
旭町一丁目
電本三三六六

◇本ブラ雜記

漢江漁郎

○本町の藥舗貴生堂の御主人津留崎さんは、ホントに稀に見る立派な人格の人であります。

○但し新聞や雜誌に、甚々と名前を出して、自傳を吹喋することなどが大嫌ひで、『先年も、或る方面から、『全鮮禿頭番附』を作るからと申して、ワザ〳〵寫眞機まで持つて來られ（津留崎さんその方の有資格者です）さア〳〵と催促される。その仲間に加はれば私も、大學病院の廣田博士や、朝鮮公論の石森さんなどと一緒に、實は朝鮮の名士になれたんですがどうも性得晴れ〳〵しいことが嫌ひでしてネ』

○コ、で、津留崎さん改めてニコ〳〵笑ひながら、『だが、禿げの方では、私も相當大家であるとは自認してゐます……』

師走の國境を過ぎる

路を此の一燈に便る、車輪は曲り角杯でチョイ〳〵辷つて呉れる、寒冷は足先きから鼻尖きから次第に滲み込んで來る、トップリ暮れ

師走の國境を過ぎる

鉅鹿曉太郎
（鐵道局）

圖們西部線即ち元の圖們鐵道會社線はタンネンに圖們江に沿ふて川なりに曲りくねつてる。

新會寧驛に着くと、『今夜上三峰驛を襲撃する』と云ふ匪賊の脅迫書が舞ひ込んだと云ふのだから凄い。機關車も客車も誠に輕便で可愛らしい。

車内も思つたより暖い、座席の幅の狹いのには困つた、强ち筆者の尻が大きい許りではないらしい。

驛々には必ずピストル携帶の警官が徘徊して居る。

川を隔つる兩國の山々共に一樹を殘さずむき出しの山、むき出しの川、寒風は音もなく渡つて居る。

山の麓風を避くる處三々五々鮮人の住居を見る、之れは國境を超越して居る。

間嶋富士は調ふた形を前面に展開する、文祿の昔鬼將軍清正が、我が富士山と間違へたと云ふのは此の山かどうか、考證は知らず少くも方角と見當は違ふようだ。

十二月廿一日である、河面氷を以て鎖され居ること丶思つたが中流未だ水面の露出するを見る、未だ氷上通行自由ならずである。

上三峰の手前で査公によつて名刺の提示を求められる、毛皮の胴着毛帽子、僅に袖章によつて知る上三峰驛は潤貨の山であるが此の所謂、共匪の威迫にも餘り驚いて居らぬらしい。併し構内には銃を持つ警官二三働いて居る。

國境唯一の鐵橋が此處から江を横ぎつて居る。壯觀と云へば壯觀であるが規模の小い如何とも仕方がない。

乘り換へて鐘城に向ふ、車中穀物商組合長の語るを聞けば

『今年は豐作の安値で百姓はドモならんのです、何しろ一斗の豆を賣つて敷島一つ買へないんですからね』

『慶源に新開の水田を持つて居りますが七百圓程の水税を償ふ丈の半は無いのですから閉口しました』

鐘城の午下り自動車の發車を待つの間はかなり冷あた、やつと出たと思ふと郵便物の便乘だ、之れが又時間潰しの恐しいものである、京城を距ること八百哩、人間の氣持も自然間が延びて來るらしい。

一路雲峰嶺に向ふ、救はれた思ひである、慶源迄十里二十三町、日沒迄には届かねばならぬ、人家はチョツとやソツとでは見當らぬ普通學校は何處も同じ飛び離れて宏壯である。路は右折して雲霧嶺に向ふ、草はあれども木は無い山だ、全く山高きが故に尊からずだ壯嚴さや親し味を見出すことは出來ない。

夏六月は全く山の草悉く花を着け美觀を呈すると聞くも滿目蕭條只タイヤに觸るゝ雪氷のカラ〳〵と鳴るを聞くのみ。山を下る時自動車は發を入れた、山腹を繞る隘路を此の一燈に便る、車輪は曲り角杯でチョイ〳〵辷つて呉れる、寒冷は足先きから鼻尖きから次第に滲み込んで來る、トツブリ暮れて慶源の街に入る。前方を空荷馬車が物に驚いて走る、裂ける樣な音と白埃をフンダンに立てゝ呉れるのも物淋しい。

旅館の温突は嬉しかつたが廊下を仕切る障子は空氣の調節を仕過ぎた。

慶源平野と琿春平野は豆滿江を隔てゝ展開して居る、我鮮土は悉く瘠せて支那側は肥あて居る。

地勢の關係もあるであろうが左りとは餘りの懸隔である、これ聽て鮮土の人口を稀薄ならしめ支那地を豐滿ならしめたのであろうが其のも一ツ前の根本原因はそれ〳〵なくてはなるまいと思ふ。

豆滿江も此のあたりは完全に氷結し人馬共に氷上を往來して居る上流は流速早く下流は緩なる爲めとの説明を得た。

慶源驛の位置は邑を距る一里の地點である、これはよくある例であつて技術上其他止むを得ざる理由があつたらしいが兎に角琿春慶源をつなぐ通路からは思ひ切つて横に外れて居る、あて込みの琿春の貨客が直路此の驛に入るには直通路の必要があり且つ大變近くなるのだそうな。必至の狀勢が此の問題を解決した曉は慶源邑の問題ともなることであろう。

圖們東部線は幅の廣い線路を江に沿ふて東に走る

對岸東間嶋の家屋は鮮土と趣を異にし全くの土造で而も多數集團して居る。五戸の村十戸の邑に驛があるのも頼もしいが人煙稀なるを如何せんやである、民を移すてふことも考させられた。

京城雜筆

雄基灣の紺碧を望んだ時には壯快を覺えた、灣に莅む市街の上方を汽車が通り越して停まつた。

牡丹茸の家を段々に澤山描いて各戸盛んに煙を上げて居る圖は好箇の雄基スケッチである。

風速三十米突の地に新に表口を作り、開けずの扉にした杯は話柄にもならぬ、氣樂なる建築家である。

◇頭山翁の書

三木一彦

○頭山滿翁の書（尺五）が、今雜筆社に四枚保管してあります。

○これは、四五年前まで、同翁の門に出入した某氏が、翁から書いてもらつたもので、都合に依つて、同好の士に買つてもらいたいといふのです。

○御希望の方は、小社へ御申越下さい。字句は

山是青々花是紅
樂天意壽其分
花依清香愛
悠然對兩山

といふので、二三の先輩に見てもらいましたが、大邊によく出來て如何にもアノ巨人の風格を偲ばせるものがあるとの話です。

子供と勉强

高良富子（ドクトル・オブ・フイロソフイ）

一、學校の成績

子供の學校の成績といふものについて親御さん方が、餘り大事に考へすぎるといふ事が先づ第一に間違ひのもとであります。子供が大事か、學校の成績が大事かといふことをよく考へていたゞかないと學校の成績をよくしようとする餘りに大事な子供を惡くして了ふ親がよくあります。

學校の成績といふものは、その子供のごく一部分の性質を示すだけであります。その子供が、人間として一生をよく送るやうに、親はいろ〳〵な方向から子供をよくしてやらねばなりませんから、たゞ、學校の出來、不出來だけを餘り氣にしないやうにして、コセコセしない、しつかりした性質の子にしてやらねばなりません。

二、勉强のこと

子供は本統は勉强することが好きなものだといふ事を親御さん方にかたく信じ〻頂き度いのです。それだのにどうして嫌ひになるかと申しますと、それは、子供が遊びや面白い事を一生懸命に勉强して居る時に、親御さん達が『勉强しろ』と云はれるからです。それで、親も子も、『好きな事をするのは勉强ではない』といふ間違つた考へを持つて了ひます。勉强せよと云はれる事は、面白くない事と子供も思つて了ふのです。

ですから、『勉强』といふ言葉さへ嫌ひになつて、云はれる度に『いやだなあ』と思ふやうになります。ですから、親や周圍の人は勉强しなさいと云はない方が、子供を勉强好にさせます。

三、勉强の面白さ

家の人達が、『勉强といふものは面白いものだ』といふ事を話し合ふ事はいゝでせう。そして子供の好きな事を一生懸命にすることが勉强だといふ事を聞かせて子供の好きな事と學校の勉强とを上手に結びつけるのです。

野球の好きな子には、今日の野球について作文を作つてごらんとか、雜誌の中にある算術のあてものをしてごらんとか、好きなラヂオの機械を寫生して見てはどうかといふやうに誘つてやります。

四、信じさせよ

子供が一生懸命にした以上は、假令その結果がよくても惡くても間違へて居ても、よくやつたといふ事だけは必ずほめてやつて頂き度いのです。學校の勉强でも、一生懸命に努力してやつた以上、成績がよくても惡くても、とにかく勉强をした事を褒めてやつて頂きたいのです。そしてお前は出來るとか、出來ないとか云ふ事は、よくありません。一生懸命にしさへすれば、必ずよく出來るやうになるといふ事を信じさせませう。勉强の樂しみを知らせると同時に、勉强しさへすれば、結果は心配しなくもよいと云ふ事を敎へませう

一番よい事は、毎日、御飯をたべると同じやうに、復習をする事の習慣をこしらへませう。習つたところだけは、よくおさらひをするやうに。

書人錄

『イヤ恐縮千萬……では頂いて參る』

ペコリと一ッ頭を下げて、向ふをむいて歩き出した。十歩ばかりのぢや。いかにしても斯樣なものは大事の御用には相立たぬ。今一度書き直して參れ。ウム、役目の手前を以て、屹と申しつけたぞ』

にしてやらねばなりません。

二、勉強のこと

子供は本統は勉強することが好

家の人達が、『勉強といふものは面白いものだ』といふ事を話し合ふ事はいゝでせう。そして子供の好きな事を一生懸命にすること

べると同じやうに、復習をする事の習慣をこしらへませう。習つたところだけは、よくおさらひをするやうに。

京城雜筆

畫人錄

永樂町人

狩野祐川

寛政文化の頃、幕府の繪所を預つてゐた狩野祐川は、當時の大家であつた。

丁度文化年間に、朝鮮の使節が來朝し、江戸に滯留中、吉例に依つて幕府では、朝鮮王へ屏風を献じやうといふ議があつた。

揮毫の命は、祐川に下つた。

祐川は、非常の緊張味を以て、近江八景を描き上げた。それは非常な出來榮であつた。祐川は、我が一代の大傑作であると思つた。

老中、有司の下見の日が來た。祐川は作品を携えて、うや〳〵しく出仕した。

しかし老中阿部豐後守は、この繪に感心しなかつた。

『祐川、これは、そちの作ぢやナ』『左樣で……』『どうも全體として、チト薄過ぎるぢやないか』『ハ、お言葉なれど、近景は濃く、遠景は……』『それは、いふまでもないが、これはどうも白けて見ゆる』『尤も、繪と申しまするは、その見方にも……』『何と申す、予に藻鑑の明がないと申すか』

列座の有司は、ハッと呼吸を呑んだ。

『イエ〳〵、左樣な議ではございませねど、手前としては、モウこの上工夫の餘地は……』

豐後守は、キッとなつて、

『それは、そちの慢心と申すものぢや。いかにしても斯樣なものは大事の御用には相立たぬ。今一度書き直して參れ。ウム、役目の手前を以て、屹と申しつけたぞ』

流石の祐川も、腹に据え兼ねた『左樣でござるか。いつの世にも良工の苦心は……イヤ、是非もない次第でござります』

彼は慘として座を立つた。平川口から退出した。が、下城の駕籠の中で、美事腹一文字に掻き切つて、空しうなつてゐた。

池大雅

池大雅には、傑作富士一百圖がある。

京都の畫室に、寢轉んでゐて、ゐながらに名所を書いたのではない。昔時の畫人にして、この人位たび〳〵富士の頂きを究めたものはない。

彼は高所が好きであつた。

白山にも登つた。立山にも登つた。そして、自ら三岳道人と號した。

彼の畫風は、彼の所好と同じく高逸清雅を極めてゐた。

にも拘らず、彼は平然として、京は祇園の、最俗惡の渦卷のほとりに、女房の『町』と共に住んだ

彼は、いつも貧窮であつた。この時も、大阪へ出向いて、少し畫料を稼ぐつもりであつた。彼は、トボ〳〵と建仁寺前あたりまでテクつて來た。

『モシ〳〵』と呼ぶものがある振返へると、一人の婦人が、一束の筆をさし出して

『お忘れでしたネ。さアお持ちなさいまし』

彼は、その筆を、自分が途中で遺失し、通りすがりの婦人が、拾つてくれたと思つた。

『イヤ恐縮千萬……では頂いて參る』

ペコリと一ッ頭を下げて、向ふをむいて歩き出した。十歩ばかり行く中に、ハテナ、今のはどうもよく内の女房に……と思つた。だが、また女房たる筈もないと思ひ返して

『ハテ、いづれの御婦人かは存ぜねど、これは〳〵御鄭寧……いたみ入る』

さう獨言つて、コッ〳〵歩き出した。

反對方面へ歩く婦人は、押え切れぬ笑ひを、その半面に漂はしてゐた。

『いづれの御婦人かは……』といはれたその御婦人は、いづれの御婦人でもなく、彼の御内室で、シカモ彼は、家を出る時から、繪師の魂の、筆を忘れて、フラ〳〵と飛び出したのであつた。

大阪で、看板の『大和屋』の三字を書くと、肝腎の筆料も貰はないで、スーッと大和へ飛んだ。大和の二字が、彼の詩腸をそゝり立てたのだ。

田崎草雲

田崎草雲は、青年の頃手のつけられぬ不良であつた。

西瓜の中味をくり拔き、流し行く按摩の頭に、スッポリと被せるのが奥の手。按摩は、西瓜の匂ひで、晝夜蚊と蠅とに責め立てられた。

『あばれ梅溪』これが彼の通り名であつた。今日なら、不良硬派といふのであらう。

四十を過ぎ、貧苦の中に女房を死なせてから飜然操行を改めた。

花は盛り月は隈なきあたら夜を

醉ひ倒れたる人は誰かは

心機一轉期の詠懷である。

辛未漫錄（一）

中村榮孝
（朝鮮史編修會）

君臣の同宴

朝鮮の風俗で、宴會は社交上の最大要條件である。同族同志の和親、同鄕の親睦、官民の融和、何一つとして酒宴を中心としないものはない。古くから會とか契とかいふのは、實にこの宴會に由來して親睦團體になつたり、同業組合になつたりしたことを見てもわかる。いはば原始社會の古俗の連綿發展して來たものにちがひない。

朝廷の君臣關係も、何かの機會と名目とを選んで、宴會が繰りかへされてゐた。王の御前の酒宴などといつても中々儀禮一點ばりの窮屈なものばかりではなくて、全くの無禮講で、よく君臣融合の實をあげてゐた。特に李朝の始め太祖定宗太宗三代あたりは、共に轡を並べて千軍萬馬の間を往來したり、廟堂に席を同じうして議論を闘はしたりしてゐた人達を臣下として臨んだのであるから、この無禮講を利用して、辭歌亂舞の間に宜しく丸めこんでゐた場合が頗る多い。ちやうど同じ頃に江南の一農民から成上つて支那を統一した明の太祖なども同じやうな趣があつた。當時にしてみれば、君臣同宴といふことは、治國の一大要件だつたのである。

ところが李朝も四代となつて世宗の頃になると王室の基礎は固まつて來るし、威嚴も備はつて來た德川家光の將軍振りを想はせるやうな節が頗る多い。それでもまだ君臣同宴の遺風は衰へない。ちやうど位について七年目に當る六年十一月の冬至が近づいた時の事である、禮曹判書の申商が王に申上げた。冬至には、是非君臣同宴を催して戴きたいと、すると世宗は昔、父の太宗が、『君臣の情は、宴會によつて通ずる』といふことをいつたことを覺えてゐる。また禮が過ぎると分裂するし、樂が過ぎると節制がなくなるといふこともある。群臣が皆な一年中勤勉に働いてくれてゐるのであるから、一夕大いに胸襟をひらいて語りあひたいのは山々である。しかし、用度が裕かでないばかりでなく、この數年來洪水や旱害が引き續いて人民が困難してゐて、やつと今年どうやら一息ついたところではあるし、來年とて農作がどうなることか判らないのであるから、まづ今年は廢めた方がよからうと對へ、とにかく元老の領敦寧柳廷顯と相談させた。ところが、その結果は、君臣の同宴といふことは、元日には必ずやらねばならないから、冬至には、姑く二品以上の重臣とだけで酒宴を催したなら、父祖以來必ず行はれて來た仕來りの趣意を立てることも出來るし、用度も節約出來るわけになるといふので、その通りにした。

この話は色々な意味で興味をひくがまた一面建國創業並びに守成の君臣の苦心も察せられるであろう。

初雪の宴

今年は大分雪が多いし、初雪も早かつたが雪についてはどこでも傳說や習俗の豐かなものであるが高麗以來の風俗として面白いのがある。それは、初雪の降つた時、親しい友人や親戚に新雪を封じて贈る。さうすると受けた者は必ず酒宴を設けて贈り主を招待する。もし氣がついて、その使者を執へると、送つた者が却つて御馳走するといふ遊戯である。

この習俗は今行はれるかどうか知らないが、李朝の初め頃にはまだ盛んに行はれてゐた。これも第四代の世宗の即位した年の十月二十六日に初雪があつた。當時王の父太宗は讓位はしたが、上王として軍事だけは一切親しく統轄してゐた。この上王がその兄に當る第二代の定宗（老上王と呼ばれてゐた）のところへ、藥が入つてゐるのであるといつて、新雪の包みを崔游といふ者に持たせて届けさせた。老上王はこれを知つて、人をやつて崔游を執へさせようとしたが間に合はないで、上王を招いて酒宴を催した。

老上王（定宗）は、溫厚敦實な兄であつた。上王（太宗）は、機敏辛辣な弟であつた。李朝建國の難事業を劃策成就し、治國の大方針を固めたのは、上王その人で、太祖及び老上王の帷幄に參し、朝廷に列して巧みにその功を遂げたその性格の閃きを、この一挿話の中にも見出せるのは愉快である。

忘れ得ぬ人

て深い印象としてその時から十年の今日迄、遂に忘れ得られぬ人として私にその當時を追想せしめて呉れる人に就てである。

ところが李朝も四代となつて世宗の頃になると王室の基礎は固ま

趣意を立てることも出來るし、用度も節約出來るわけになるといふ

その性格の閃きを、この一挿話の中にも見出せるのは愉快である。

京城雜筆

忘れ得ぬ人

高瀬通
（總督府殖産局）

昨日今日の知り人でなしに、五年十年の過去を振り返つて見て、そこに忘れ得ぬ人を見出すといふことはよしその記憶が悲しむべき事であつたとしても、過去の人を思出すと同時に其當時の自分を回想して見ると云ふことに限りない嬉しさがあるのではあるまいか。

雷師、恩人、知己、夫れ等の人々が絶えず私共に思出の人として過去を語らしめて吳れる。それは誰しもの事であり、人として又當然な事のやうにも思える。然し時とするとそう云ふ深い特別な關係を持つた人でないにも拘らず不思議に何時迄も忘れ得ぬ人として思出に殘る事がある。汽車で僅かの時間同席して僅かな物語りを聞いた丈けの老人とか、旅の宿に僅かな身のまわりを世話して吳れた女中の如何にもその人の生ひ立ちに事情あり氣な振舞とか、そう云ふ僅かな接觸ではあるが而し仲々に忘れ難い印象を受ける事がある。而し是等の人々もそう永くは忘れ得ぬ人ではなく二年三年と時は容易に忘れ去らしめてしまふやうである。勿論其の人の性格にもより其の境遇にも依つて異なる事ではあるが、人が全くの悲境時代に受けた恩誼は仲々に忘れ得られるものではない。

私は朝鮮に渡る以前東京で隨分悲慘な生活を暫く續けてゐた事があつた。それはこの京城雜筆社に稿を寄せらるゝ方々には想像などもされ得ない？やうな生活であつた。從て此の時代に關係を持つた人々の中には隨分と思出の深い人が多い。どう働いても月々學校に納めねばならない月謝だけ位はどうしても不足してゐた。それを毎月氣持ちよく出して吳れたその人御夫婦の溫顏。三疊の間で圓の約束で貸して吳れたのであつたが何時の頃からとはなしに家の者同樣に種々と世話をして吳れた老人二人。初めて役所の人となつた時に數字の書き方から敎へて吳れた親切な若い屬官。其の他忘れ得ぬ人として數へ得る人々は皆これ恩誼を蒙つた人であり、情愛を寄せて吳れた人々である。誠に、人が眞に忘れ得ぬ人として永く記憶に殘る人とは恩誼情愛の人であるかも知れない。如何に私が悲慘な生活を續けてゐたとは云へ、時に或は面白い事、嬉しかつた事、そう云ふ人生も皆無であつた筈は決してないのであらうが、而し今當時を回想して見てそこに忘れ得ぬ人を見出し得ないのが不思議である

然しながら私が茲に忘れ得ぬ人として語らうとすることは、右に話したやうな特殊な關係を、特に私に對して持つて吳れた人々でなしに、私に對しては極めて普通な態度でその人の氣持ちを普通に表現されたには違ひないやうな狀態であつたにも拘らず、私には極めて深い印象としてその時から十年の今日迄、遂に忘れ得られぬ人として私にその當時を追想せしめて吳れる人に就てである。

大正十年の正月であつたからもう十年になる。私が東京に出て、豫想し得なかつた生活が初まつて苦しみながらもそれと鬪つて僅かに勉强を續けてゐた頃であつた。神田の南甲賀町、震災前東京に住まはれた人々には記憶に殘るであらう神田の高台に、聳えたニコライ會堂、その下に下宿してゐた私は、當時まだ漸く鐵柱のみが組立てられたばかりの、東京驛前の丸の內ビルヂングの建築工事場に煉瓦洗ひの人足として働いてゐた當時のことである。あの建築はアメリカの建築會社フラアーの請負であつて、日本では最初の試みの八時間勞働の制を採つてゐた。その代り作業開始の時間などの嚴格であつたこと五分と遲れやうものなら、もうその日の賃銀はそれに相當する丈けの不勞額が差引かれて渡されると云ふ有樣であつた。そんな關係から私は、朝は宿を出て途中で朝食をすまして仕事場に行くことにしてゐた。當時東京市では漸く下層階級特に日傭勞働者達の爲に勞働宿泊所と、簡易食堂とが御自慢の社會施設として二ヶ所程開設せられてゐた。而もそれも最初は市の直營でなしに請負のやうであつた。その簡易食堂があの高架線の下昌平橋際に設けられてその日その日を送る私共日傭人夫のためには大きな福音として歡迎を受けてゐた。私もその食堂を利用して朝は十二錢の御飯に滿足してゐたのであつた。丁度正月の四日であつた、正月の三日間は仕事を休む事になつたので、その朝私

京城雜筆

は朝の食事をすます丈けの額しか殘らないと云ふ淋しさであつた。それでも十五錢を持つてゐたので朝出る時に國の妹に宛て手紙を出して食堂に行つた。手紙を出す時には十五錢あるから三錢切手を買うても尙朝食代の十二錢を殘すから（朝食は十二錢、晝晩は十五錢で其の他は一切賣らなかつた）朝食さへすませば夕方は貨銀を受取れるし夕食は學校の食堂ですますのであるから困る事はないと、豫算を立て切手を買うたのであつたそれで手紙を入れて昌平橋際の食堂に行つて食券を買はうとして、探せども探せども十一錢よりない之れは朝出る時に十五錢は誤算で十四錢であつたのだと氣付いて見たが後の祭り、致し方がなく、食券賣場に異樣な眼を光らしてゐる五十餘りの人相のよからぬ男に、『十一錢きりないがこれだけ食べさして呉れ』と尋ねて見た。所が『よし來た』と云つて毎朝のと同じ十二錢の食券を呉れた。私は流石に相濟まぬ氣持ちで一杯であつた。そして食堂を出る時に又賣場に廻つて『一錢は明日持つて來て返すよ』と言つたら『若いの仲々かたいな』と云つて只笑つて見せた。只夫れ丈けの交渉であつた。而し私はその時その男の示して呉れた氣持ち『よし來た』と短かく言つてジロリ私の顏を見たその眼歸る時に『若いの仲々固いな』と云つて笑つて見せたその顏、私はこの人の面影を今に忘れる事が出來ない。

最早十年になる。而し私は今に忘れ得ぬ人の一人として此の人の面影を偲ぶのである。不幸私はこの人の名も住所も聞く事を忘れてゐた。それのみではなく明朝當の通り十二錢の食券を買つて更らに昨日の不足分をと云つて一錢添へて出した時、之を受取つて呉れた人は昨日私に好意を寄せて呉れたその頑丈そうな人でなく、敎養のありさうな、而し、親しみの持てない青年であつた。

爾來十年の月日は流れた、私の身邊にも種々な境地が去來した、二年前東京を去つて朝鮮に來て僅に二人の小供を養ふに辛じて足りる丈けの生活を營むやうになつた越し方を振り返つて人の情を想ふ時、限りない恩誼の人に對して誠心からの感謝が湧く。同時に私は僅か一錢に就て交渉を持つたこの人に對して無限の親みを覺える。

一筆啓上

相羽恒次（大澤商會）

益々御隆盛御慶び申上げます。

さて貴誌正月號で私の前任眞木仙次郎氏に對し誠に御同情の籠つた記事を拜見いたしまして深く感謝して居ります。茲に厚く御禮を申上げます。只一節事實の違つた處がありますので甚だ失禮で御座いますが御訂正を願ひたいと存じます。それは

『今から二十餘年前大澤商會は經營的に一大苦難期に立つた、そして時の當主は殘し、幼主いまだいたいけな歲である、世間はもうアノ店もいけまいといつた』

といふ處で御座います。

大澤商會は現社長德太郎氏の嚴父善助氏の創設したもので順調に發展して來り、善助氏が京都電燈の社長となりてより德太郎氏が若冠の身を以て父君の業を繼ぎ、追々隆昌に赴き、大正八年に至り時勢に順應すべく功勞ある店員に株を與へて株式會社の組織に變更したので當主の死歿した者もなければ苦難期に遭遇した事も御座いません。善助氏は今より約四十年前資本金拾萬圓の京都電燈の社長となり漸次社運を隆昌に導き、三十餘年の間に資本金七千何百萬圓の大會社に仕上げ數年前に隱退して今は京都で閑靜な日月を樂んで居ります。現社長德太郎氏は京都商工會議所の會頭として毎日東奔西走、其令息の善夫氏は先年米國の大學を卒へて歸朝本社に在つて父君の輔佐をして居り此三代三夫婦とも健在で御座います。

尤も此間眞木氏の商會の爲に精勵盡瘁された事は勿論で、今回潛養の爲め平取締役となられても現職重役と同樣の待遇を受けて居られるので御座います。

尙私が今回後任として參りまして面目を一新するだらうと御督勵下さいましたが彼の精勤な敏腕な眞木氏の後を承けまして面目一新どころか舊態を維持することさへ危まれるので御座います。何卒大方各位の御同情御援助を仰ぎましてせめて現狀丈でも維持して行きたいと存じて居ります。幾重にも御指導を願ひ上げます。

藝術家の場合

僕が風呂から出ると、入替わりに佐伯が入浴。

僕は茶の間の長火鉢を圍んで、

藝術家の塲合

山田新一
（洋畫家）

1、虛榮の妻

東京の郊外がまだ今日のやうに開らけない頃であつた。

僕達もみんな若かつた、數名の親友が池袋に群居し、郊外の風光に樂しみひたり、省線電車で學校に通ひ、夜は夜毎にお互の畫室に相集つて、勝手な畫論に花を咲かせた。

今其大部分が、日本畫壇に重要な新進としての役割を勤めてゐるのも面白い。

そして其頃の畫學生の友情の中には、今日の世の中では見ることの出來ない、美しいロマンチシズムが流れ、虹のやうなボエームの精神が發露されてゐた。

初夏のうらゝかな日、池袋の野道を、肩を並らべて、勇ましく歩いてゐたのは、僕と里見勝藏である。

どこへ行くのか？何の爲めに歩いてゐるのか？

そんなことは問題でなかつた。

『只新緑の野道を歩いゐれば良いのだつた。そして二人の論談である。

『時に里見君、君はY子を知つてゐるね』

『うん知つてゐる』

『彼女をどんな女だと思ふ』

『先づ虛榮の權化!!』

『高慢!!』

『そして……』

里見は滔々として彼女の缺點を數え擧げた。僕は默つて聞いてゐるより仕方がなかつた、然し彼の言葉の途切れるのを待つて、是非言つて置かねばならないことを、附け足した。

『實はね……僕あの女と結婚することになつたんだがね……』

いきなり里見は、飛び上がつた下駄が眞二つに割れる程、跳び上がつた。そして頭を掻き乍ら、一目散に走りだした。

『やあ失敬!!失敬!!』と叫びつゝ……

僕は呆然として立ち盡くし、畑の中の野道を一散に、笑ひころげて走つて行く里見を忘れない。

今彼は、獨立美術協會の首領として新興美術に於ける一方の雄である。

又當年の『虛榮心の權化』は今三兒の母となつて、一枚の晴着さへ持たず、あかぎれだらけの手をして働らいてゐる

2、風呂から飛び出した佐伯

帝展出品一年一回の上京、三年振で佛蘭西から歸つた佐伯祐三の家に宿を賴んだ。

大正十五年秋のことである。

三年間、つもる話に昂奮する暇もなく、まあ〳〵と風呂に入れられた。

僕が風呂から出ると、入替わりに佐伯が入浴。

僕は茶の間の長火鉢を圍んで、佐伯夫人と相對した。

つきぬ思出もあり、無量の感もあつた。

やをら一封の紙包を取出して、僕は佐伯夫人に乞ふた。

『二週間も御世話にならなければならないんですから、ほんの志ばかりのものですが、お米代の足しにでもしていただけませんか……』と、

勿論、佐伯夫人が辭して受けないので、僕も困つた。

まあ、出來れば何とかして、收めて貰ひ度いし、どうしても駄目なら何か他に考へ直さなくてはと一寸押問答の態であつた處へ、

俄然、お風呂の中から、落雷のやうな叫び聲諸共、眞裸の吾が佐伯祐三が、座敷中をお湯の滴だらけにして飛び出して來た。

『ヤマダ!!』

『プサイクな眞似するんやつたら出て呉れ!!』

兎に角本人は血相變えて怒つてゐる。

僕よりも佐伯夫人がビックリして了つた。

其佐伯も昭和二年夏シベリヤ線で再渡歐の際は、數日を京城に下車し、家族連れで僕の平洞の舊居に泊まり、愚妻の大いに辭退する三越の切手を置いて行つた。

越えて昭和三年八月、巴里郊外ヴアンサンヌの森のほとり、病院の一室に、此天才畫家の生涯が閉ぢられる時、

彼の痩せ衰えた手が、僕の手をしつかり握つて、離さうともしな

そして時の當主は歿し、幼主いまだいたいけな歳である、世間

今は京都で閑靜な日月を樂んで居ります。現社長德太郎氏は京都商

たいと存じて居ります。幾重にも御指導を願ひ上げます。

京城雜筆

かつた。

不思議に厚い緣であつた。

叩きつけられるやうに熱烈な友情であつた。

3、男と男

巴里滯在二ヶ年の間に、何と云つても終生忘れられない事件は、親友佐分眞との絶交であつた。

原因は極く簡單であつた。

要するに仲が好すぎて、傍から中傷され誤解されたのである。

然し喧嘩は僕の敗であつた。

自重すればする程誤解され、佐分の爲めを思へば思ふ程中傷された。

四面楚歌の聲である

とう〳〵其儘僕は巴里を去つて故國へ歸らねばならなかつた。

一人の親友、然かも信じ合つた友を、つまらない中傷なんかで失ふことは、實につらいことである

此の時位、否今でもだが、深刻に自己を內省し、自らの缺點や不德を解剖して考へ拔いた事がない苦しい〳〵年月である。

一年經つた。

明けて去年の十二月十日

帝展も濟ませ、上野の松坂屋で開いた滯歐個人展の跡始末もやつと片附いて、二三日すればもう京城へ歸らうと云ふ夜、

神田神保町の夜店を歩いてゐると、

人混みの中から大きな聲を擧げて、突如と現はれ出でたのが其佐分であつた。

夢寐にも忘れない佐分であつた

『ヤア!!』彼は叫んで右手を出した。

『ヤア!!』僕の手が又彼の手をしつかり握り返した。

二人は感極わまつて抱きついて泣き度かつたと云ひ度いが、事實は唯もう泣けもしない程の眞實に迫られてゐた。

誰が調停したのでもない。

誰が妥協を申し込んだのでもない。

只

巴里の十字路で岐れて了つた友情が、

又東京の十字街頭にゆくりなくもめぐり合つたまでゝある。

明る日、二人はゆつくり落ち會つた。

佐分が言つた。

『ヤマダ苦しんだらうな』

『うん』

『俺も苦しんだ……』

（一九三一、一、一七）

【四六】

◈黃粉組の話

北漢山人

○貯銀頭取の森さんに、お餅を阿部川にして食べる時の、アノ黃粉の話をすると、いつに拘らず、森さんクスッと笑はれます。

○思ひ出すことがあるんです。覺えずクスッと笑はざるを得ないんです。

○それは、二十餘年の昔、森さんがマダ京大法科にゐた頃、學友數名と自炊生活をしてゐた。ところで、この連中揃ひも揃つて牛肉が好きだ。よッて、資金の潤澤な中は毎日〳〵牛肉を食べる。『オイ、お互に出世して、何とか三度〳〵牛肉を食へるやうな身分になりたいネ』『ウ、ソコだよ〳〵』

○だが、月の十日頃になると、組合銀行の資金は、もう五十錢銀貨一枚も殘らない。牛肉どころか百本漬けさへまゝならぬ。『さア困つた。オイどうするかネ』、その時誰が考へ出したものか、餅に使ふ黃粉を買つて來た。『何アんだ、黃粉ぢやないか。どうするんだ?』といふと、見て居れといふので、飯にブッかけて、ムシヤムシヤ食べる。一同『ナル程』とこれに倣ふ。

○以來資金拂底期が來ると『また黃粉かな……』と、口々にボヤキながら、『のう君、この物至つて廉なれども、兎角ノドにつかえて、まことに難澁いたすワイ』

○森さん斯ういふ思ひ出……

× ×

○たしか今、總督府にゐる伊藤泰造氏なども、高校以來森さんの學友で、矢張この『黃粉組』の一人だつたやうに聞いてゐる。

カフエ・テレビジヨン

と思ひの外急に怒つた顏をして、『わざ〳〵娘を朝鮮三界までやらうとするのはみんな金儲けのため

カフエ・テレビジヨン

小野富雄
（京城日日新聞社）

×

誰が何といつてもカフエはやはり女給が中心である。いゝ女給さへ揃つてゐればたとへそのカフエが東大門外へあつても繁昌すると請合だ。設備かどうの酒がこうのといつてみたところで、結局惚れた女にや敵はない。それに成る程と肯づかれることにはいゝ女給を揃へる位のカフエなら大抵は金持ちである（と見て差支へあるまい）設備や酒をそれ程までに悪くしやうはずがない（と考へて差支へあるまい）、丸ビル然り本町バー然りバロン然りである。最近菊水にいゝのを揃へたのは女將の腕の冴へと見てよからう。一時全盛を誇つた孔雀は經營者が代つてから女給の腰がフラ〳〵で前途頗る悲觀すべき狀態にある。ウインズルは禁じてあるはずの高聲蓄音器を屋上からやけに鳴らしてお向ひの白蝶に客を追ひ込んでしまひ、キリンは首長うして鳴かず蜚ばずヤナギは例によつてグロの全盛を極めてゐる。キング、山陽軒は東西の兩大關として夫々の特色を發揮し常連も亦多く、北の公會堂で花月支店は金持喧嘩せずで落着いた營業振を見せてゐる。モダン、ホワイトランチは中部の兩中堅として陣營固く、異端者アルプスを挾擊して勇敢なる軍隊的進出を試みてゐる。銀松亭、櫻バーは既に老境に入つて支那の如く銀水の料理はその出店である處の銀行集會所のそれより劣り、東の奬忠壇に陽春を待つよしのをたとへばカフエ界の大久保彦左に見立てるなどはおよそおつではありませんか。

×

その地位と境遇との悲哀から（この場合主觀的に悲哀と見るが至當であらう）矢鱈にカフエ遊びの出來ない壯老氏が何かの機會にカフエへ甕足を運ぶ時必ず『いまどこのカフエが面白いかね』と仰せられる。その意味はよく分つてゐる。つまり老人でもうんと優遇して呉れる別嬪女給のゐるカフエといふことだ。問題はこの別嬪女給だがこれが十人十色といふやつでまことに混沌としてゐるので甚だ以て困るといふわけである。いくら別嬪でもつんとすまし顏でろくすつぽお酌もせず話もせず、まるで追ひ歸されてゐるやうでもさつぱりだし、といつて梅毒醫で散々じやら付かれても余り愉快なものではない。

或るカフエの主人が內地に女給勸誘に行つて先づこれなら京城のナンバー・ワンだらうといふ掘出し物を得ていざ連れ歸らうといふ前夜、父親に會ふて前借を渡した末『京城といへば植民地でひどいところと思はれるかも知れないが事實は決してさうでなく娘さんの身上については一切御心配下さるな』と念を押すとその父親喜ぶかと思ひの外急に怒つた顏をして、『わざ〳〵娘を朝鮮三界までやらうとするのはみんな金儲けのためです。それだのに京城とはそんなケヂなところですか、では止めませう』とあつさり金を返し娘を連れ歸つてしまつたといふ實話がある。實際京城は內地から思つてゐるのと反對にとてもせゝこましくてうるさいところである。物は相談だ。こゝのところを何とかもつと寬大にのんびりと出來ないものだらうか、と考へたらおよそ皆さん悪いでせうか。

◈城大風聞記

北漢山人

○城大法文學部の高木先生——以前熊本の六高で教鞭を執つてゐられた。

○先生、有名な朝寢——從つて生徒間の評判はいゝ。若いものは皆眠むいですからネ。

○或る朝また寢坊をした。授業時間に三分しかない。『これアいかん——』謹嚴な先生だけに、大に驚いて、マトモの道なんざア歩いてゐられぬ。一目散に野菜畑の中を突き切つて、鞄片手に呼吸せき切つて、猪進せられる。

○それを、その邊の下宿の二階でうち眺めた學生連、『ヤー、先生が急がれる。遲いぞ〳〵』といふので、方々から顏も洗はず、エツサ〳〵とついて來る。

○先生は、急がれる。學生は、まツ黑になつて追ひすがる。

○その邊の百姓總立ちとなつて『モシ先生！助けて下さい！……。今年やカボチヤの眞ッ盛りです』

『ヤア!!』僕の手が又彼の手をしつかり握り返した。

夢遊の記

松橋喜代治
（京城府廳）

大阪朝日の元旦號に楚人冠氏は『すませざらんとする努力』といふ標題で人間には自分のしたくて堪まらぬことは成るべく早く完結させやうと努むる反面に、原稿料かせぎを唯一の目的とする下手な小說家のやうに、出來るだけ引き延ばして完結させまいと努むる氣持もあるものだ。といふ意味のことを、氏獨特の才筆に、盛り澤山の挿話を入れて面白くのべられてゐる。そして所詮人間はパラドクシカルな動物だといふ裁斷を下して終はれた。尙ほ末尾には、われらはなるべく長生してゆつくりとこの世を樂しまう、と正月らしく結んで居られる。

誰れやらは人生を、矛盾必然、と喝破した。人間が有つ大きな矛盾――それはいふまでもなく、古今東西の世相がよくこれを象徵してゐる。そして時代民心に流れてゐる矛盾性の大小强弱は、常に社會の風潮を强く支配して行くものゝやうに見える。もと〳〵この矛盾性なるものは、共同生活の基調を正しくしやうとして、賢い人達が創作し出した社會的規範、或は人類相互間の抑制、などから生み出された餘儀ない所產であらう。

パラドクシカルな氣持――矢張り根源は其の邊からのもの？などと考へても見る。然し楚人冠氏はその氣持を動物にまで延長して終つた。即ち、猫が鼠を捕へたとき決してむざとは食はない、さんざ之をおもちやにして弄び切つた揚句の果てに初めてパクリと食いかゝると。然しこれは味覺の極致を味はんが爲に、百パーセントの空腹感を助成せんとする、彼れの前提行爲に過ぎないんであると猫から聞いて來たやうな見方も成り立たぬことはないやうだ。

それはそれとして、野生の虎や獅子などでも、よき獲物を捕へたときには、猫のと同じやうな動作をしさうではある。して見れば是等の動物などと同じやうに、これは人間が有つ大きな本能の一つでもあらう。

本能に似て非なるものに、癖といふものがある、文字の由來は知らないが、癖の中に入つてる所を見ると、これは一種の病氣と見たものであらう。また無くて七癖などといはれてる所を見ると、人はかなり多くの癖を有つてゐるものらしい。が然しこれを大別して、肉体的のと精神的のとに分けて見ることが出來る。また精神的のを更に個人的の癖、民族的の癖、などにも分類されぬこともない。何れにもあれ、その肉體的のは、人さま〴〵の形に於て表はれるので愛嬌があつたりして面白いのが多い。

ところが精神的のになるとざうばかりも行かないやうだ。そしてそれが人間の本能の表現か、先天【四八】的個性の表はれか、悪い習慣からか、それとも單なる癖といふものであるのか、なか〳〵見分けのつかない場合もある。

政治、行政或は處世の道などにも、人間が有つ斯ふした色々の本能やら癖やらをば、巧みに攝んで行こうとする方法もあるらしい。」その事の可否善悪は暫らく措いて巷間に所謂外交家、政治家、社交家などとは、斯ふした方面から、色々と人情の機微に徹して行くものであらう。そしてこれを、術、又は策、などと稱へ、或は術策、術數、策謀、策略、策應、小策、奸策などと使ひわけられる。其の他妙策、大策、名策、拙策、秘策劣策、愚策などと數へ來れば際限もない。

權謀術數、策謀圖に衝り、奇策縱橫などは良い意味にも、悪い意味にも用ゐられ、金策成らず對策悉く、などは實に窮策を通り越してるし、政策不振術數空し、などと來れば天下の大問題にもなる。然り而して策士策に溺る、などに至つては全く滑稽なる悲慘でもある。

また無策の策、などと霞を吸つて雲を攝むやうな感じのするのもあるらしい。此の文書き去り記るし來つて愈雲霞の如く、淸風一度至れば昊天ただ靑空あるのみ。即ち題して夢遊の記と爲す所以。

峰岸淸之氏主宰
拓務評論
一部定價五十錢

前車の覆轍

を命じた。歸途も類似の困難と鬪ひつゝ、漸く東京に辿り著いたのは九時を大分過ぎて居つた。

と考へても見る。然し楚人冠氏はその氣持を動物にまで延長して終つた。即ち、猫が鼠を捕へたときところが精神的のになるとさうばかりも行かないやうだ。そしてそれが人間の本能の表現か、先天

一部定價五十錢

京城雜筆

前車の覆轍

張間源四郎（中樞院）

昨秋本院參議一行を東道して、內地視察に行つた時の事である。東京滯在四日の內、最後の一日を以て日光往復に充て、時恰も酣なる紅葉を賞美しやうと云ふ計畫を立てた。勿論初めは汽車で行く積りであつたが、その後電車で行つた方が便利だと聞き、時間割まできめたところ、前日に至り自動車がよろしいと親切且つ熱心に敎へて呉れたものがあつた。そのわけは汽車で行くにしても、電車で行くにしても、先づ驛迄は自動車を要する。又日光驛に下車して、東照宮迄は、電車か自働車に乘り換へだ。其處から中禪寺迄は、又自働車を雇はねばならぬ。歸りにも亦同樣の面倒がある。その乘換へや待ち合せに、無用の時間を要するのみならず、費用に於ても却て高くつくのである。如かず始めより自働車を借り切りとし、終日利用せんにはと。成る程計算して見ると、時間に於ても經費に於てもその方が遙かに有利の樣である。まあ經費は別として、スピード時代である。我等朝鮮在住者と雖も豈時代の尖端に後れて可ならむやと云つたか否かは保障の限りでないが、兎も角衆議一決し、斷然自働車で出驅ける事とした。蓋し禍根の此處に伏在して居た事に氣付かざりしこそ目出度かりけれか。

明れば十一月三日明治節の日である。夜來の雨が上つて、時々日影さへ見る事が出來た。惠まれたる哉と、喜び勇んで進備を整へ、一行十人、二臺の自働車に分乘して朝八時ホテルを出發した。市中は勿論、郊外も南北千住邊を飛ばして居る間は、追にスピード百パーセントで、頗る景氣がよかつた草加町を過ぎて、埼玉縣に入るや次第に道が惡く、自働車の速力も減退し出した。稍心細くなつて來たのである。小山町を過ぎてからは、道は益々惡く、鹿沼町近くに至り、自働車は泥濘に入り、動かなくなつて仕舞つた。全くがつかりじた。一同止むなく下車し、徒歩で鹿沼に行つた。日光著は遲くも正午と豫定してあつたのに、此處ではや零時を過ぎる三十分である。仕方なしに田舍宿で晝食を攝り、泥濘脫出の自働車を待ち受けたが、漸く二時に自働車が來たので、直に出立、有名なる日光の杉並木街道五里程を馳驅した。重荷に小付けとも云はうか、その間に一臺の方がパンクなどした爲めに東照宮に著いたのは、午後三時過ぎであつた。總てはもう駄目である。社務所よりの案內者に導かれ憂鬱なる氣分で、堂塔社殿を拜觀して居る間に四時半になつて仕舞つた。やけか眞面目か知らぬが、是れから中禪寺まで登らうと云ひ出した者もあつた。今更そんな問題に取り合つて居つては大變である。運轉手を叱咤して、即時退却を命じた。歸途も類似の困難と鬪ひつゝ、漸く東京に辿り著いたのは九時を大分過ぎて居つた。

此の日午後六時には東京に著いて、直に本所區の相愛會施設を視察する約束をしてあつたので、その儘相愛會本部に車を廻したが、何せ無暗に約束時間を過ぎて居るので、顏の惡いこと夥しい。施設視察どころではなく、挨拶もそこ〳〵にして引上げ、ホテルに著いたのは十時半。食堂もはや閉鎖して、夕食をとる事が出來ない。泣き面に蜂とでも云はうか、往復百里のスピード旅行で、疲れ切つて居る体を運んで、今度は食堂探しに出掛けねばならぬのである。時刻が遲いので、大方閉鎖してあつたが、漸くまだ開店中の一レストーランを探し當て、ヤレ〳〵と腰を下すや、一同始めて沈默を破り本日の失敗談に花を咲かせ、やけ的乾杯を擧げて、ホテルに引き上げたのが午後十二時近くであつた思へば馬鹿々々しいナンセンスではある。

只自働車旅行の御蔭で、一行は內地の田舍、殊に關東平野の農村狀況を、よく視る事が出來たのは豫期せざりし收穫であつた。時恰も秋收期であつたので、黃金色の稻の實り、野菜、甘藷、果實等朝鮮に見られぬよき出來ばい、老幼婦女に至る迄、終日營々として畊に働く樣、靑年團の共同作業による桑園の手入、道路の普請等、それ等は悉く參議諸氏の殊の外よき見學資料でなければならぬ。

而し此處で敗け惜みを云ふ考は毛頭ない。昔一頭の驢に親子二人が乘つて仕末が付かず、遂に驢を河中に投じたと云ふ訓話を、小供の時に聞かされた事があるが、餘

雪

磯部桃果（養正高普）

北山に灰雲垂れぬこの夕べけだしや雪とならんとすらん

夜を寒み雪や降りけん白銀の屏風立てたり北の山並み

硝子戸のすきま〳〵にしのび入る吹雪目に寒き睦月なるかも

一たばの賀狀投げ入れざ〳〵と雪踏み去りしあとは寂しも

牡丹雪明り障子にかそかなる衣ずれめきて降る夕べかも

丸窓の寒山竹にさら〳〵と雪降る日なり一人碁を打つ

朝陽さす雪の軒端に京城の黒き雀が二羽ふくれをり

雀一羽つと軒端より飛び下りぬ萬兩紅き雪の小庭に

南大門瓦の上の動物の肩寒む〳〵と雪散りにけり

日を並めて大雪ふれり京城の毛帽ことゞ〳〵賣れにけんかも

石炭のかます車の八十車ひきつゞきけり雪の長路に

京の繪師春擧が筆の力もて池に臨める雪の松が枝

月溪が門をたゝけば春星がおゝと呼ぶなり雪白き朝

今日も亦口まぎかねつ亂れ髪雪に亂して歸りくる人

大きなる雪の達磨を造りけり就職難のありのすさびに

この雪の鹽にありせば馬の脊につみて賣らましを

雪は寒しも（以上三首不景氣を詠ず）

京城筆

り人の話許り喰つて、自己に固き信念なきときは、往々にして斯る失敗を招くものである、固より誌友諸賢には、名所を訪ぬべく田舍路百里をドライブして見樣など云ふ、スピード眩惑者もないとは思ふが、兎角物識顔の美言には、嵌り勝ちなものであるから、前車の覆轍にもと思ひ、敢て此の失敗談を掲げた次第である。翌日長野に向ふべく、午前七時に上野驛を立つた時には、一同睡い目をこすり〳〵して居た事は、想像に難くないでせう。

◈畫壇風聞記

なにかし

○京城での閨秀洋畫家として、將來を期待せられてゐる松崎喜美子（廿二歳）さん、近々東京の女子美術を卒業すると同時に、佛蘭西へ行くことになつた。

○お父うさんは、府廳につとめてゐる。そのお父うさんの話に依ると、今東京へ遊學してゐても、一ヶ月百圓はかゝるのである。然るに佛蘭西へ行くと、あつちは、物價の安い關係で、毎月七八十圓もあれば十分なのである。それ故若い娘の一人旅、聊か心配ではあるが、思ひ切つて、一ッ洋行させることにしたと。

○尙ほ松崎さんは、その半白の頭へ、片手をあてがひ乍ら、『あつちは、とても諸式が廉くて、ホントウに暮らしいゝさうですよ。私も一ッ佛蘭西の府廳へ雇つてもらひたいものです』

すべて蕃人は今日では義務教育で滿六才になりますと普公學校又は蕃人教育所に入學して初等教育

霧社の回想

つちは、とても詩式が厭くて、ホントウに暮らしいゝさうですよ。私も一ッ佛蘭西の府廳へ雇つてもらひたいものです』

雪は寒しも（以上三首不景氣を詠ず）

霧社の回想

辻　董重
（京城女子實業）

石塚總督も霧社暴動の責を負ふて辭職しました、此の大暴動の廿日前十月四日といふに私共一行廿七名は嘉義、二水、外車隘、日月潭、埔里、眉溪を經て霧社を訪れました。外車隘からは數時間の間台車に乘り眉溪――所謂人止の關――附近から霧社迄一里十八町、臺灣の東西南北の眞只中より稍々東に片寄つた地點、臺灣山脈の中央で此の一里十八町の道は全く人止の關の名に背かず、兩岸そゝり立つ大斷崖のゴルジに道を穿つたもので一夫關に當れば萬夫も開くなしの要害堅固の地であります。領臺當時日本軍の一個小隊が此の谷底を通過中兩斷崖上に待ち構へた生蕃人の爲めに岩石を投げつけられ全滅の悲運を招いた地であります。此度の暴動に於ても霧社の蕃人達が眉溪へ〳〵と叫んで馳せ參じたと申しますのは此の關所で喰ひ止めれば內地人は袋の中の鼠同樣です。其他に脫出する途は全くありません。能高郡守も此の關附近の鐵線橋で無殘な慘死を遂げられたとの事です。

雨上りの十月三日に私共一行は此狹い道を進みましたが一歩誤れば千仞の溪谷に墜落して全く命の助かりつこはない樣な小逕でありますが兩岸の景色は何とも譬へ樣のない美はしいもので御座います

午後三時頃一行は離れ〳〵になつて霧社に着きましたが、此時霧社分室主任佐塚氏、霧社公學校長小學校長及び小學校四十餘名の職員生徒の出迎を受けました。其日土曜日であつたにも拘らず公學校長は蕃童二百名を止めて私共の爲めに小學藝會や遊戯を觀せて呉れました。小學校では全生徒の成績品や霧社より尙五里も十里も山奥に勤務する警官の子弟十九名を集め女先生がお母さん替りとなつて撫育して居るといふ小寄宿舍生の一團にも會ひました。夜は私共の宿泊した櫻屋旅館の前で、バーラン社の十六七才から廿三四才迄の蕃婦十六名の蕃人踊りも觀ました彼等は男女を通じて踊と酒とは欠ぐことの出來ぬ娯樂と嗜好品であります。團員一同から臺灣酒一斗計りを寄贈いたしました。娘達は其の酒を町の中に据え十六人が手を連ね腰を屈めて酋長の娘の音頭に合はせて一歩進み半歩退き鈴の樣な大聲張り上げてお腰のあたりのクル〳〵と動く奇妙な單調な踊を一時間計り觀覽いたしました。踊り歌ひ疲れると酒を茶腕に掬つてガブ〳〵と美人連が飲みます。一つの茶腕に二人口をあて互ひに抱擁して飲むのが最も親愛の情を表はすものださうです。

私共團員の者數名も其れに加はつて踊りました。私の側に居た踊り子は頻りに內地語で『あの人は上手』『あの人は下手』などゝ批評してゐました。

すべて蕃人は今日では義務教育で滿六才になりますと皆公學校又は蕃童教育所に入學して初等教育を受くる義務がありますので二十才以下の娘さん達は日本語が可なり出來ます。

此の度の暴動に壯烈な戰死を遂げました佐塚分室主任の奥さんは白狗蕃社の土目（酋長）の娘で其の間には四人のお子さへありました。奥さんは此時の踊りにも日本服を着けて觀に來られました。又四番目の末の男のお子さんも佐塚さんが連れて私共の宿を訪れ一時間半も色々蕃社のお話をして呉れました。

斯る有樣で霧社は全く平和な仙境と計り思つて居ました。而も其霧社公學校が此度の暴動の發端地といふことが如何にして考へられませうか。公學校長も分室主任も一生を蕃化事業に捧げ此の仙域に骨を埋むる覺悟と申して居りましたが果敢なくも斯る慘死に終らうとは夢想だに出來なかつたことで御座います。

只私共の觀た此のバーラン社丈けは霧社十二蕃社中でも幸に此度の暴動に加盟せず、寧ろ內地人を庇護したといふことを知りまして幾分胸の休まるのを覺えました。何樣霧社は臺灣の中央四千尺の高地で其の南に能高山、北に合歡山といふ富士山程の高山が聳えて居る兩高山の裾合地になつて居ります。此の要害の地に全臺灣十四萬人の生蕃中最兇暴と稱せらるゝタ

家庭教師
雇はれたし通ひでも泊り込みでもよし（姓名在社）

京城雜筆

イヤル族が十二蕃社を結んで約三千餘人棲息せること、て其の理蕃と又此度の樣な暴動に際し討伐の容易でないことを想像するに難くありません。此の蕃地を親しく視察したものでなくては其の征討理蕃の容易でないことを想像することも出來ません。

彼等蕃人は祖先傳來首を取ることを最高の道德と考へてゐます。山路を走ることが却て平地を行くより樂で平地は非常に歩き憎いと申してゐます。蕃社には土目と稱する頭が居りまして其の命令は絶對的で土目が播種しなければ部下の者は時季が過ぎても種時きも出來ない有樣です。此度の暴動でも新聞によく見えましたマヘボ社のモーナルダオと稱する土目は十二蕃社中でも最も勢力のあつた土目なのです。

斯る習慣と斯る結束とを持ち且つ此の地形を利用して殺到した數千の蕃人に十重廿重に圍まれた三百人足らずの內地人が公學校の運動場で一擧に蕃人の兇刄にさいなまれました。蕃人に追ひ廻されお父さんお母さんと泣き叫ぶ聲を直前に便所の下に隱れて悲痛な叫びを聽きつゝ悲憤の涙にくれた方達の氣持ちは如何であつたでせう。あの獰猛な眼光、物凄い蕃刀を想像した丈けでも眞に身の毛のよだつ感がいたします。

而も斯る慘劇が私共の去つて後廿日にして行はれました。只々夢の樣な思がいたしますと共に親しく私共を迎へ御案內して下さつた方の大部分、殊にあの寄宿舍の十九名のいたいけない學童の大部分が此の毒刄に斃れた事を考へましては切齒悲憤の涙にくれずには居られません。

私共一行の持ち歸りました幾多の寫眞は恐らく平和なる霧社の最後のもので御座いませう。又私の持ち歸りました小學校、公學校の幾多の成績品は此等の犧牲者或は獰猛蕃人子弟の遺品であります。永く保存して記念といたし御氣の毒な百數十の犧牲者に對し遙かに追悼の敬意を表します（昭和五年十二月稿）

雪

古田廉三郎（朝鮮銀行）

今年は元旦から雪景色であつた。寒さを度外視した雪景色は甚だ心地よいものである。平日は別に興味を喚起しない朝鮮の禿山も純白の雪に蔽はれゐて其處に一種の美しさを見せる。殊に南山の綠が白く包まれたのは其の美筆紙の及ぶ處でない。

何んとなく寂寥の感のある植民地にとつて雪は一種の和やかさを以て我々の胸に迫る。オンドルで靜に雪を眺めつゝ酒盃を含むのも又格別の雅趣に富んで居るではないか。

地上の萬物が枯死し、無味乾燥な境地を示す冬に、この情致に富んだ雪のある事は確にオアシズに似た喜びである。

古來雪に關する歷史上の思出は相當に多い。源家を再興して平家の驕りの夢を破つた賴朝の可憐な手をとり義經を懷に女丈夫常盤が落人になつた時は雪の卍巴に降りしきる時であつた。

謠曲鉢の木で有名な北條氏第一の俊傑時賴が佐野の里に、梅松櫻の饗應の焰の中に昔日に變らぬ忠節の臣を見出したのも雪に埋れた夜であつた。降つて德川の元錄時代、一世を風靡した華奢軟弱の氣風の中にあつて苦節よく堪へ、烈士四十七人を從へ吉良の邸前に山鹿流の陣太鼓を響かせつゝ主仇を報じ泰平の世尙士氣の衰へざるを示したのも師走の風寒くして江戸市中を銀色に彩つた雪の夜ではあつた。それを考へこれを思ふ時ヒラ〳〵舞ひ降る無心の白毫にも思はず興味をそゝられるのである。

赤ちやんの言葉

することを敎へましたのでしつかり覺えた譯ではありませんが、時々『ハイ』とも『アイ』ともつか

赤ちやんの言葉

天野雪江
（府内三阪通り）

長男の發育についての記錄の中から、言葉に關する處だけを抽き出して書いて見ようと思ひます。泣聲と違つた聲を出し始めましたのは、生後三ヶ月頃で、それは大抵機嫌のよい時で、小さな赤ちやんに似合はない大きな聲で『アーアーアー』と云ふ樣な聲を出して居りました。斯ういふのは、言葉とはいへないかもしれませんが、何か自分の心持ちを聲に現はしてゐるのでせうから、言葉の始まりの樣なものでせう。

七ヶ月頃には舌を上顎につけて離すことによつて出て來る。『タツタツ』と云ふやうな音聲を出し始めました。それから間もなく、『タヅタツ』の他に『ブーブー』と言ふ樣な聲を出しました。その中に、よく『お話がお上手ですこと』といつて子供をあやしますその所謂お話が大變上手になりまして、面白そうに獨りでお話をする樣になりました。

九ヶ月頃には何か持つて居ります物を投げました時、私が『アーア』と申すのを聞き覺えまして何か投げますとすぐ私の顏を見まして『アツア、アツア』と申す樣になりました。大人の聲を眞似たのは之が始めての樣です。これは投げる動作と『アツア』といふ言葉とが一緒に記憶されたものでせうそれから間もなく何か見附けますと、それを手に持ちまして『アツタアツタ』と申しました。之は何か見附けたと云ふことよりも手に持つことを『アツタアツタ』と云つてゐる樣に思はれました。それは必ず見附けた物を手に取つてから『アツタアツタ』と言ふからです。

十ヶ月頃には外へ出ました時自動車のブーブーと云ふ音を覺えまして、おもちやの自動車を押して這ひ〳〵しましては『ブーブー』と申して居りました。次には、私に抱かれて居ります時、よく私の顏をたゝきますので其の度に私が『イタイ』と申しますと、打つ動作と結びつけて『イタイイタイ』と云ふ言葉を覺えまして、人をたたきましては『イタイイタイ』と申して居りました。ですから『イタイ』と云ふのは『痛い』といふことではないので打つ動作をすると譯もなく『イタイイタイ』と云ふらしく思はれます。その頃からをんぶします事を、『オンモオンモ』と申しまして、お樣側に誰か腰を掛けて居りますと背中につかまつて『オンモオンモ』と申しましたり、帶を見附けますと『オンモオンモ』と云つて持つて來たりいたしました。之も背中に帶でおぶはれる時に大人が云ふ言葉をその時の動作と結びつけて覺えたものでせう。

お誕生後一ヶ月頃弘ちやんと名前を呼びましては『ハイ』と返事することを敎へましたのでしつかり覺えた譯ではありませんが、時々『ハイ』とも『アイ』ともつかぬ返事をする樣になりました。之が言葉と言葉とを結びつけて覺えた始まりですが、大變難かしい樣に思はれました。その頃から私が鷄に餌をやります時、『トウトウトウ』と呼びますのを聞きまして緣側の硝子戸をあけましては餌をやる樣な恰好をして『トウトウトウ』と申しましたり、獨りで庭へ下りまして鷄舍の前に行き、金網の所から小石等を入れて『トウトウトウ』と云ひましたり、煖爐の金網の所へ石炭屑等を入れまして丁度餌をやる時のやうな恰好をしまして『トウトウトウ』と申しましたり、ビスケットやカステーラ等を與へますと、すぐ『トウトウトウ』と申しまして鷄舍の方に行かうとしましたりいたしました。この『トウトウ』と云ふのは鷄とか、餌をやるとか云ふことと直接結びついてゐるのではなく、餌をやる樣な恰好や動作をすると自然に『トウトウ』といふ言葉が出て來るのではないかと思はれます。おぜんの上の御はんつぶ等ひろつて居りますとすぐにトウトウトウと申します。

お誕生後二ヶ月頃からパパが朝お出かけの時『ハイチヤ』と敎へましたところが戸を開けて外へ出ることを『ハイチヤ』と覺えましたものと見えて人が外へ出ようとしますとすぐ『ハイチヤ』と申しまして、自分がちよつとお部屋から出ましても、『ハイチヤハイチヤ』と申しました。それから『シツケイ』を敎へますと言葉はいへませんが動作だけはすぐ覺へまして、『ハイチヤ』といつしよにし

京城雜筆

まして、自分で押入れの中に入つていつけいをしましたり、私が外出しようとして仕度をして居りますと『ハイチヤハイチヤ』と云ひながらしつけいをして居りました

それから間もなくたびをはかせます時に『アンヨ』を出して教へますと、『アンヨ』はと申しますとすぐ足を出し乍ら『アンヨアンヨ』と申します。これは足をアンヨと云ふのではないらしく足を出す動作と『アンヨ』とを一緒に覺えてゐる樣に思はれました。それからだびをはかせながら『タアタア』と教へますと、たびをはかせようとしますとすぐ『タアタアタア』と申して居りました。これもアンヨと同じ樣にたびが『タアタア』ではなくはい動作を『タアタア』と云つてゐる樣に思はれました。しかし聞もなく動作と引離してたびだけを『タアタア』と云ふ樣になりました。

次に父の事をパパ母をママと教へましたので唐紙や障子の外にたちましては『パパ』『ママ』と呼びましたり、玄關に音がしますとすぐ『パパ』といつて出て行つたりする樣になりました。けれども『ママ』よりパパの方が覺え易いらしく、また始めの中は人を見れば誰でもパパと呼び本當の『パパ』でも女の人でも區別なしにただ人を呼ぶのにパパと云つてゐる樣でした。それから外へ出まして犬を見附けますと『ワンワン』と云ひながらどんどん走つて行きましたり、馬を見ると『ウマウマ』と云つたりする樣になりました。此の頃から始めて物と言葉とが結び附く樣になるものと思はれます。

生後三ヶ月頃には蓄音器にあわせまして聲を出して歌ひましたり、三味線の絲を引張つて長吹式の聲を出したりいたしました。『アンヨ』ははつきりおぼへましたので御手手を教へますと、右手の人差指で左手をさしまして『テテテテ』と申す樣になりました。それから誰も教へませんのに鷄金から玉子をとつてまゐりますと何時の間に聞き覺えましたのか、『ウンダ、ウンダ』と申しましたり、私が『タマタマは』と聞きますと『ウンダウンダ』と申しまして鷄金の方に行かうとします。

近頃は鏡を見まして、『バアーバアー』と申しましたり、カーテンのかげにかくれて『イナイイナイバアー』を上手に言つたりしたりする樣になりました。また何事か大人にまねの出來ない樣な事を獨りで樂しげに申して居ります。二月の十日で丁度一年と五ヶ月になります。

◇聞くがまゝ

むらさき

○鮮銀の向井忠氏と、洋畫家の山田新一氏とは、將棋道の好敵手であります。

○曩き頃向井氏、地方支店を視察してもどつて、『どうだい山田さん、木浦で誰々をやつつけ、全州で彼々をブチのめし、實に愉快だつた。近頃僕の技量もメキ〳〵上達したらしい』

○と聞いては、山田氏默つて居られず、『イヤそんな話なら、一番ワタシを破つてからユル〳〵承ら』

○ウン、よし、さア來給へ』、向井氏盤を突きつけたのはいゝがそもいかなる惡日にや……何局やつてもコロリ〳〵。

○山田氏曰く、『それ見なさい木浦や全州のことは、どうも本店課長の御威風らしい。これア向井さん、御要心肝要ですぜ』に、『イヤ、どうも口の惡い繪書きぢやネー』

× ×

○チリン〳〵……モシ〳〵、東大門署ですか?、こちらは東大門外の○○ですが、只今强盜に襲はれましたら早く來て下さい』

○時は去る一月十六日、而も午前二時頃。

○妙に落ち付いた、そして底力のある震へ聲が、宿直室の電話をガン〳〵鳴らした。

○スハ!大變古賀署長を始めとして署員の非常召集、急げや急げとほど遠からぬ現場へ、調べて見るとナル程强盜でも入つたらしい形跡。油斷ならじと署長の指揮に署員は血眼になつて證據調べ、けれど如何にも巧妙な强盜と見へて徒らに時間ばかり過ぎて仲々證據が擧らない。ハテ不思議な!と古賀署長一方被害者を調べると何處か話が腑に落ちぬ所がある。此奴とばかりギウ〳〵絞り上げると果してニセ强盜。眞夜中の眠い盛りにたゝき起され、此の寒空に曝されて調べ上ぐればニセ强盜!、いやもう一同腹が立つやら、うらめしいやら、でもニセ强盜で一安心!もうこれからは寢られないと署に引上ぐれば東の空はほんのり白みかゝる。

○『さても〳〵巡査はつらいものかな』と古賀署長、明け行く空をうち眺めての御述懷!

隔てなき心もとけてかたらふはいとも樂しきまとゐなりけり

○ 中島 貞信

陰く樣になるものと思はれます。

生後三ヶ月頃には薔薇器にあわせまして聲を出して歌ひました

×

○チリン〳〵……モシ〳〵、東大門署ですか？、こちらは東大門

×

○『さても〳〵巡査はつらいものかな』と古賀署長、明け行く空をうち眺めての御述懷！

やまと歌

國風會京城支部

池水鳥

○　今村　雲嶺

尾羽ぬらす時雨のあめやいとふらむ池の小島につどふ水鳥

○　松寺　竹雄

うす氷はれとも池は靜かにて鴛鴦の番の夢まどかなり

○　清水　正德

夜を寒み池水さこそ氷りけめ浮寢のをしの衾いかにや

○　古田萬龜子

うす氷朝日にとけて池の面にをし睦しく浮び出にけり

○　安東貞一郎

池水にむれゐて遊ふ水鳥の羽風なければは波もたたしな

○　中島　貞信

ぬしすむといひつたへたる古池に友なし鴉のなく音さひしも

○　安東都天子

池の面に朝日さすまてをし鳥のうき寢樂しく夢むすふらん

○　田中半次郎

松か枝にふり積む雪の池の面にしつれて鴛鴦の夢さますらん

○　濱野鍾太郎

池の面の波をまくらに浮寢する鴨はいかなる夢むすふらん

○　足立丈次郎

霜枯のあしまにむすふうすら氷をわけて餌あさる池の水鳥

○　淺井佐一郎

思ふ事ありとも見えず池水にうかへる鳥の心地よけなる

○　工藤　武城

ゆくもくもあとを殘さず池の面にこころのとかに遊ふ水鳥

○　同　人

世のなかのうきてふ事もしらぬけにむれつつ遊ふ池の水鳥

團欒

○　工藤　武城

同し窓に机ならへし友たちとまとゐする日そ樂しかりける

○　淺井佐一郎

ことさらに樂しかりけりはらからか打つとひつつ語るよころは

○　足立丈次郎

子も孫も打ちつとひつつ賑はしく夕けすること樂しかりけれ

○　濱野鍾太郎

うちとけて大和の民も高麗人も一つやかたに團欒するかな

○　仝　人

旅路よりわか家に歸り妻子等とおなし夕餉に語るたのしさ

○　田中半次郎

家つとをよろこふ子らとまとゐしてたびのつかれもわすれけるかな

○　安東都天子

隔てなき心もとけてかたらふはいとも樂しきまとゐなりけり

○　中島　貞信

かなし子か敎への場に學ひ得し歌きく家のまとひたのしも

○　古田萬龜子

へたてなき友打つとひ過し日の昔かたりに夜をふかしけり

○　清水　正德

師の君を迎へまつりて學ひやの昔を偲ふまとゐ樂しな

○　松寺　竹雄

へたてなきうからやからのまとゐしてかたり合ふ夜そ樂しかりける

年市

○　松寺　竹雄

大御代や風も靜けくとしくれていち場に春のいろのたゝよふ

○　清水　正德

變る世にかはらぬとしの市みれはおもひぞ出つる總角のころ

○　古田萬龜子

うる人もはた買ふ人もくちくちにのしりさわくとしの市かな

○　安東貞一郎

新らしき年さへちかくなりぬれはゆつり葉なとを買ひ集めけり

○　中島　貞信

豐なる世のさまとしもおほえぬをいち路賑ふとしのくれかな

○　仝　人

われもまたしつこころなくおほえけり市人きほふとしのくれには

○　安東都天子

このとしも殘りすくなになりぬとて都の市のにきはしきかな

○　田中半次郎

暮れせまる都のちまたここかしこひとのむれたつとしの市かな

○　濱野鍾太郎

あたらしき年もせまりて　人の都につとふとしの市かな

京城雜筆

○　淺井佐一郎

いつしかと今年もくれて歳の市賣り買ふ人のいそかしきかな

○　足立丈次郎

今もなほくま手羽子板年かさりあきなふ市の賑はしきかな

社頭雪

○　田中半次郎

かつを木も千木にも雪のふりつみてあふく宮居そたふとかりける

○　松寺　竹雄

空はれて風靜かなる神垣にちり一つなし雪のあけほの

○　濱野鍾太郎

清けくも積れる雪の宮居をはいや尊くも仰く今日かな

○　中島　貞信

ふしをかむおのかこころも清まりぬ雪うつくしき神の廣前

○　淺井佐一郎

神垣の内外に積る白雪は秋のみのりのしるしなるらん

○　足立丈次郎

あとつけてすすむもかしこ朝ほらけみゆきかかやく神の廣前

○　清水　正德

去年のことことしも稔るしるしとや神の忌垣につもるしら雪

○　安東都天子

神路山千とせを經ぬるときは木もいろ白妙に雪そつもれる

○　工藤　武城

よのけかれすへて清めてみやしろはゆきのあしたそわきてたふとき

○　古田萬龜子

ふりつもる雪ふみわけて國民か初詣する代々幣の宮

○　安東貞一郎

これもまた御代のゆたけきしるしとや神の御垣に雪のつもれる

○　今村　雲嶺

ささけもつ玉くしのうへにちらちらと雪ふりかかる高麗の大宮

天文の話

神田　茂

唯今世界一般に用ひられてゐる暦法では年の初即ち一月一日には別段に天文學的の意義がないけれども、一月上旬は太陽と地球との遠さの一番近い時、七月上旬は一番遠い時に相當して居ります。本年は一月三日が一番近く、七月六日が一番遠い時であります。冬の寒い頃太陽が近く、夏の暑い頃太陽が遠い事は一寸おかしく思はれますが、それは冬は太陽が地平線上にあつて地上を照してゐる時間が短いから寒いので、夏は太陽が地平線上にある時が長く、眞上から直射するから暑いのであります

本年の日蝕は全世界で三度ありますが何れも部分蝕で、日本から見えるのは四月十八日の日蝕だけでこれも朝鮮と樺太の一部分とで見えるにすぎません。蝕分は京城では七厘です。

月蝕は二度あつて最初のは四月三日の曉で最初から皆既になるまでは見られますが、東京では午前五時三十分に皆既のまゝで月が入ります。次のは九月二十七日の曉で、この月蝕も始めから皆既が終つて光を僅かに生ずる頃まで見えます。

本年の天文現象で一番注意されるのはエロスといふ小惑星が一月下旬に地球に近づく事です。

◈大村琴花氏

三木一彦

○會議所の書記長大村友之丞氏は、この二月を以て現職を退き。豫ての志の通り、鄕里出雲國松江市に隱栖することになつた。まことにお名殘り惜いことである。

○氏は、大阪朝日記者を振出しに、十餘年前現職に就き、人の最も難しとする職掌を無事につとめ上げた。これだけでも、常人にはなか〳〵思ひ及ばぬことである。

○多年禪堂に參じ、修養として工夫を積み、極力心肝を錬つた結果であらう。ぢーッと難處に安住し、その心境は、いよ〳〵朗廓たるものがあつた。

○マダ働けば、働けるであらうに、明哲保身の術を學び、いゝ加減にこの世に見切をつけ、これから益々禪道に精進しようといふのである。

○二十年の知音として、切に自愛加餐を禱らざるを得ない。

× ×

○城大の某博士、十二月三十一日と、正月元旦とに、ゴルフに行く。

○いくら何んでも、今日ばかりは連中はあるまいと思つてると、三々五々、ぞろり〳〵とやつて來る。

○コヽに於て感嘆して、『ウフッ、皆んな家にゐると、細君から叱られる連中ぢや』

○傍人『先生は、どうです』と一本突ッ込むと、『ウ、ワシは違ふ。ワシは、來客がうるさいので自發的遊動ぢや。ネー君、うちの家内は、よく出來てる奴だヨ』

婆さんである。

女のうす着

無題錄

別府八百吉

（京城日日新聞社）

海雲臺溫泉

元日と二日を海雲臺の溫泉にひたつた、荒井初太郎氏を社長とする合資會社の經營で、會社は溫泉を中心に五萬坪からの土地を有し約二十萬圓を投じてゐるといふ。荒井氏は海雲臺の溫泉は歐洲のどことか、山陽の三朝に次いで、ラヂウムの含有は世界第三だと吹いてゐる。泉質檢査の結果はさうなつてゐるが、そのラヂウムの濃度な含有がどれだけ身体に利くかは不幸?にして身体の弱くない自分には分らなかつた。舊臘落成の七萬圓の新館は、和洋客室整備し、夫れに社長の自慢するやうに馬鹿に宿料が安い、二食つき二圓臺から六圓臺、洋室の堂々たるものが四圓二十錢かで氣の毒な位である一歩外に出ると遠淺で、白砂の海岸に濤聲絶へず松木立をわたる風もあたたかい、室内に暖房の設備がないと思つてゐたら、設備が不要な程あたたかいのであつた。

館主荒井社長

恰も荒井氏も來てゐた、取引所の合同問題を病余の衰體に脊負ひ全仁川を向ふにまわして頑强に所信に邁往しつつある人、然し海雲臺では旅館の主人として臺所まで立入り世話をしてゐる、氏にも、主婦にも、氣付と批評をして呉れと言はれ、悪口と穴探しなら敢て人後に落ちない待つてゐたとばかり、かれこれと口でも云ひ、紙にも書いてわたすと、御主人の荒井氏が使用人に嚴命を下したこともあり、新館開設匆々で……と、お主婦が小生の注文にすぐ應じたりした、荒井主人の意見では、東萊のやうに俗化させたくない、家族的の清潔な土地に育てたいとあるその點に於て來投せる松寺竹雄氏や、矢鍋永三郎氏などには氣に入つたであらう。然し乍ら溫泉會社が營利的希望を有し、土地の値上りを欲するならば、化粧の者をゐつかしめぬといふのはどうだらうか。繁榮策として氏の所見は問題だらう。なんかとつまらぬ事考へたりする。お主婦が、小生の所へ來ていふ。

『組長さん――荒井社長の事――も取引所の何とかいふゴタゴタは、おやめになれば宜いのに――と思ひますが、止められぬのでしやうか?』

『死ななくては、やめられないさ』

『そんな者で御坐いませうか』

けだし、お主婦は、氏の健康を非常に氣づかつてゐるのであつた。小生が懇意さうだからとて、どうか一日でも永くゐるやうに、ゼヒ强要して呉れとたのんでゐた。斷はつてをくがお主婦といふのは、水のしたたるやうな丸髷の三十女ではない、五十は疾に越してゐるお婆さんである。

女のうす着

慣れるといふ事は、中々である。酷寒の夜の宴會などで、簑虫のやうに和服を着た大の男が、瓦斯ストーブを抱くやうにして震へてゐる。然し闇の花ならぬ明るい坐敷の花たる校書連は驚く程薄着である。はだ繻絆に、長繻絆に下着に袷、夫れで平氣である。われらの小宅の山の神を見ても、どうして過せるかと思ふ程着物はうすい。必ずしも伊達ではないらしい。また家計上の配意からでもないらしい。これは女達が慣れてゐる故である。寒い〳〵と云ふても、誰も顔には着物をつけない。然し顔に着物をつけぬからとて、風邪を引いた話は、まだ寡聞の爲か聞かない、慣れてゐるからである。慣れれば寒中でも裸體で居れる結論になる。但しさうはいかぬやうだ。

日本式の宴會

酒を嗜まぬためか、藝妓などに野心なく又野心をもつ柄でないためか、此頃日本流の宴會に興味を殆んどもたなくなつた。たまに宴會の相談を受けると『洋食が好いね』と、小生は即座に答へる。所が小生等のあつまりの連中の左利きに洋食黨が殖へて來た。宴會には御高話拜聽とか、何とかいふ口上や案内狀がつきものだ、然し宴席で何の御高話が出る。藝妓を中心に下らぬ莫迦話しの連續と、酒の無獣流しの連續である。料理は洋食や支那式に比し思ひ切りまづく、まづい變りに高價と來てゐる顔馴染のない藝妓がボカツと來てすわつて『いかゞ』などと、德利を出されると、向ふへ往けと云ひたくなる。お盃頂戴が多すぎるし

上にあつて地上を照してゐる時間が短いから寒いので、夏は太陽が

るのはエロスといふ小惑星が一月下旬に地球に近づく事です。

自發的遊動ぢや。ネー君、うちの家内は、よく出來てる奴だヨ』

酒をのまぬと邪宗のやうに云ひまくるものさへある。のめぬ者に酒を強ゆる事が一つの待遇法などと心得違ひをする頓馬もゐるやうだ夫れに切りがない。便所に立とうとしても、歸らせまいとてか網を張る人もある。恒例のあいさつがすんで、少ししたら歸つても好いはづだ。下らぬ酒の時間が小生などは惜しいのである。そこに行くと洋食はきまりはつくし、食べ物は好いし、主客の話も十分に出來る——といふと、日本流を思ひ切り貶すやうだが、小生だつて木の股から生れた男ではない、少數で顏馴染の氣心の知れた妓の侍る坐敷なら、嫌ひではない。まづい乍ら端唄の一つも出したくなる氣分も起る。

娘と若き先生

或る知合のはなしの要領

知合の娘は女學校の四年生、才色ともにすぐれてゐる。その娘の主任教諭は獨身で若く、いつかその娘を想ふやうになつた。教諭の母も娘を知つて教諭よりも一段あつく娘に惚れ込んだ。そんな事は夢想だにせず、知合は娘の進路について教諭に相談に行つた。そこで知合は教諭から娘の婚約の有無を聞かれ教諭の母から娘を懇望されて面喰つた——一體こんな事はありがちだらうか、又正當だらうか。

小生は云つた、獨身の先生と若い娘との間なら、恐らく世にも稀れな事例ではあるまい。又教諭としての態度は道義上面白くないかも知れぬ。然し人間としてのその人の望みは別に不法でも、怪しからぬ事でもあるまいと、知合は助平先生位の輕い憤りを初めはもつてゐたらしい。然し彼是れ話した末余程氣はやわらぎ氣味だつた。その娘に先生を先生として以外に愛慕する情熱を見出すならば二人は結ばれる事になるかも知れない。

兄

佐伯安政

（朝鮮商業銀行）

毎年のことながら一月になると兄のことが想ひ出されてならないそれも年と共にハッキリ意識されて來る。兄は昭和三年一月二十六日三十二才を一期としてこの世を去つた。余りに若くして逝いたそれ自体も私には堪え切れぬ悲しみであるが、わけてもとり遺された二人の幼兒の將來を想ふ時、不知不識涙が頰に傳はるのを覺える。當時急電に接して私が鄉里に見舞つた時には兄は既に私の顏さへ意識し得ない程の重態であつた。當時の私の手記にはこんな事が記されてゐる。

——『お前解るの、Yが歸つたよ』

『……』

『もう何にも解らない……』

流れる兄の汗を拭いて居られる母の面には云ひ知れぬ淋しさが漂つてゐた。

僅か二週間の間に皮膚の光澤は全く褪せて頰は削げ落ち凹むだ眼は光りすら失つてそれは餘りにも變り果てた姿であつた——そうして兄は遂にこの世から歸らぬ人の數に入つた。

——殊に就褥以來は寢もやらで日夜神かけて祈られた甲斐もなく久しい夢は脆くも破れて祖母と二人が生前の些細な事まで語つては泣き聞いては泣かれた。

『いくら泣いた處で何ともしやうがない、もう止めやう……』

と云つてはまた涙をハラ〳〵こぼされた——

悲しき想ひ出の記錄は中々盡き相にもない。空虛のやうになつた母が沈み行く夕陽を眺めてボンヤリ物思ひに耽つてゐる樣子を暗然として私は幾度となく涙を拭つて見たことであらう。

あれから夢の樣な三年の歲月が流れた。二人の遺兒は今祖父母の許に何も知らず健かに成長してゐる。長男が六才、妹が四才になつた。そして私達が歸鄉すると朝鮮の叔父ちやんと叔母ちやんが歸つたと云つて近所隣りを布令廻はして大喜びで歡迎してくれる。彼等は今何事も知らずにズク〳〵延びてゐる。たつた二人の可憐な兄妹よ、どうぞ元氣で成人してくれ。

涙よはき母とはいつかなりたまひぬ兄ゆきし後の悲しきひとつ

時の私の手記にはこんな事が記されてゐる。

――『お前解るの、Yが歸つた日夜神かけて祈られた甲斐もなく久しい夢は脆くも破れて祖母と二人が生前の些細な事まで語よ、どうぞ元氣で成人してくれ。

涙よはき母とはいつかなりたまひぬ兄ゆきし後の悲しきひとつ

隈侯

奥永政輝（朝鮮運送會社）

京城雜筆

濱口首相の東京驛頭に於ける奇禍によつて本年の日比谷座は一脈しそうな形勢だ。

首相の代理と總裁の代理とを置いて一人前の仕事をするわけであり、民政黨内の紛糾等を考へると濱口氏の偉大さを、深く感ぜられる。民政黨内閣の壽命は當分大丈夫だ、現在世界的の大不景氣に直面せる日本には、濱口内閣の如き緊縮内閣は必要であるから。國民が支持する事は間違ないだろう。

丁度大正三四年頃、報知新聞に『代議士銘々傳』と云ふのを書いて、代議士を紹介した事があつた。小學校を卒業間際ではあつたけれど、世の中に今迄偉いと思つてゐた學校の先生よりも、未だ偉いものに、代議士と、國務大臣がある事を始めて知つた。

大正四年三月の總選擧は時の首相である大隈伯が先陣に立つて、與黨である同志會のため、南船北馬、全國大遊説を試み、而も到るところで車中演説までしたのを記憶する。

横濱市は、定員二名のところ、同志會より島田三郎氏、平沼亮三氏を公認し、政友會よりは、若尾幾之助氏を公認したため、市中至るところに大白熱戰を演ずるに至つた。

島田氏は衆議院議長たりしこともあり、雄辯家として、當時の議會に稀に見る高士であり、平沼氏は、横濱生え抜きの名望家の息、一方若尾氏は、横濱否日本に於ける豪商であり又若尾財閥の大立物幾造氏の家の出であり、どちらに軍扇を揚げられるか、市民にとつては當時最大の興味であつた。

市中では各派が巴戰を演じた。

同志會候補者のために、首相大隈伯が來援する旨の選擧ビラが、至る所に貼り出された。明治に於ける偉人の偶像のやうに思はれてゐた、大隈伯が來ると云ふので、横濱市民の政治的意識は百パーセントに達し、彌が上にも選擧感覺は沸騰した。

愈々大隈伯の來濱の日が來た、横濱市中は大騒ぎだつた、僕は丁度、東京から横濱の伯父の家に歸つてゐた、國勢大臣の偉いと云ふ事を知つて間もない時ではあり、大隈伯の顔なりと見たいと、演説會場の横濱座に行つて見た。驚くべし、開會二時間前なるに聽衆は場外に溢れ數百名の人々が警官隊とせり合ひをそこ、こゝで演じてゐるばかりでなく、人數は多くなる一方で、遂に大群衆となつて場前の通路は完全に遮斷されて仕舞つた。

其時に始めて學校の先生よりも大臣は確かに偉いなと頭に刻み込まれたものが現實となつて來たわけなのである。其時の群衆の一人に自分のあつたことを思ひ出すと變な氣持がする。

大隈伯の自動車が、横濱座の近くに來たが群衆に遮られて會場に近づく事が出來ない。警官隊の必死の整理によつて、漸く伯を乘せた自動車が會場前に來た。すると群衆は、一齊に『大隈首相萬歳！』を三唱した。そして大隈伯を胴揚げしそうな形勢に變じた、とても口に出せない位に熱狂した歡迎振であつた。

その時、大隈伯と同乘してゐた島田三郎氏は、滿面に感謝の微笑を湛たへて、突如車上演説を始めた、その雄辯に、群衆は完全に醉つて仕舞つた。演説が終ると同時に氏は大隈首相を紹介した。と伯は不自由な身体を杖に支えて自動車上に立ち上つた。拍手は萬雷の如く湧き起つた。伯はその拍手の鎮まるを待つて

『諸君！』と開口一番した時、萬雷は林の如き靜けさにかへつた。

『諸君！』『……あるんである』を連發して演説を終つた。群衆は我に歸つて、拍手した。掌に龜裂を生ずる位、力一ぱいの大拍手であつたと思ふ。

首相の演説を聞いて滿足した群衆は、直に自動車の通路を開けた自動車は會場入口に横付けられた伯は四五の人々に護られて會場に入つた。

今迄同志會一名、政友會一名の當選豫想であつたが、開票して見ると驚くべし、同志會は平沼氏が最高點、次が島田氏で二名とも、當選した、そして若尾氏は無殘！落選した。

隈伯の偉大さを、今更らのやうに横濱市民は語り合つた。

私は今尚當時の印象を忘るゝことが出來ない。

京城雜筆

鷄鳴

久松前平（京城日報社）

ば不景氣もない商法、慶大出の一店員でも世間のものが就職難とあえぎなから新年を迎ふるのに、愉快な旅をつづけつゝ迎奉するのです。努力〳〵、他人のせいではない、惠まれるも、惠まれざるも總て自ら自身のなすわざだと敎へられるではありませんか。稼ぐに追ひつく貧乏なしとは眞理だと信ぜざるを得ません。

×

コケコッコウ、歳德さまは一年中の不平不滿も不仕鱈も、惡も持ち去つて下さいました、元旦さまは、純眞へ、無邪氣へ歸して樂天世界へ進め〳〵とおつしやるのでせう。コケコッコウ！コケコッコウ！

芽出度き新年を迎へるであらうと思へば小天地に不幸不運だの何だのと不平不滿だら〳〵で新年を迎ふる大馬鹿を笑はざるを得ぬではありませんか。同畫伯朝鮮での靈のこもつた作品は『金剛山』『大瀑布』『お能』の三大作となつて朝鮮神宮に奉納されてあります。

×

花信、納涼便り、紅葉の節と旅に見、旅に聞くうちに早くもこゝ本洲東北の地方は雪に見舞はれ申候。燕に比し雁を羨みつゝも忙しく暮れて遂に御無音に打ち過ぎ申譯も無御座候。軈てまた昭和六年の新春拜眉の期も到ることゝ切に御自愛を祈上候（山形市滯在中）

昭和五年十二月　高井儀平

×

慶應大學を出ると直に名取商店の一店員として採用され、商品全部を自身で脊負つて北は樺太から南は南洋、西は朝鮮と年から年中歩き廻つてる人です。名取商店は本據を東京に置いて居るが、主として水晶細工等の工場を有し賣れる丈のものを自家工場で製作し極めて薄利で提供してるのです。そして店員は前述の如くして全國を賣り歩く。それも押し賣りでなく現金賣りでなく傳票での月賦販賣なのです。しかも平凡極まる有り觸れの商品許りです。一ヶ年の賣り上げ數百萬圓、好景氣もなけれ

×

渡島以來二十五箇月、長い樣でもあり、短かい日數の樣にも思はれます。此間多少の研究も遂げ、發表も致しました、併し取り立てて御報せ申上げる程の事も爲し得兼ねまして甚だ慚愧に耐へませぬ茲に皆々樣の御安祥を祈り上げつゝ離臺、希望の地へ向つて一歩を進めます。漂浪兒等は何れの土地で新年を迎へますやら、巴里あたりから花のお便りいたしますまで暫くの間御無沙汰をいたします、（臺灣にて）

昭和五年十二月　那須雅城　同富士子　同經彦

×

これは東京の畫伯雅城で昭和二年末長女富士子、長男經彦の二愛兒（義務敎育中にあつた）と筆を携へて漂然と來城、約一年半余滯在して朝鮮の如實を畫にした人です。家庭に惠まれざるに發奮して右の次第で世界繪行脚を志し朝鮮を經て臺灣に入り、愈々大陸を突破して歐洲に向はむとする便りです。その意氣や誠に壯なれども自身を顧る時に誠に淋しき人生を嘆ぜざるを得ざるものがあるではないか。然るにだ彼は常に淸新に潑溂たる意氣に生きむ所を世界中に求めつつあるのです。彼は更に大陸の何れにて愛兒二人と筆と共に

◈菊のなごり

三木一彦

○橋本豐太郎氏の令孃君子樣は昨秋十七歳を一期として、忽然白玉樓中の人となられた。

○『菊のなごり』といふは、その際學友やら、先生達から送られた弔文、弔辭、弔句などを集め、それを一卷とし、橋本氏がこれに名づけられたもので、まことに可憐な小冊子である。

○大邊よく出來たお孃さんであつたことは、學友達の悲嘆にも、また入學以來、ズーッと第二高女の首席で通されたことでも判る。

○この一卷、我々が讀んでも、毎篇悉く落涙の種子である。況んや御兩親の胸中は……。

○記者は、切に橋本氏御夫婦の御加餐、御自愛を祈つてやまぬものである。

いか。然るにだ彼は常に清新に潑溂たる意氣に生きむ所を世界中に求めつつあるのです。彼は更に大陸の何れにて愛兒二人と筆と共に

現金賣りでなく傳票での月賦販賣なのです。しかも平凡極まる有り觸れの商品許りです。一ヶ年の賣り上げ數百萬圓、好景氣もなければ

や御兩親の胸中は……。

○記者は、切に橋本氏御夫婦の御加餐、御自愛を祈つてやまぬものである。

京城雜筆

琉球の人と自然

澤村五郎（大阪朝日支局）

言語學者チャムバアレンは琉球を――浮べる城――だといつたさうだ。アンドレーと呼ぶドイツの植物學者は――『わが愛する琉球の熱帶的風景の最も好ましい特色は、眞夏の夕月夜であらう、その月明で新聞や雜誌を讀むことが出來る。特に那覇附近の風光は伊太利のミラノそつくりだ』――と詩的に琉球を謳歌してゐる。

近時、南島研究の盛んな折柄、私は秘かに思慕の情を琉球にはせてゐたところ、はからずも、那覇出張の社命をおび、滿月蕭條たる一月初旬の朝鮮を後に、蕃瓜樹と龍舌蘭の青々と繁る南島琉球に出張した。

勿論多忙な社用を持つてゐる身の、心ゆくばかり南島情緒を味得することは出來なかつた。ましてや孤島苦と呼び、蘇鐵地獄と嘆く經濟的苦悶の琉球のエッセンスにふれる餘裕を持たなかつた。私は路傍のエトランゼとして琉球の特異性にのみ驚異の瞳を見張つたのかも知れぬ。がこの旅人の琉球觀こそ自分自身の持つ美の本質から近視眼になりがちな地元の人達に啓示するところのものがあるかも知れぬ。

まづ琉球を訪れて最初に驚嘆するのはその墓場の立派なことであらう。私は那覇入港の直前、サロンデッキに立つて那覇市近郊の丘陵に立ちならぶこの墓場の展望に全く魅惑させられてしまつた。屋狀形をなして遠くから見るとピラミットに似たものや、圓筒狀をして上部がふくよかに丸みをおびたのが數限りなく丘陵を掩うてゐる樣は、夢で見たエジプト風景で、東洋にしかも日本の内にこんな景觀があらうとは曾て想像すらした事がなかつた。石造であるだけに白堊の建築物を展望するやうでもあり――なんと素晴らしい偉觀――だと呼ばずにはをられなかつた上陸したその日に私は友人に伴れられてこの墓場を見物に出かけた墓の樣式は個人個人を葬る他府縣のそれとは異なり、逝ける一家の人々が打寛ろいで永久に安住するやうにとあくまでも家族的に出來てゐる。つまり研ぎ磨かれた石で墓屋がつくられ、正面が一家の長男を、左右に次男三男、さては女性達の遺骸を安置するのである。死亡すると死骸をそのまゝ墓屋に入れ入口の石扉を密閉してさへおけば、一年たたぬ内に完全に綺麗な白骨になつてしまふさうだ。

○

墓屋の周圍は立派な石垣で他家の墓屋と區別される。そして甲家は乙家の墓より規模の大と外見の美を誇り、乙家は他日、甲家にまさつた墓を築いて一家の榮達を示さうと家業に勵むのだといふ。

墓には龜甲型と破風型の二つがあり圓筒狀をして上部が龜の甲そつくりなのが龜甲型であり、マッチ箱の上に屋根を造つた樣な形の墓が破風型であつて遠くから眺めると小さいピラミットに似てゐる龜甲型は平民の墓、破風型は士族の墓と昔は區別されてゐたさうだが、今はそんな差別がなくむしろ龜甲型の墓が規模も大きく樣式も珍奇なので外來者の視線をひきやすい。『龜甲型と呼べば如何にも平凡ですが、よく御覽なさい女性の生殖器に似てゐるはずです。母胎から出て母胎に歸る自然の妙法をうがち得てゐるではありませんか』――と友人に說明されて私は性の實識が死者を葬る宗教的儀禮の墓場にまで及んでゐることを知つて微苦笑を禁ぜずにはをられなかつた。

墓場は住宅と共に沖繩縣人にとつては大切な不動產の一つで、二百圓以上から一萬圓以内の時價をもつてゐる。だから家計が不如意になると五千圓相當の墓場をもつ人は、その墓場を賣り拂つて二千圓位の墓場を買ひ求め差引いて殘る三千圓で家政の整理をすることもある。現に私の訪れた墓の一つに賣物と墨痕あざやかな標札がかかげてあつた。賣物がある以上、そこに墓場のブローカーが介在するであらうことも想像できよう。

ブローカーはたいてい良家の寡婦であるといふ。貧しい家の女では信用がおけぬので財的に信用をもつ寡婦達は、A家の隆盛とB家の沒落とを巧に忖度し賣買の橋渡しをするのである。祖先崇拜の觀念からかく極度に墓場が壯麗化され、墓場の面積が擴大すると共にとかく景勝の地を占めてゐるので那覇市の如き先年墓地の移轉を計劃したところ、市民大衆の大反對

京城雜筆

をうけて遂に一頓挫してしまつたとは、都市の膨脹と墓場の擴大とが衝突した二律背反の現實相で琉球の特異性を雄辯に物語つてゐるではないか。皮肉な事だと思つたのは、三千の美女を有してゐる那覇市辻遊廓の背後は見渡すかぎりこの墓場であることだ。夕闇ほのかに迫るころになると那覇の若者達は、あの强烈な南蠻酒『泡盛』をたづさへてまづこの墓場の若草の上に腹匍ひ琉球歌や八重山民謠もしくば即興詩などを唄ひながら微醉を購ひ、やがて蒼空に星が瞬き始めるころを見計つて遊廓にくり込むのが風習の一つになつてゐる。墓場から遊廓への進出——如何にスピード時代とはいへこの素晴らしい飛躍には驚かされずにはゐられまい（以下次號）

女性風景

水井れい

川長の切り盥のきれいに積んである玄關に立つて、ごめんなさいごめんなさい、と何遍も呼んだ。朝の日がたたきの半まで這入り込んでゐる玄關なのに奥はひつそり閑として何の返事もない。

『ごめんなさい』

と、また呼んだ。はあいといふ應へに出てきたのは手拭を姉さん冠りにしたここの女主人、美人だと聞されてゐたから一度に解つてしまつた。

『主人は今ゐないんですが…』

そんなら又來ようと私は引き返した。なる程川長のおかみは美人だと思つてしまつた。

丈の高いすらりとした處が第一條件だ、さうして額から眉にかけての美しさと、もみ上げの長さの作る線の美、もちろん、目も鼻も重要な要件だが水際だつて感じられるのはこの線だ。皮膚の水々しい、黑髪のうるはしい女性だともいへる。

此頃は度々會ふのだが、俯いて帳場に座つてゐる丸髷姿はほれぼれする。この人に束髪は似合はないといふより美を臺なしにする。

○

商銀和田頭取の夫人をどうして讀者に髣髴させたらいゝかと思ひなやんでゐる。例へば白牡丹のやうだといつたらふさはしくないだろうか。薔薇といふには少し感じが異國的だ。やはりうす紅をふくんだ白牡丹の花だと想像していただきたい。夫人も又黑髪の美しい女性だ。その皮膚の下には匂やかな血潮が流れてゐる（金縁の目がねもこの場合、黑髪と白い皮膚とによつてノーブルな色調を出してゐる）

豐かな長いもみ上げの美しさ、夫人の束髪はこのもみ上げの美を消さない程に輕く束ねられてゐる

夫人とむかひ合つたのは暑い夏のさかりだつたが、清純なをとめの感じがした。夫人が畫かれる繪よりも夫人自体が繪ではないかと思つた。和田頭取の審美眼もさすがである。

夫人とは途上で、それからは度々會つた。これは初秋の雨上りの宵の事。人込みにまぎれて丈高い美しい女性がゆく。華やかな丸髷姿。黑地の紬に黑いあしだ、蛇の目の傘を持つてやはり紺飛白の眉目美はしい青年を連れてゐた。和田夫人と令息だと思つた。何といふ澁い純日本的なよそほひだらうと思つた。

飽くまで豐麗で清純な感じは安らかな美を訴へる。夫人の日常にはもつといろ〳〵な美しいポーズが見られる事と思ふが、これは和田氏の專有にまかせやう。夫人が人間的に生きられるには餘りに美の要素が多過ぎる。

◈現代を觀る

三木一彦

○大學研究室のMさんと、Sさんとが、人の噂に、三越の繁昌を聞いて、一日見物に出向いて來た

○店内方々を見物して——女店員の美くしさや、婦人來客の綺羅びやかさに驚嘆して——さて、三階の一隅で休憩しながら、『僕、本日始めて現代を直視したネ』、『ウ、御同感さ……』

○兩學兄は、悠然たる心境で、シガーを吹かしてゐました。

○と、芳紀十八九の、匂ひこぼれるやうな女店員が現はれて、いとしとやかに、『誠に申上げ兼ねますが、掟になつて居りますどうぞ御煙草を御遠慮下さいませ』

○二人の少壯學者、口あんぐり『ハーン……なる程ネ』

○遂に呆々の體で、現代の直觀を中止。『オイ、やつぱり我々は萬年床にもぐつて、本を讀んでゐる方が安全だよ』

此頃は度々會ふのだが、俯いて帳場に座つてゐる丸髷姿はほれぼれする。この人に束髪は似合はなと思つた。

田夫人と令息だと思つた。何といふ澁い純日本的なよそほひだらう

を中止。『オイ、やつぱり我々は萬年床にもぐつて、本を讀んでゐる方が安全だよ』

最も古き歴史と
最も良き品質

三十年来
おなじみの
最上醤油

京
カクキ京
最上醤油

香味
佳絶
ホシ大ソース
大塚醸造
永登浦

お上品な
料理には
淡口醤油

京
カクキ京
淡口醤油

一度御試用
のほど願上ます

皮膚泌尿
花柳病科
渡邊醫院
院長 渡邊晋
京城黄金町入口日本生命裏
診察十二時半マデ及ビ夕刻

内科
婦人科
今本醫院
（京城旭町一丁目）
院長 今本義胤

溫陽溫泉
神井舘
設備は整頓し
居心地最も可

溫陽溫泉
溫陽舘
溫陽にて最も
古き旅館です

昭和六年一月廿五日印刷
昭和六年二月一日發行
本誌定價
一ケ月（一部）四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓
發行兼編輯人 京城府和泉町一七〇 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
發行所 京城府和泉町一七〇 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

東京横日報

東京日日新聞

資本金五百萬圓
朝鮮火災海上保險株式會社
社長 谷多喜磨

御東上の際は御立寄を
洋食 支那料理 泰明軒
東京芝新櫻田町
議院とは目と鼻

京城雜筆 (第百四十四號)
大正十三年一月二十九日 (第三種郵便物認可)
昭和六年二月一日發行 (毎月一回一日發行)